

工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事

Pio-engineers in Modern Japan
Rintarō, Fuji, and Giichi, Three Generations of Tanakas

東京大学総合研究博物館

The University Museum, the University of Tokyo (UMUT)

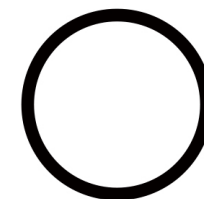
2019



Pio-engineers in Modern Japan

工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事

東京大学総合研究博物館 2019



工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事

東京大学総合研究博物館
2019

Pio-engineers in Modern Japan
—Rintarō, Fuji, and Giichi, Three Generations of Tanakas

The University Museum, the University of Tokyo (UMUT)
2019

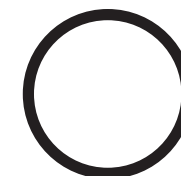
小石川分館特別展示

工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事

会期 2017年2月4日-6月11日

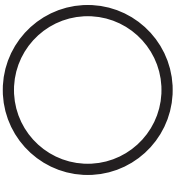
会場 東京大学総合研究博物館小石川分館1階

主催 東京大学総合研究博物館



目次

ごあいさつ	7
『工学主義―田中林太郎・不二・儀一の仕事』によせて 寺田鮎美	11
展示物総目録	17
田中林太郎	19
田中不二	39
田中儀一	73
展示会場風景	97
参考文献リスト	103
謝辞および展示協力者一覧	109
●附録	
田中儀一旧藏品展示履歴	112
田中儀一旧藏品関連イベント	115
小石川分館紹介	116





この度、J Pタワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」にて2018年11月17日に開催されたシンポジウム『工学主義と近代日本』の報告書刊行と連動し、東京大学総合研究博物館小石川分館特別展示『工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事』（会期：2017年2月4日から6月11日）の展覧会図録を刊行することになりました。

田中林太郎（安政3–大正13〔1856–1924〕）・不二（明治10–大正11〔1877–1922〕）・儀一（明治35–昭和60〔1902–1985〕）は、江戸から明治時代にかけて活躍した発明家で「からくり儀右衛門」と呼ばれた田中久重（寛政11–明治14〔1799–1881〕）の家系に連なる親子三代です。彼らはそれぞれ、皇居や東宮御所の造営、わが国最初の日本語による機械設計の教科書執筆、帝国議会議事堂の内部装飾といった、近代日本における「工学」分野の発展を象徴する重要な仕事に携わりました。

東京大学総合研究博物館は、日本における工学分野の発展を支えた田中家に関係する、文書・写真・物品・書籍等から成る約千件の複合的な資料体を所蔵し、調査・研究を進めています。この資料体の中心となるのが、林太郎・不二・儀一の親子三代です。本展覧会では、本資料体を初めて特別展示として一般公開するにあたり、林太郎・不二・儀一の主要な業績に関わる資料を選び、彼らの仕事を紹介しました。

「工学」とは、明治期の近代化において西欧から輸入された学問を指すと同時に、日本の近代国家建設を担った西洋由来の技術でありました。一方、「エンジニアリング」の訳語に用いられた「工」とは、「たくみ」と訓読みされるように、小さな細工ものから大きな建造物まで、それを形にする「たくみな」技術力を表し、西洋化以前から日本に存在していた概念でした。日本の在来技術を展開しながら、西洋の近代技術を学び、取り入れた田中久重が、日本の近代技術発展の祖に位置づけられることを考え合わせると、田中家の系譜に連なる林太郎・不二・儀一の仕事は、「工学」が日本に根づいていく過程を見る上で、非常に興味深い対象であると言えるでしょう。

本展覧会では、三人の主要な仕事を一度に概観することにより、近代日本における工学の黎明期から発展期までという一つの時間軸を浮かび上がらせるとともに、土木から、建設、材料、機械、建築、意匠・デザインまでという工学が扱う領域の多様性を示しました。このように、本展覧会が着目したのは、工学という学問分野や技術史発展に、日本の近代化の文化的「構造」を読み解く手がかりを得ることができるのではないかという点にありました。この俯瞰的視点は、本展の開催会場となった、「建築博物誌／アーキテクトニカ」をテーマに常設展示を公開する小石川分館の特別展示として、「アーキテクチャ」という語を事物や事象の諸原理を束ねる概念として用いることに由来したものです。

シンポジウムのタイトルに掲げた「工学主義」とは、先に本展覧会のタイトルおよびキーワードとして用いたものであり、林太郎・不二・儀一という三代の主要な仕事から浮かび上がる、彼らのパイオニアとしての進取の精神と、取り巻く人々を含めた集団としての協調の精神を表しました。英文タイトルに用いた造語「Pio-engineers」とは、この「工学主義」の精神をもつ人々を指しています。

米国、英国、そして日本の研究者5名によるレクチャーとディスカッションが行われたシンポジウムは、「工学主義」の精神に連なるさまざまな人物やその仕事を手がかりに、日本の近代化プロセスを多角的に読み解きながら、日本の過去、そしてそれにつながる現在や未来の姿について考えるというテーマに関心をお寄せいただいた方々の参加を得て無事に終了し、その記録を報告書として纏めることになりました。それと合わせて刊行される本図録が、このテーマを引き続き掘り下げていくための一つの資料集として、関心を共有する人々に役立つものになることを願っています。

東京大学総合研究博物館
2019年3月

小石川分館特別展示



工學年表

Pio-Engineers in Modern Japan — Rintaro, Fuji and Gichi, Three Generations of Tanakas

田中林太郎・不二・儀一の仕事

2017.2/4sat—6/11sun

東京大学総合研究博物館小石川分館
KOISHIKAWA ANNEX, THE UNIVERSITY MUSEUM, THE UNIVERSITY OF TOKYO

時 間：10:00—16:30（入館は16:00まで）

休館日：月・火・水曜日（いずれも祝日の場合は開館）

会 場：東京大学総合研究博物館小石川分館1階

主 催：東京大学総合研究博物館

入館料：無料

お問い合わせ：03-5777-8600（ハローダイヤル）

um.u-tokyo.ac.jp



田中不二／自著『機械製作法』序文用飾り文字原図／大正8年以前



『工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事』によせて

寺田鮎美

田中儀一旧蔵品

最後の所有者である田中儀一の名を冠した田中儀一旧蔵品は、田中家に由来する文書、写真、物品、書籍等から構成され、工学関係だけでなく、歴史や美術資料など多様な分野にまたがる。資料数は合わせて千件を超える。本展覧会は、東京大学総合研究博物館所蔵の田中儀一旧蔵品の中から、工学関係資料に着目し、皇居や東宮御所の造営に携わった林太郎（安政3–大正13 [1856–1924]）（図1）、わが国最初の日本語による機械設計の教科書を執筆した不二（明治10–大正11 [1877–1922]）（図2）、帝国議会議事堂の内部装飾に参画した儀一（明治35–昭和60 [1902–1985]）（図3）という、「田中家」親子三代の仕事を紹介するために企画された。

私が初めて田中儀一旧蔵品に接したのは、2013年8月に、J Pタワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」の常設展示室内にて、2005年および2007年に寄贈された資料体の中から工芸品類を取り上げ、「帝室工藝の粋——田中儀一旧蔵品より」と題した展示を行った時である。展示物の中に、宮中の慶事の際に特別な引き出物として制作されたボンボニエールがあった（田中儀一旧蔵品展示履歴112頁参照）。

そのうちの3点のボンボニエールについては、どの慶事の際にそれらが下賜されたのかが分かる、帝大工科教授の不二宛の招待状を本資料体のなかに見つけることができた。招待状の附属物として、宮

中饗宴参内券や車寄せの整理券、ドレスコードの注意書きまで残っているのを目にし、ボンボニエールの工芸的な価値のみならず、それにまつわるものを合わせ、複合的に学術的な価値を形成していることが非常に面白いと思った。

さらに、2014年に追加寄贈を受けた資料体には、田中家に関係する人物のたくさんの写真資料が含まれていた。例えば、帝大工科教授を務めた不二の関係では、東京大学の学史資料としての価値が見いだされる、当時の帝大教授陣の交遊を示す写真もあった。しかし、そのようないわば「公」の観点では扱いきれない、節目ごとに記録された「私」的な家族写真も多く、写真の社会史として興味深い資料体であると感じていた。

そこで、2015年8月に、インターメディアテクで実施している演劇創作プロジェクトのパフォーマンスイベント「Play IMT 3」の際に、愛をテーマにした構成ユニットの一つとして、「愛の家族写真」というタイトルをつけ、不二を中心とした家族写真を用いて、一日限定のインスタレーションを行った（展示履歴113頁参照）。

このように、田中儀一旧蔵品とは、資料体の点数や分野の多様性から、非常にユニークな大学博物館コレクションであり、さまざまな可能性を有している。それゆえ、本資料体の調査および研究は今も現在進行形にある。そこで、今後の調査研究を進展させていくために、今日まで残された本資料体の存在とその魅力の一端を、現段階で、より多くの人々に伝えることに意義があると考え、特別展示

『工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事』として初めて本格的に一般公開することになった。

田中家の系譜

田中儀一旧蔵品の中核を占めるのが、今回の特別展示のテーマに取り上げた工学関係のものである。その理由は、林太郎・不二・儀一という親子三代がそれぞれ、本稿の冒頭に列挙したような、近代日本における「工学」分野の発展を象徴する重要な仕事に携わってきた人物であることによる。彼らの足跡は、この三代が連なる田中家が「からくり儀右衛門」と呼ばれた田中久重（寛政11–明治14〔1799–1881〕）（図4）の系譜であると聞けば、よりいっそうなるほどと首肯されるかもしれない。

この初代久重は、久留米出身で、江戸から明治にかけて活躍した発明家、技術者として知られている。からくり人形や万年時計の製作では日本の在来技術を展開し、後に欧米の近代技術を学ぶと、佐賀藩精錬方や長崎海軍伝習所で蒸気機関車や蒸気船の製造を試みた。このため、日本の近代技術発展の祖の一人として、必ずといってよいほど名前が挙がる人物である。国立科学博物館や江戸東京博物館、そして東芝未来科学館の常設展示で見たことがある人も多いだろう。

初代久重の弟子で田中家の養子となった二代目田中久重（金子大吉）（弘化3–明治38〔1846–1905〕）（図5）は、廃藩置県後に東京に移住した初代久重に伴われ上京し、電信機械製造等の東京での事業とともに携わり、初代久重の死後、芝浦に田中製造所を開いた。この経営が、後に三井へと譲渡され、芝浦製作所への改称を経て、現在の東芝につながっていく。このように、二代目久重もまた、田中家の系譜として、日本の工業史の分野で比較的名前が知られてきた。

一方で、林太郎・不二・儀一の系譜は、彼らの関わってきた仕事の大きさに対して、これまであまり知られてこなかったと言える。その理由の一つは、林太郎の養父にあたる二代目田中儀右衛門（文化13–元治元〔1816–1864〕）（図6）の早世にあるかもしれない。

この二代目儀右衛門とは、初代久重とともに活



図1
田中林太郎肖像写真
（集合写真より部分）
佐賀縣立病院横オカベ撮影
大正10年（1921）4月25日



図2
田中不二肖像写真
根岸政一撮影
明治42年（1909）6月29日



図3
田中儀一肖像写真
（集合写真より部分）
撮影者未詳
昭和18年（1943）1月

躍した人物で、元の名を浜崎岩吉と言い、久重の甥で養子、娘・美津の夫にあたる。佐賀藩では第十代藩主の鍋島直正（閑叟）（文化10–明治4〔1817–1871〕）に重用され、父以上の働きをしたとも言われている。しかし、元治元年（1864）、息子の岩次郎とともに、不幸な出来事により48歳で急逝してしまう。

翌慶応元年（1865）、初代久重の学友であり佐賀藩精錬方の同僚であった中村奇輔（文政8–明治9〔1825–1876〕）の次男・林太郎が9歳で二代目儀右衛門の養子となり、後にその娘・峯千代と結婚する。この背後には、二代目儀右衛門の死を大いに悼んだ閑叟公の配慮があったという。幼少であった林太郎には、初代久重の弟子で、後に工部省技師を務め、電信技術者として名を残した田中精助（梅川重泰）（天保7–明治43〔1836–1910〕）（図7）が後見



図4
初代田中久重肖像写真／撮影者未詳／裏書きには明治15年（1882）11月

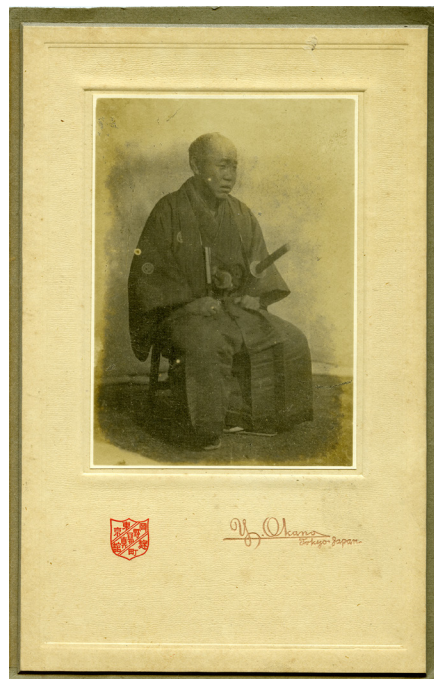


図6
二代目田中儀右衛門肖像写真／岡野写真館撮影／
大正6年（1917）1月複写



図5
二代目田中久重肖像写真／丸木利陽撮影／
明治22年（1889）以降



図7
田中精助および息子・重雄肖像写真／玉松撮影／
明治期

人についた。

一方、二代目儀右衛門の死後、初代久重の弟子であった金子大吉が、慶応元年（1865）に初代久重の養子となり、後に二代目久重を名乗る。もし、二代目儀右衛門がもう少し長生きしていたとしたら、林太郎の運命は変わっていたかもしれないとするのは考えすぎであろうか。

不二もまた、明治27年（1894）に林太郎の養子として田中家に入り、明治34年、林太郎の娘・芳子と結婚する（図8）。佐賀県士族で、近代様式ガラスの基礎を日本に広めた技術者として知られる藤山種廣（生年未詳–明治19〔1886〕）の次男として生まれた。兄の常一（明治4–昭和11〔1871–1936〕）（図9）もカーバイド工業を開拓した工学博士として知られた人物である。

儀一は、この不二・芳子夫妻の長男として生まれた。「儀」の字を命名したことから想像するに、田中家待望の男子誕生だったことだろう（図10）。

このように、林太郎・不二・儀一の系譜、そして田中家とは、初代久重以降、単純な一本線を辿るのではなく、周辺の技術者とともに近代日本の工学発展に寄与してきた、興味深い集団を形成しているのである。

林太郎・不二・儀一の仕事

林太郎は、明治8年（1875）に工学寮に工学専門で官費入寮を申しつけられると、明治14年に工部大学校機械科を三期生として卒業する。言うまでもなく、工部大学校は日本初の本格的な官製高等教育機関であり、少数精鋭のエリートが養成された。

卒業後すぐに、林太郎は工部省技手に任命され、明治15年には皇居御造営事務局に出仕すると、皇居（戦災により焼失した明治宮殿、明治21年落成）の造営に参画し、暖房設備を担当する（展示物総目録26–27頁参照）。その建設工事の延長線上で、二重橋（正門鉄橋、明治21年竣工）の現場監督も務めた（同24–25頁参照）。

さらに、工部大学校造家科第一期生であった宮内省内匠頭の片山東熊（安政元–大正6〔1854–1917〕）のもと、東宮御所（現迎賓館赤坂離宮、明治42年竣工）の暖房設備を担当した（同

32–33頁参照）。本書20頁の肖像写真は、明治34年、林太郎が46歳の時、東宮御所御造営局技師に任命された年に撮影されたものである。

不二は、第一高等学校工科を経て、東京帝国大学工科大学機械工学科を明治34（1901）年に卒業する。在学中の第三学年次には、同学年の機械工学科で唯一の特待生に認定されるほど優秀であった。

卒業後は同学科で講師、助教授として教鞭を執り、明治39年に、わが国最初の日本語による機械設計の教科書となる『機械設計及製圖』前編および後編を同僚の内丸最一郎（明治10–昭和44〔1877–1969〕）との共著で出版する（展示物総目録42頁参照）。本書40頁の肖像写真は、その翌年の明治40年、不二が29歳の時に撮影されたものである。

明治41年から3年間は、文部省の命で機械工学研究のため英・独・仏へ留学する。帰国後の明治44年には教授となり、機械工学第二講座、応用力学講座の担当となる。大正2（1913）年および4年に『應用力學』第一編・第二編を（同43頁参照）、大正8年および逝去後の12年に『機械製作法』第一編・第二編を出版し（同44頁参照）、専門家教育に貢献する日本語の教科書を次々と世に送り出した。

儀一は、早稲田大学付属第一早稲田高等学院理科を修了後、早稲田大学理工学部建築学科に入学、昭和3（1928）年に卒業した。父の不二が逝去したのは、大正11年（1922）、儀一がまだ20歳の時であった。このことが、二科会などで活躍した洋画家・曾宮一念（明治26–平成6〔1893–1994〕）に中学時代から絵を学び、画家を目指していた儀一にとって、その道を断念し、別の進路選択へと向かうよう影響したことは想像に難くない。

儀一は大学卒業後すぐに、大蔵省営繕管財局の職員となる。翌昭和4年には、幹部候補生として千葉鉄道第一連隊に入隊するが、同年に除隊、昭和5年には再び営繕管財局に雇用され、意匠設計主任・吉武東里（明治19–昭和20〔1886–1945〕）のもとで、嘱託として帝国議会議事堂（現国会議事堂、昭和11年竣工）の内部装飾の仕事に加わる。本書74頁の肖像写真は、儀一が26歳頃、鉄道連隊時代のものである。その前に営繕管財局にて既に吉武に出会い、議事堂の仕事に関わることがわかっていた



図8 田中不二（中央）・芳子（左）婚礼写真、右は母・峯千代／江木松四郎撮影／明治34年（1901）11月11日



図9 藤山常一（後列右）、妻・清子（前列左）および田中不二（後列左）・芳子（前列右）肖像写真／小川一眞撮影／明治37年（1904）2月10日



図10 田中家集合写真、後列左から2番目が林太郎（53歳）、後列右から2番目が不二（32歳）、前列中央が儀一（5歳10ヶ月）、前列右端が芳子（29歳）と息子・博次（1歳4ヶ月）、前列右から2番目が峯千代（46歳）と孫・耐子（3歳10ヶ月）／佐藤福待撮影／明治41年（1908）5月10日

*写真所蔵はすべて東京大学総合研究博物館

のではないかと何わせる鉄道連隊時代のデザインスケッチも残されている（展示物総目録75頁参照）。

議事堂の内部装飾のうち、儀一が実際に担当したことが判明しているのは、便殿入口上部のレリーフ（同76-77頁参照）ならびに便殿前広間の床モザイクのデザイン（同78-79頁参照）、中央広間の吹き抜け上部の四つの壁画のうち二つ（同82頁参照）などである。

今回の特別展示では、ここに紹介した彼らの主要な仕事について、図面や図案、スケッチ、写真、関連する記念品などを中心に、一堂に並べて見せた。当時最高水準の近代工学教育を受け、工学者あるいは専門技術者として国家規模の新事業に携わり、また工学を後進に伝えていった、林太郎・不二・儀一という三人の主要な仕事を一度に概観することにより、近代日本における工学の黎明期から発展期までという一つの時間軸が浮かび上がる。それとともに、それぞれの仕事を横断的に示すことで、土木から、建設、材料、機械、建築、意匠・デザインまでという工学が扱う領域の多様性が見えてくるだろう。

「工学主義」のアーキテクチャ

工学とは、明治期の近代化において西洋から輸入された学問であり、日本の近代国家建設を担った技術である。「エンジニアリング」の訳語に用いられた「工」とは、「たくみ」と訓読みされるように、小さな細工ものから大きな建造物まで、それを形にする「たくみな」技術力を表す文字であり、西洋化以前から日本に存在していた概念でもある。これを考え合わせると、工学が日本に根づいていく過程を見る上で、「からくり儀右衛門」に連なり、周辺の技術者集団とともに工学発展に寄与してきた田中家の系譜である林太郎・不二・儀一の仕事は、非常に興味深い対象であると言えよう。

さらに、上述のように、三人の仕事からは、工学発展の時間軸とそれが包含する領域の幅を見ることができる。本展覧会が着目するのは、工学という学問分野や技術史発展に、日本の近代化の文化的「構造」を読み解く手がかりを得ることができるのではないかという点である。この俯瞰的視点は、「建築博物誌／アーキテクトニカ」をテーマに常設

展示を公開する小石川分館の特別展示として、「アーキテクチャ」という語を事物や事象の諸原理を束ねる概念として用いることに由来する。

本展覧会では、林太郎・不二・儀一の仕事から浮かび上がる、彼らのパイオニアとしての進取の精神と取り巻く人々を含めた集団としての協調の精神を「工学主義」と呼ぶことにした。本展覧会の英文タイトルに「Pio-engineers」という造語を用いたのも、同じ理由による。

彼らの仕事は、近代日本の国家形成の過程で、その先の未来を何十年、いや何百年単位の視座で見えていたことだろう。彼らの見ていた未来にいたはずのわれわれにとって、「工学主義」の精神は、決してナショナリスティックな意味ではなく、日本の今、そして未来を考える助けになるのではないだろうか。日本の社会を批判的かつ建設的に考察し、新たに構築していく文化的ツール。それが「工学主義」のアーキテクチャであると考えている。

（初出：東京大学総合研究博物館ニュース『ウロボロス』第58号、東京大学総合研究博物館、2017年2月、2-5頁を一部修正して再掲。）

田中林太郎

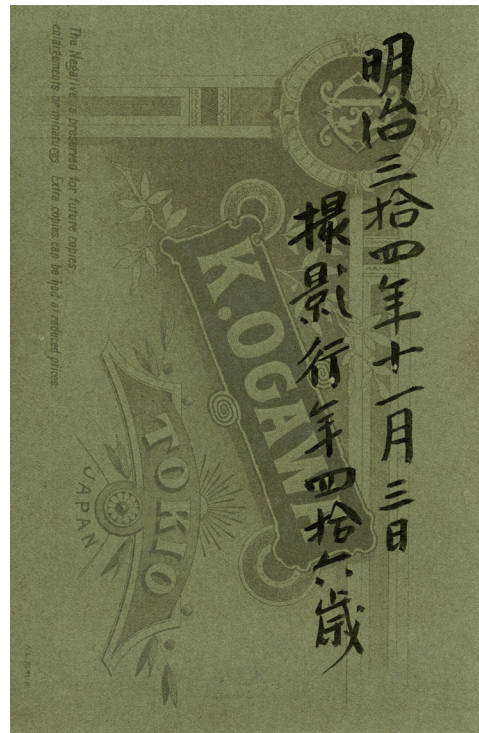
〔安政三―大正二三〕〔一八五六―一九二四〕



凡例

- 記載は、資料名、作者／制作年／素材／記載事項／サイズ(ミリメートル表記)の順とした。
- 所蔵はすべて東京大学総合研究博物館である。
- 年代表記は基本的に和暦を採用し、適宜、西暦を補った。ただし、外国人の生没年は西暦のみとした。
- 用字は基本的に原文のままとしたが、一部読みやすさを勘案して新字体に改めた。助詞の変体仮名はひらがなに改めた。

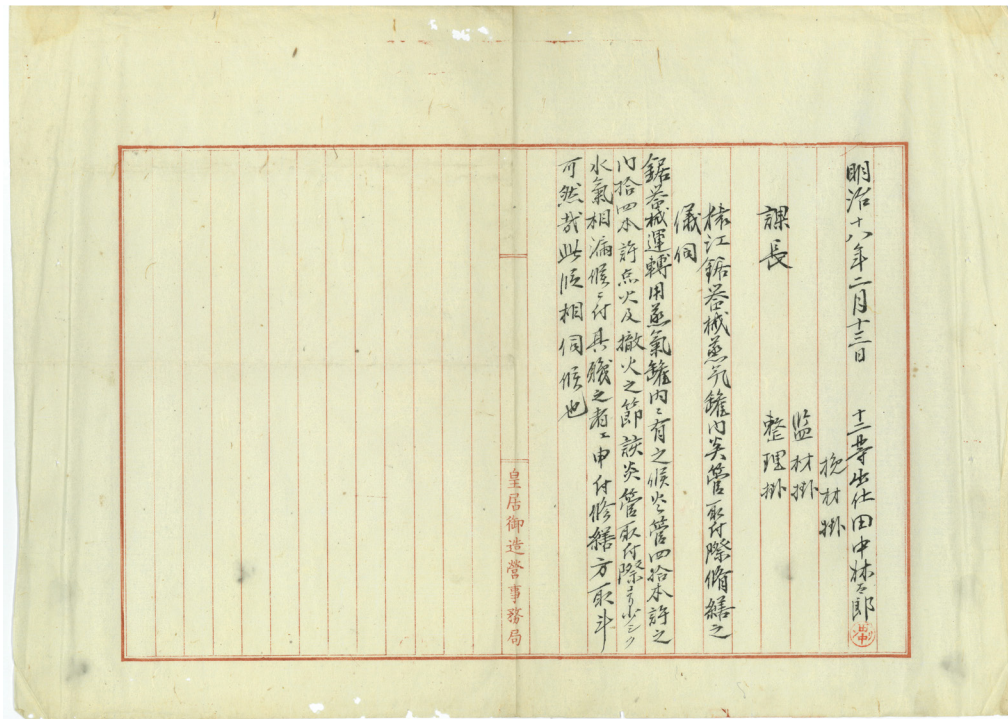
安政3年（1856）1月28日、佐賀に生まれる。初代田中久重の学友であり佐賀藩精錬方の同僚であった中村奇輔（文政8–明治9〔1825–1876〕）の次男。二代目田中儀右衛門が急逝した翌年の慶応元年（1865）11月に田中家の養子となり、二代目儀右衛門の娘・峯千代と結婚する。明治8年（1875）4月、工学寮に工学専門で官費入寮、明治14年（1881）4月、工部大学校機械科を三期生として卒業。同年5月、工部省技手となる。明治15年（1882）6月、工部省技手兼皇居御造営事務局出仕となり、皇居（戦災で焼失した明治宮殿、明治21年〔1888〕竣工）の造営に参画し、暖房設備を担当する。二重橋（正門鉄橋、同年竣工、現在のものは昭和39年〔1964〕に架け替え）の現場監督も務めた。明治20年（1887）9月、帝国大学より工学士の学位授与。皇居御造営残務係を務めた後は、田中製造所、芝浦製作所、日本鉄道株式会社に技師として勤務。明治34年（1901）1月、東宮御所御造営局技師として、再び宮内省に勤務。宮内省内匠頭・片山東熊（安政元–大正6〔1853–1917〕）のもと、東宮御所（現迎賓館赤坂離宮、明治42年〔1909〕竣工）造営に参画、暖房設備関係業務を担当する。その後も内匠寮御用掛を務め、大正5年（1916）12月に宮内省内匠寮嘱託員（奏任待遇）となる。大正9年（1920）12月、宮内省を依願退職。大正13年（1924）4月28日、69歳で逝去。正六位勲五等。



田中林太郎肖像写真

小川一眞撮影／明治34年（1901）11月3日／ゼラチンシルヴァープリント、台紙貼付／台紙裏に「明治三拾四年十一月三日撮影行年四拾六歳」と墨書あり／本紙：縦137、横95、台紙：縦167、横107

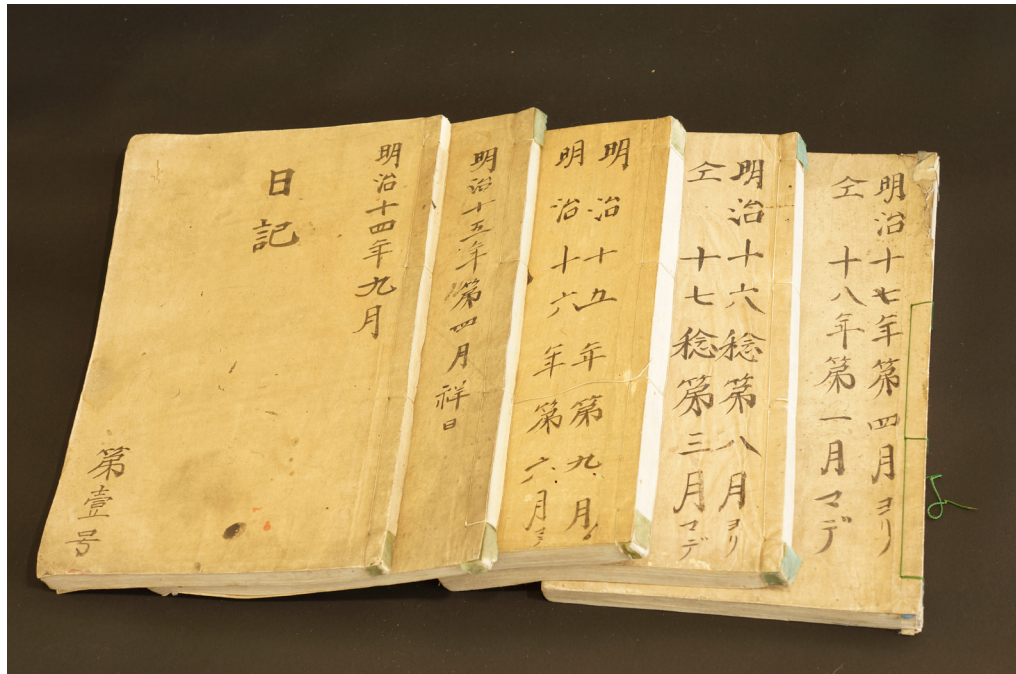
林太郎46歳、東宮御所御造営局技師に任命された年に撮影された。撮影者の小川一眞（万延元-昭和4〔1860-1929〕）は、東宮御所竣工時の大判写真帖（30頁）も手がけており、幕末から明治にかけて活躍した最も有名な写真師の一人である。



「猿江鋸器械蒸気罐内炎管取付際修繕之儀伺」

田中林太郎から内匠課長宛／明治18年（1885）2月13日／「皇居御造営事務局」罫紙に墨書、署名下に印／縦274、横385

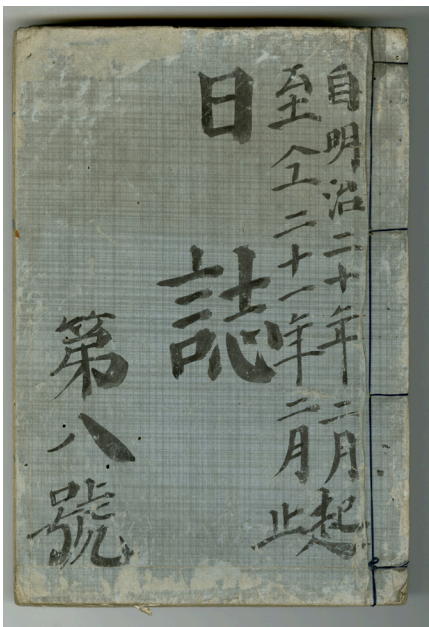
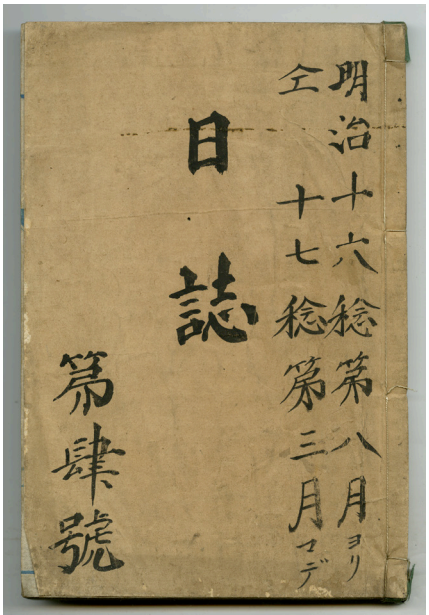
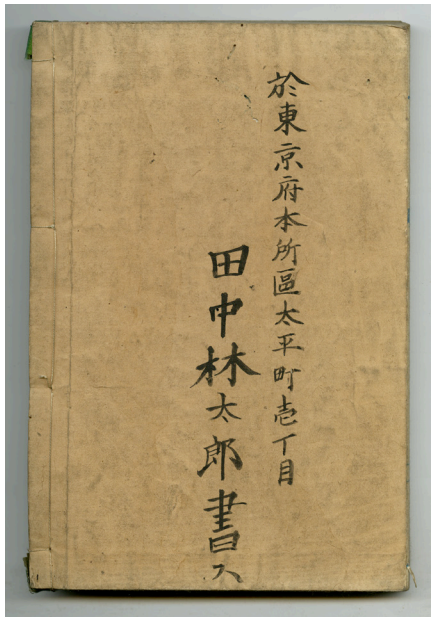
十二等出仕の林太郎が内匠課長に宛て、猿江貯木場の鋸器械の運転用蒸気罐（ボイラー）内の炎管40本のうち14本の修繕について伺いを立てた書簡。本状は林太郎の手元に残されたことから、提出した書簡の控えあるいは下書きであると思われる。明治18年（1885）2月16日付の林太郎の日記に、猿江出張所鋸器械場蒸気罐修繕の伺いを持って本局に出頭し、森山課長と面談したことが記されており、機械担当技師であった林太郎の仕事ぶりが窺える。皇居（明治宮殿）は純木造建築であり、短い造営期間で計画通りに木材を供給する必要があった。旧幕時代は御材木蔵と称した猿江貯木場は重要な物流センターとして機能した。

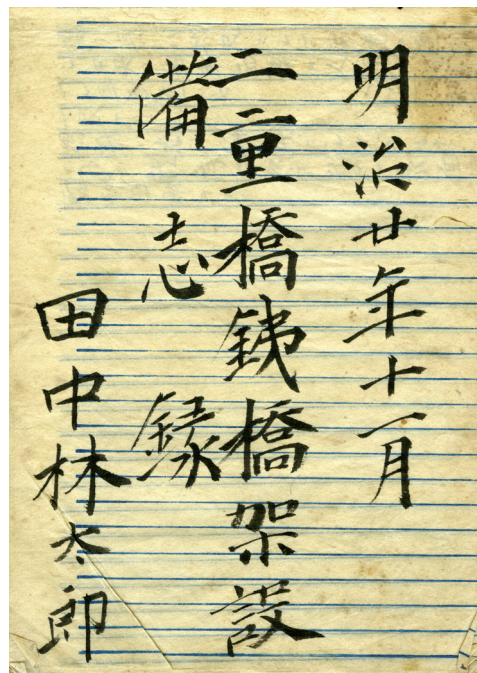


日誌

田中林太郎／明治14年（1881）9月1日から明治28年（1895）9月12日まで／全17冊／縦帳（紙に墨書）／縦236、横155

林太郎が日常生活について毎日書き綴った日誌。第1号から第17号までが当館に所蔵されている。これ以降の号が存在したかは不明。林太郎の仕事や親戚を含む交遊関係がわかる貴重な文字資料である。



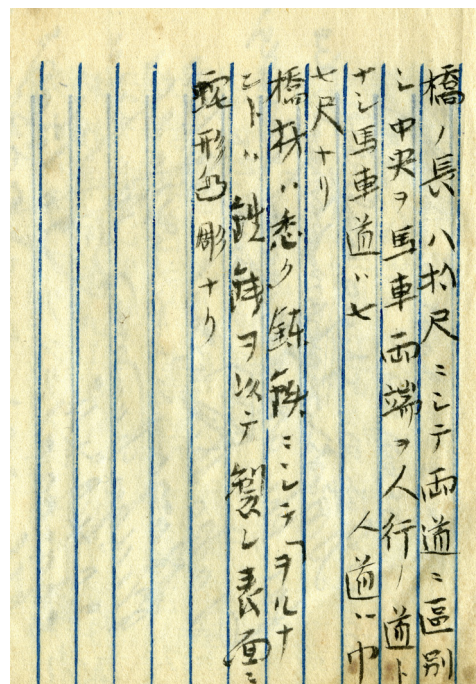


1

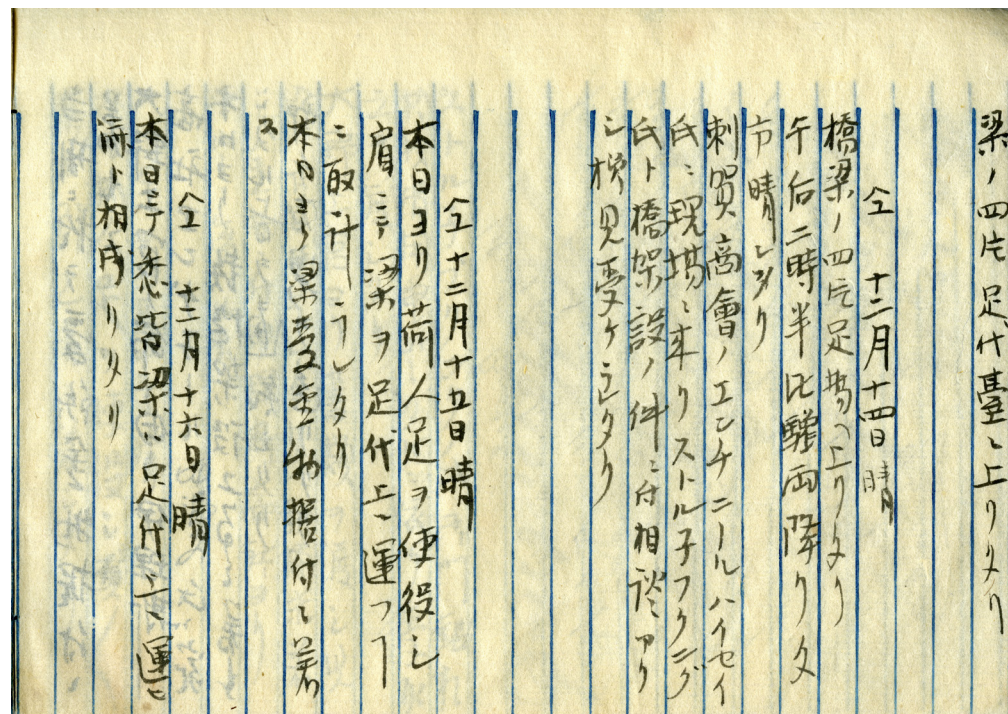
「二重橋銭橋架設備志録」

田中林太郎／明治20年（1887）11月／罫紙に墨書および鉛筆書／縦195、横142

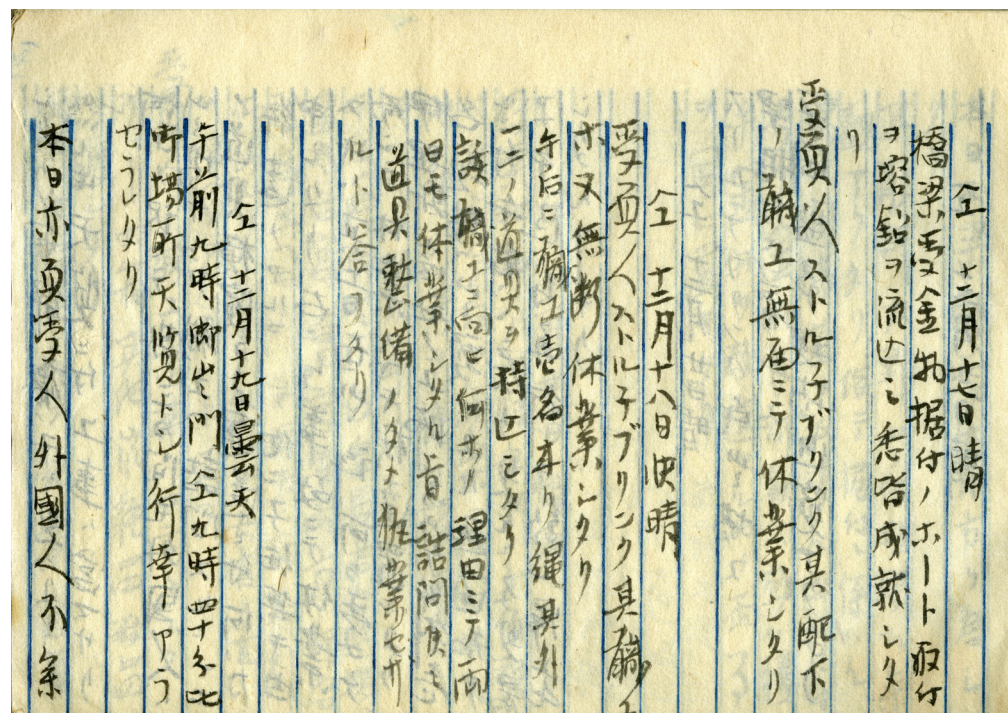
二重橋は正門石橋と正門鉄橋の二つの橋を総称して呼ぶ通称である。田中林太郎は、独人ウィルヘルム・ハイゼー（1846-1895）設計による鉄橋架設工事（明治21年〔1888〕竣工）の現場監督を務めた。本備忘録は、1頁目（図版2）に、橋の長さが80尺（約24メートル）で中央が馬車道、両端が歩道であること等の概要が記される。次頁より後は、明治20年（1887）12月10日、工事の足場が完成したことに始まり、翌年2月21日まで、ほぼ毎日の記録が残されている。図版3の12月14日付には「刺賀商會ノエンチニールハイセイ氏ニ現場ニ来リ」とあるように、ハイゼーが工事現場を訪れたことが確認できる。図版4の12月17日および18日付には、「受負人ストルネブリンク」（オランダ人のルドヴィカス・ストルネブリンク〔1847-1917〕、横浜で製氷工場を経営したことで知られる）配下の職工が無断で休業したとあり、外国人と働く林太郎の現場監督としての苦勞が想像される。なお、現在の二代目鉄橋は、皇居宮殿建設の際、臨時皇居造営部により昭和39年（1964）に架け替えられた。



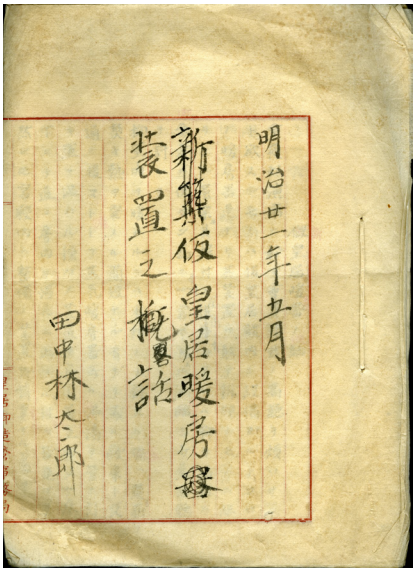
2



3



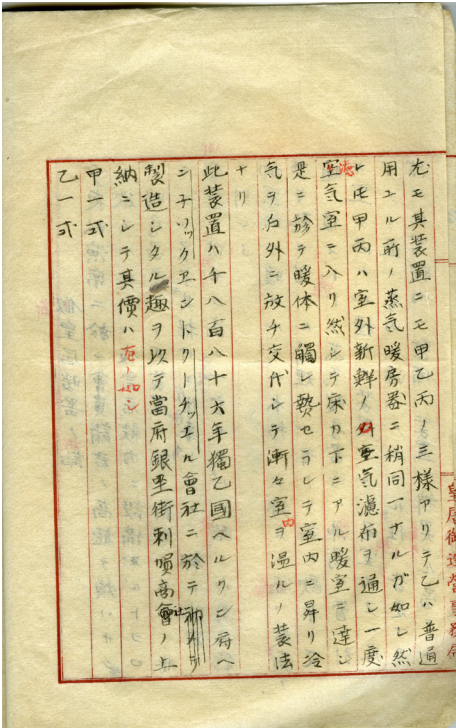
4



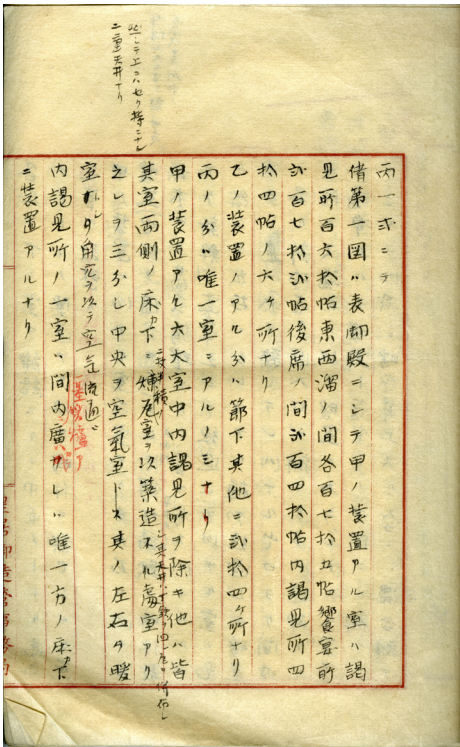
1



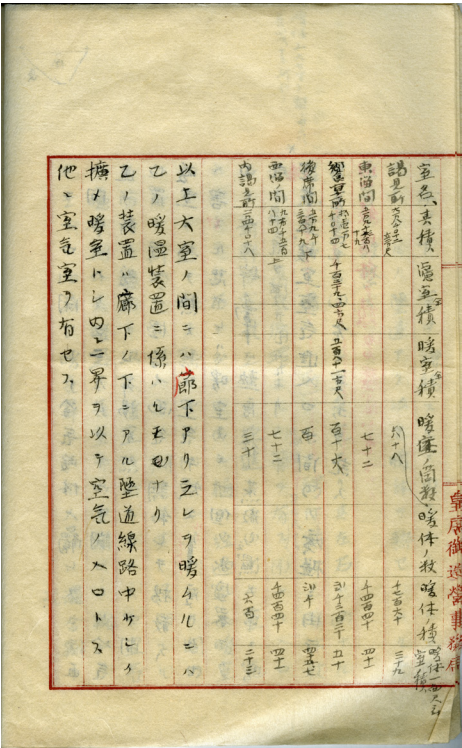
2



3



4

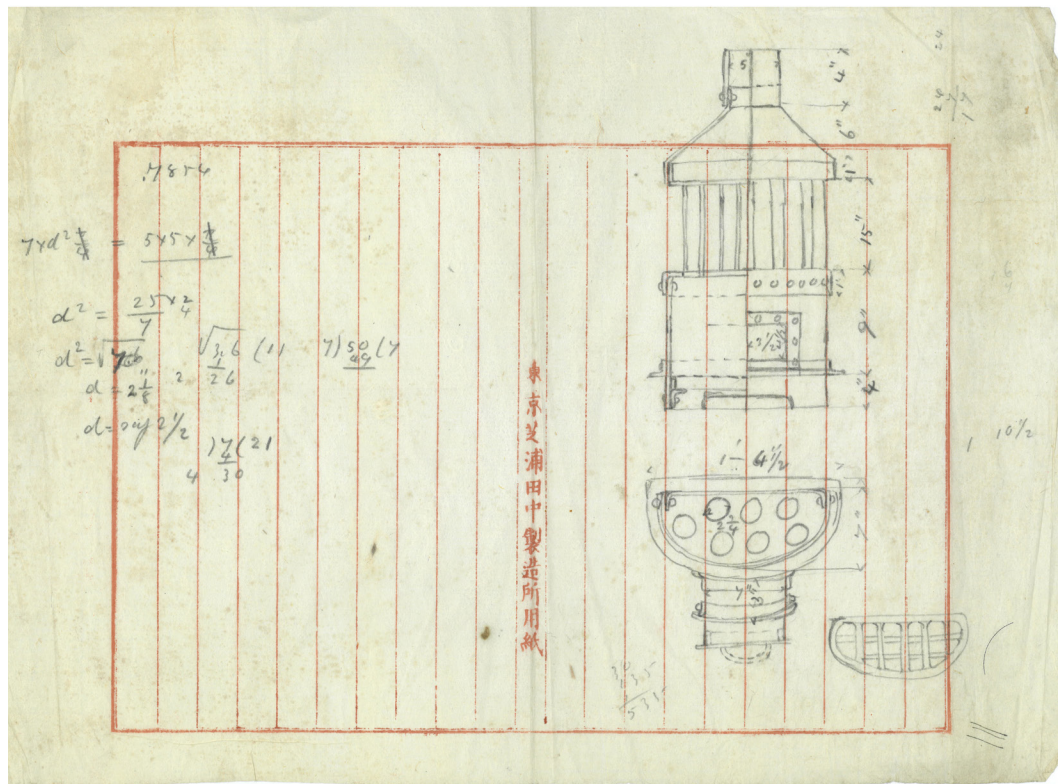


5

「新皇居暖房器ノ概話」

田中林太郎／明治21年（1888）5月／「皇居御造営事務局」罫紙に墨書／縦275、横201

皇居（明治宮殿）の暖房設備に関する林太郎の講演原稿下書きと思われる。表紙（図版1）は「新築」「器」「概畧」の文字が塗り潰され「仮皇居暖房装置之話」と題されているが、1丁（図版2）には逆に「仮」の文字が「新」に修正され、「新皇居暖房器ノ概話」とある。仮皇居とは赤坂離宮（旧紀伊徳川家江戸中屋敷）のことで、新たに宮城が完成し、天皇皇后両陛下が明治22年（1889）1月にそこに移るまで、約15年半にわたり居住していた。原稿の冒頭に、仮皇居内に整備された暖房装置は新規のものではないが、その据え付けには関係するため、聴衆の参考になるように話をしたいとする旨が記されており、仮皇居の機械設備に携わる関係者を集めて、林太郎が新皇居の最新鋭の暖房設備について講演をしたものと推測される。図版3からは、宮殿内には甲乙丙三種の暖房装置があり、乙は普通の蒸気暖房機、甲丙は室外の新鮮な空気をフィルターして取り入れ、床下の暖室であたため、室内に還流し冷気と入れ替える方式であること、この装置が1886年（明治19）独ベルリンで製造されたもので、刺賀商会から上納されたことがわかる。また、図版4には、甲の装置は謁見所、東西溜ノ間、饗宴所、後席間、内謁見所の6箇所、乙の装置は廊下その他24箇所、丙の装置は1箇所を設置されていたとある。



器械図面スケッチ

田中林太郎／明治26年（1893）以降／「東京芝浦田中製造所用紙」に鉛筆書／縦245、横339

林太郎による蒸気罐図面のスケッチか。数式も見られる。版心に「東京芝浦田中製造所用紙」の印字がある。林太郎は明治22年（1889）3月に田中製造所技監の囑託となっているが、明治26年（1893）に田中製造所は芝浦製作所に変わるため、この頃に描かれたものか。



三角スケール

明治24年（1891）以前か／木製、紙に布張りケース／側面に「東京カ35 九四七七」と四角マークの刻印、「田中林」の書込み文字あり／田中林太郎旧蔵／全長320、三角辺長22

製図用の物指し。側面に林太郎の名前が確認できる。スケールは「尺」単位である。3つの面に6種類の異なる縮尺の目盛りがあり、10分の1、20分の1、30分の1、40分の1、50分の1、60分の1が刻まれる。日本でメートル法が導入されたのは、メートル条約加入後の明治24年（1891）の度量衡法の施行からである。



無題（東宮御所御写真）

小川一眞撮影／明治42年（1909）／2帙154枚、コロタイプ印刷、黒革製帙、木製外箱／本紙：長辺552、短辺463、帙：縦482、横575、高63、外箱：縦518、横618、高89

東宮御所（現迎賓館赤坂離宮、国宝）は皇太子嘉仁親王（大正天皇）の住居として建設されたネオ・バロック様式の欧風宮殿建築。鉄骨煉瓦造、外壁石造。設計は片山東熊（安政元-大正6 [1854-1917]）。当代一流の建築家、美術家、技術者等が結集し、約10年もの歳月をかけて完成した。竣工時に撮影された本写真は建物外観、各室内装、浴室、廊下、地下設備など建物全体を網羅する（31-34頁）。田中林太郎は当時最先端の暖房設備関連業務への尽力により本写真を下賜されたことが添え状からわかる（35頁）。宮内庁書陵部には本写真とほぼ同寸のゼラチンシルヴァープリントの写真帖が所蔵されており、白革製帙の上製版と黒革製の並製版があり、皇室に献上されたと推察される。本コロタイプ版は写真師小川一眞（万延元-昭和4 [1860-1929]）自身が製作し、関係者に頒布されたものであろう。小川は本写真を撮影した翌明治43年（1910）に、写真師として初めて帝室技芸員を拝命した。



大階段昇口

参考図版

「大階段昇口」（東宮御所御写真 第1帙第14図）

写真：縦411、横335

正面玄関から階上に伸びる中央階段。床には白色のイタリア産大理石ビアンコ・カララが張られ、その上に赤い絨毯が敷き詰められる。竣工時、階段左右の壁面には、緑色のフランス・カンパン産大理石が鏡張りされていたが、風化のため復元不可能と見なされ、迎賓館に改修する際、紅色大理石のルージュ・ド・フランスに貼り替えられた。中央階段を下から見上げた様子は、ウィーンの王立劇場大階段室との類似が認められると言われる。



「朝日之間西北隅」（東宮御所御写真 第1帙第27図）

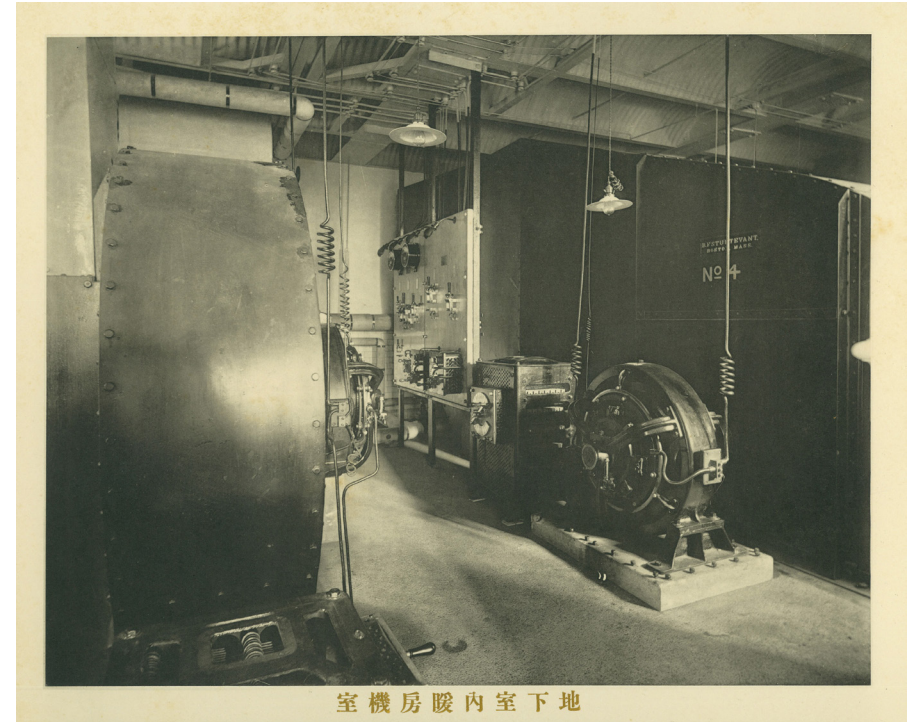
写真：縦335、横411

正面玄関から中央階段を上がり、大ホールを進んだ先にある部屋で、ヨーロッパの宮殿の謁見の間にあたりと考えられる。第一客室、第一溜の間と呼ばれた。広さは191平方メートル。朝日を背に女神が香車を走らせている姿が天井に描かれたことから、「朝日之間」とも称せられる。写真上部に香車を引く白馬の姿が見える。家具や室内様式はフランス18世紀末の古典主義様式。家具およびシャンデリアはフランスから輸入された。壁には京都西陣の金華山織が張られている。写真奥に暖炉が見えるが、暖房および換気法は、階下の一部および各廊下や地下室では放熱器を用いた直接蒸気暖房を採用したのに対し、朝日の間のような主要な箇所では扇風機を用いた最新式のマルチゾーン方式の間接温気暖房法が施され、さらに自動温度調節器がついていたという。

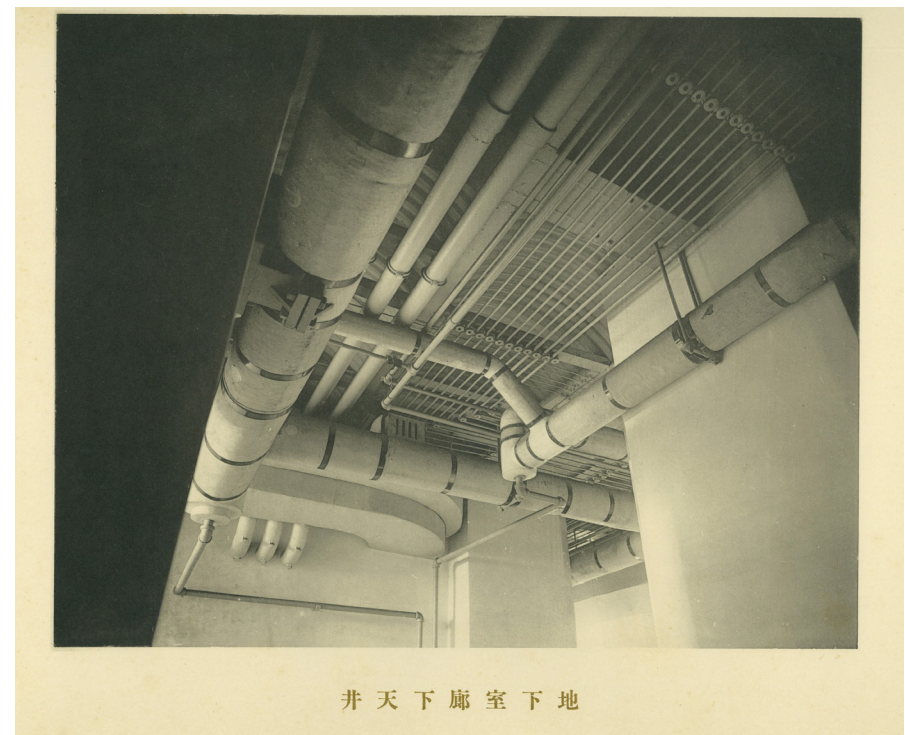
「地下室内暖房機室」および「地下室廊下天井」（東宮御所御写真 第2帙第52図）

写真上：縦226、横287、写真下：縦226、横287

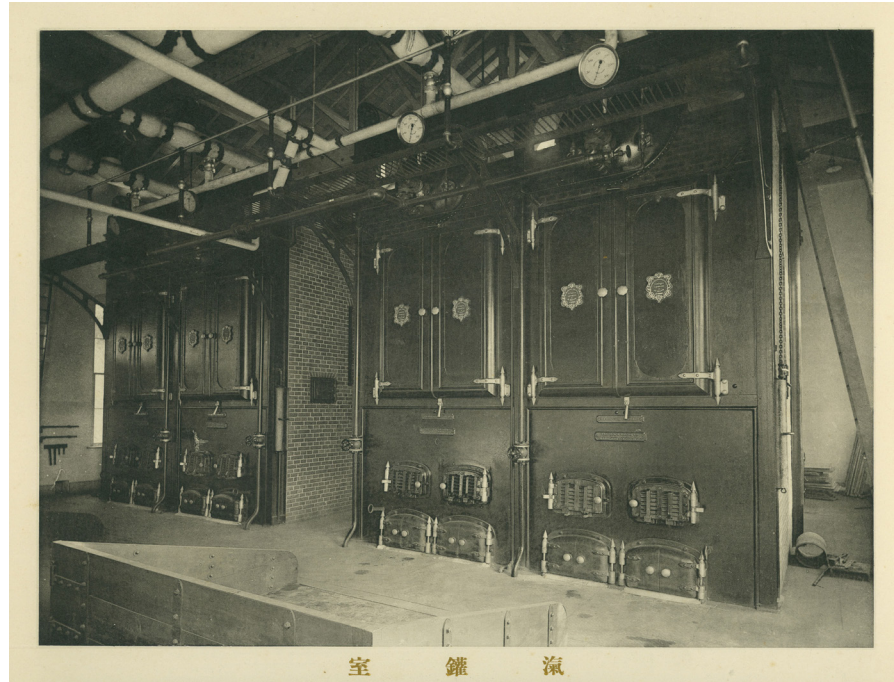
東宮御所の設計を担った片山東熊（安政元–大正6〔1854–1917〕）の依頼により、暖房換気設備は米国ニューヨークにて設計が行われ、使用機器の大部分も米・英国から輸入された。明治32年（1899）、片山東熊が技師の石井敬吉（慶応2–昭和7〔1866–1932〕）を伴い、米国で鉄骨と暖房機の買い付けを行ったほか、技手の山本直三郎（明治2〔1869〕–没年未詳）が明治34年（1901）に米国へ暖房機附設のための準備と諸工事の研究に出張したとの記録がある。東宮御所では暖房の主体が機械式温風暖房のため、きわめて多量の鉄板ダクトを必要としたが、日本ではこれまで本格的なダクト工事を行った建築がなかった。明治34年（1901）には、ダクト見本品と思われる暖房装置用金物がニューヨークより届く。しかし、この製作法や工具などに関して未知であったため、暖房主任技師であった田中林太郎は、明治35年（1902）、片山が2回目に渡米する際に、これらの調査を依頼したという。片山や林太郎が学んだ工部大学校では、開校直後の明治11年（1878）から造家学科でジョサイア・コンドル（1852–1920）が暖房に関する講義を担当していた。林太郎は明治34年（1901）1月、東宮御所御造営技師となり、暖房設備関係を担当した。明治40年（1907）1月には、暖房其他諸器械の監督を囑託されている。



室機房暖内室下地



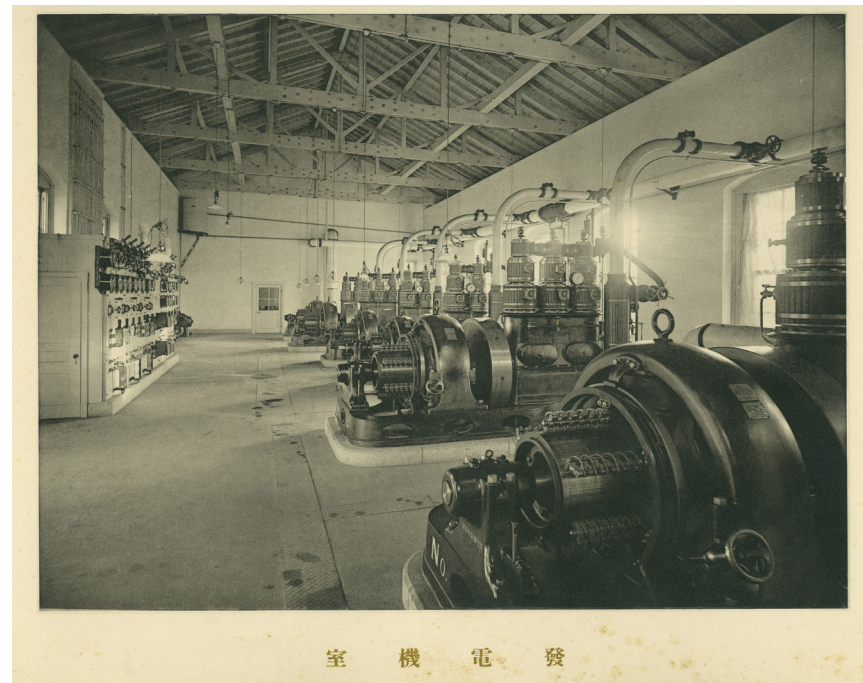
井天下廊室下地



「汽罐室」および「發電機室」（東宮御所御写真 第2帙第54図）

写真上：縦228、横287、写真下：縦228、横287

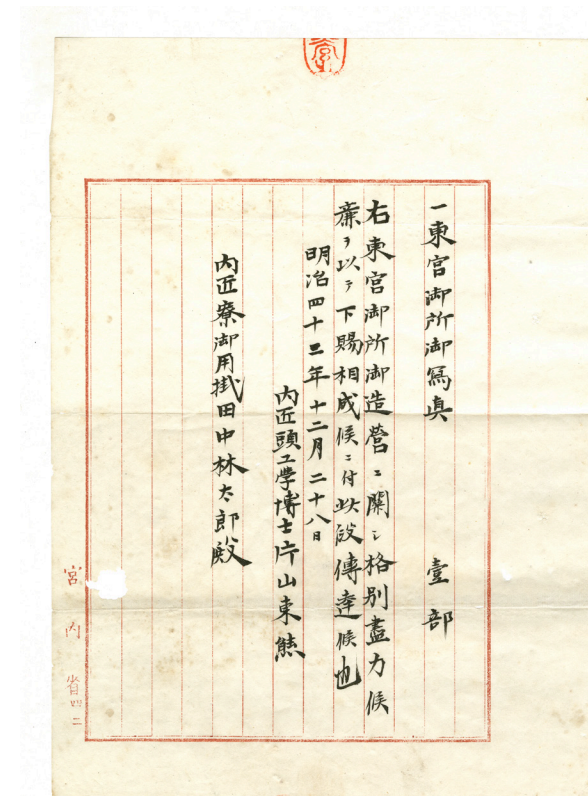
本館の西約90メートルの距離の独立家屋内に東宮御所附属の特設発電所が設けられていた。ボイラー2台と直流発電機5台を備えていたという。本館内の各部屋の照明や前庭の外灯の点灯とともに、暖房換気に要する蒸気および動力がここで供給された。



東宮御所御写真下賜添え状

片山東熊から田中林太郎宛／明治43年（1910）12月28日／「宮内省」罫紙に墨書／縦276、横203

内匠頭の片山東熊（安政元-大正6〔1854-1917〕）より内匠寮御用掛の林太郎に宛て、東宮御所造営への林太郎の尽力に対し、東宮御所御写真一部が贈られたことが記される。本状は、当該資料（30頁）の来歴の証左である。片山は明治12年（1879）工部大学校造家学科第一期卒業生で、宮廷および皇族関係の邸宅、離宮などの建築に多く関わった。内匠頭とは内匠寮の長官にあたり、片山は明治37年（1904）から大正4年（1915）までこの職を務めた。





036



037

竹に蝸牛図花瓶

制作者未詳／明治から大正期／純銀製／側面に「贈呈田中林太郎氏 内匠寮機械係員一同」と刻銘、底部に「純銀」と刻印あり／高101、底径30、胴径55

内匠寮機械係員一同より林太郎に贈られた記念品。祝事などの特別な折の特注品と思われる。林太郎は、皇居（明治宮殿、明治21年〔1888〕竣工）造営の頃および東宮御所（現迎賓館赤坂離宮、明治42年〔1909〕竣工）造営の頃と、大きく分けて二つの時期に宮内省内匠寮に勤務し、最後は大正5年（1916）に退職している。

田中不二

(明治二〇―大正二一〔一八七七―一九三二〕)



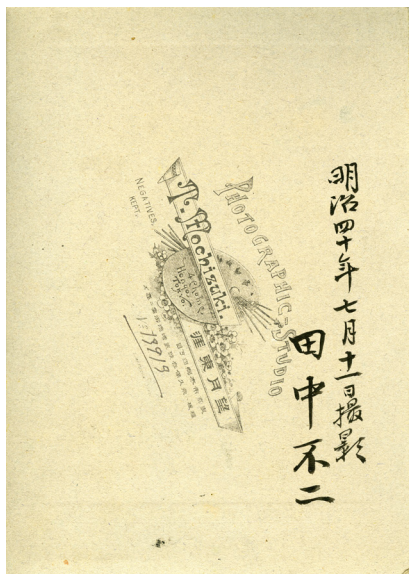
明治10年(1877) 8月20日、東京に生まれる。近代様式ガラスの基礎を日本に広めた技術者として知られる佐賀県士族・藤山種廣(生年未詳–明治19 [1886]) の次男。兄の常一(明治4–昭和11 [1871–1936]) もカーバイド工業を開拓した工学博士。明治27年(1894) 10月、林太郎の養子として田中家に入る。正則尋常中学校、第一高等学校工科を経て、東京帝国大学工科大学機械工学科を明治34年(1901) 4月に卒業。同年7月に同学科で講師となる。同年11月、林太郎の娘・芳子と結婚。明治35年(1902) 4月、同学科助教授となる。明治37年(1904) 1月、機械工学第一講座分担を命じられる。明治39年(1906) 4月、わが国最初の日本語による機械設計の教科書『機械設計及製圖』前編および後編を同僚の内丸最一郎(明治10–昭和44 [1877–1969]) との共著で出版。明治41年(1908) 7月から3年間、文部省の命で機械工学研究のため英・独・仏へ留学する。帰国後の明治44年(1911) 5月、機械工学第二講座の担当となる。同年11月には教授となり、応用力学講座も担当する。大正3年(1914) 1月、工学博士号の学位授与。大正2年(1913) および4年(1915) に『應用力學』第一編・第二編を、大正8年(1919) に『機械製作法』第一編を出版。大正11年(1922) 11月18日、45歳で逝去。正四位勲三等。大正12年(1923) 1月、『機械製作法』第二編が出版される。



田中不二肖像写真

望月東涯撮影／明治40年（1907）7月11日／ゼラチンシルヴァープリント、台紙貼付／台紙裏に「明治四十年七月十一日撮影田中不二」と墨書、およびNo.「19919」とインク書あり／本紙：縦140、横99、台紙：縦181、横128

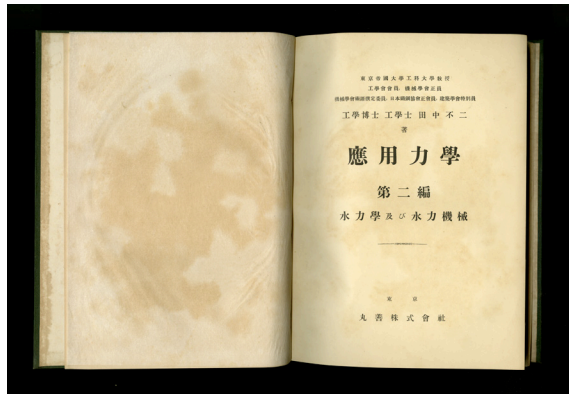
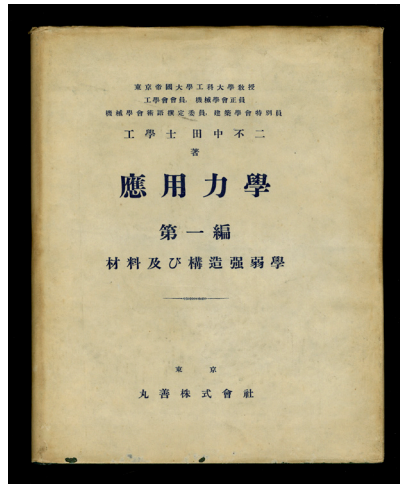
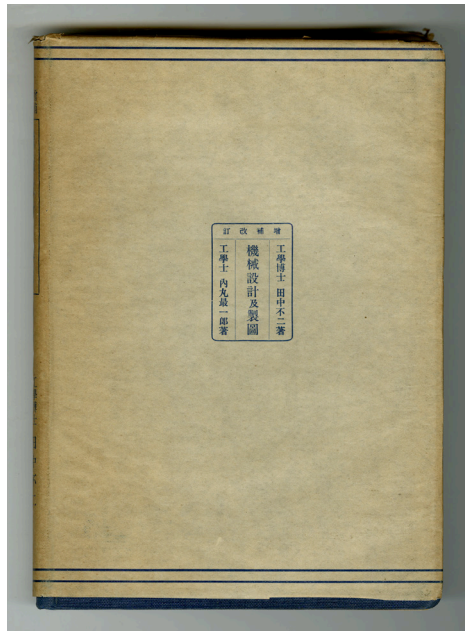
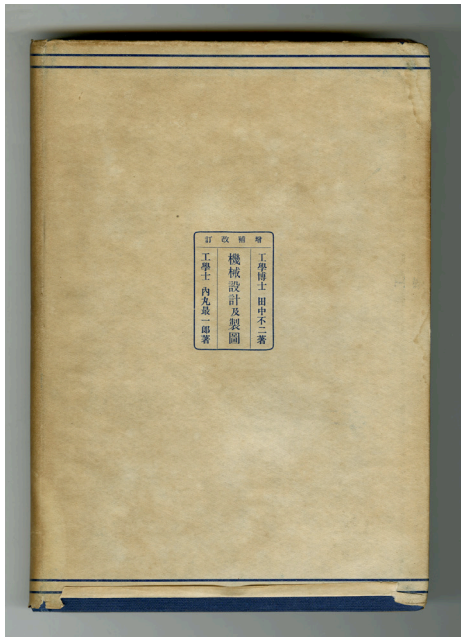
わが国最初の日本語による機械設計の教科書『機械設計及製圖』前編および後編を出版した翌年、不二が29歳の時に撮影されたもの。撮影者の望月東涯は帝大近くの本郷4丁目に写真館を構えており、不二の家族写真もたびたびここで撮影されている。



田中不二・内丸最一郎・加茂正雄肖像写真

中黒實撮影／明治38年（1905）1月20日／ゼラチンシルヴァープリント、台紙貼付／台紙裏に「明治三十八年一月二十日 日露戦争ニ於ケル我陸海軍ノ戦捷ヲ祝スル為メ東京帝國大学ニ於テ紀念祝捷会ヲ催ス依テ紀念ノ為メ撮影ス 加茂正雄 内丸最一郎 田中不二」と墨書あり／本紙：縦138、横95、台紙：縦166、横110

東京帝国大学工科大学機械工学科の助教授3人の記念写真。帝大で行われた日露戦争勝利の記念祝賀会の折に撮影された。全員が昼間の礼装であるフロックコートを着用している。右が不二。中央の内丸最一郎（明治10–昭和44〔1877–1969〕）は、帝大工科機械工学科を明治35年（1902）に卒業した、不二の1年後輩にあたる。不二の第一作目『機械設計及製圖』の共著者。左の加茂正雄（明治9–昭和35〔1876–1960〕）は、明治31年（1898）同学科卒業、不二の3年先輩。加茂は明治39年（1906）から約7年、不二は明治41年（1908）から約3年、内丸は明治44年（1911）から約3年と、3人は相次いで欧州に機械工学研究のため留学し、帰国後に同学科の教授となった。裏の文章は不二が書き、加茂と内丸の名前はそれぞれの自筆と推定される。撮影当時20歳代後半の若き機械工学者たちは、日本が戦勝ムードに湧きさなか、自分たちの輝かしい将来を信じ、意気盛んな志を語り合っていたかもしれない。撮影当日の不二の日記には、祝賀会の様子に触れ、記念のため3人で撮影したと記されている。撮影者の中黒實は丸木利陽（安政元–大正12〔1854–1923〕）門下の写真師で、帝大近くの本郷弓町2丁目に写真館を構えていた。



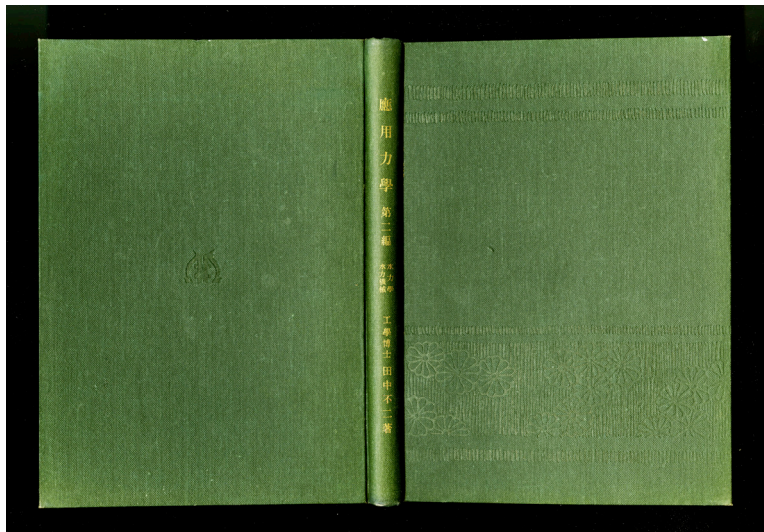
田中不二著『應用力學』第一編

大正2年(1913)6月5日初版発行／丸善／縦255、横190

田中不二・内丸最一郎著『機械設計及製圖』前編・後編

明治39年(1906)4月20日初版発行／丸善／縦222、横160

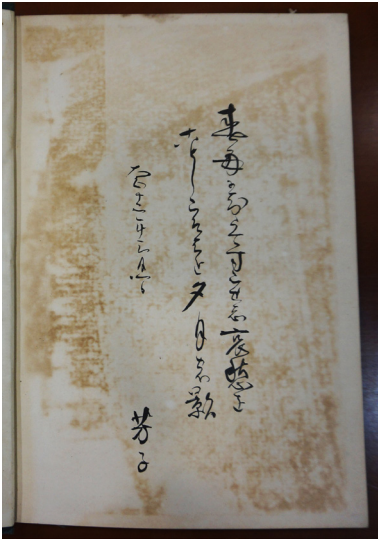
日本語で初めて著された、機械設計と製図に関する教科書。前編・後編の2冊が同時に刊行された。序文には、機械工業に従事する者にとって日常必要とする事項を、初学者にも理解できるよう諸種の例題を掲げてその解法を示したとある。本著作には種本が存在し、D. A. ロウとA. W. ベヴィスの著作『A Manual of Machine Drawing and Design』(1893)から多くの材料が引かれているという。不二の執筆担当箇所は、第1章「製図」、第2章「幾何画法」、第3章「材料の強弱及び剛柔」、第6章「蒸気罐設計法」。本書は機械工学の必携教科書として版を重ね、大正5年(1916)の第10版より増補改訂版となった。不二は新たに「材料の性質及び試験成績」と「往復運動唧筒の設計法」の章を加筆した。当館に所蔵されるのは、前編は大正7年(1918)5月8日発行第13版、大正11年(1922)7月8日発行第19版、大正13年(1924)5月28日発行第20版、昭和4年(1929)3月13日発行第25版、後編は大正5年(1916)8月10日発行第10版、昭和17年(1942)10月25日発行第26版。不二は帝大機械工学科にて、明治44年(1911)11月から大正10年(1921)12月まで、切削加工学や加工機械を扱う機械工学第二講座を担当した。共著者の内丸最一郎(明治10-昭和44[1877-1969])は、本書の他にも『蒸気罐』(明治41[1908])、『水力タービン』(大正6[1917])、『内燃機関』(昭和6[1931])等、多くの工学教科書を執筆している。



田中不二著『應用力學』第二編

大正4年(1915)12月15日初版発行／丸善／カバーなし／縦255、横190

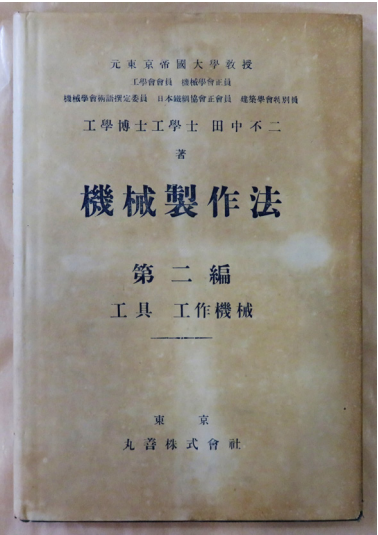
不二が日本語で書いた機械工学の教科書第二作の初版本。不二は帝大機械工学科で、明治44年(1911)11月から大正11年(1922)8月まで、材料力学を扱う応用力学講座を分担担当した。第二編にも第一編と同様の装丁カバーがつくが、本資料では欠落しているため、表紙に不二がデザインした菊の文様のエンボス装飾を見ることができる。



参考図版

田中不二著『機械製作法』第一編

大正8年(1919) 8月25日初版発行／丸善／縦224、横156

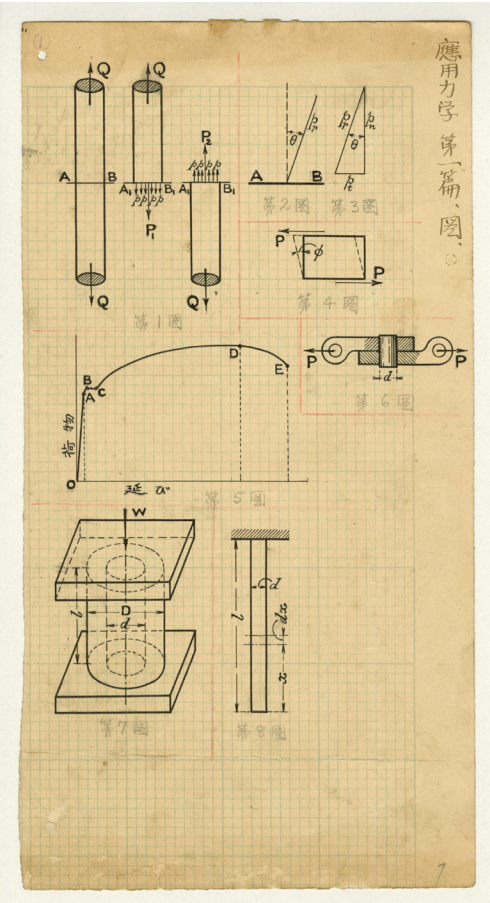


参考図版

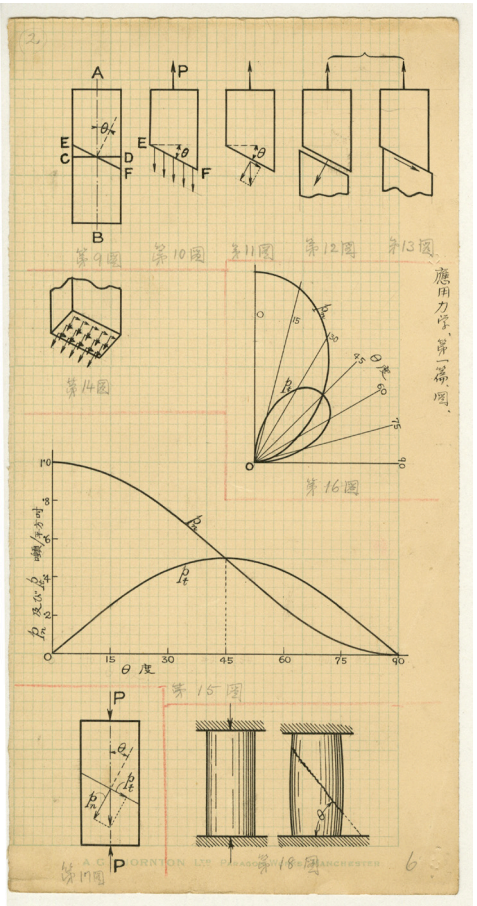
田中不二著『機械製作法』第二編

大正12年(1923) 1月28日初版発行／丸善／縦224、横156

不二による機械工学の日本語教科書第三作。当館所蔵の第一編、大正11年(1922) 9月13日発行第4版には、同年11月18日に逝去した不二を偲んだと思われる、妻・芳子の書きつけた歌「春毎にちゝそすこせし哀愁をことしこそはと夕月の影 大正十二年三月一日 芳子」が見られる。第二編は不二の死後に刊行された。



1

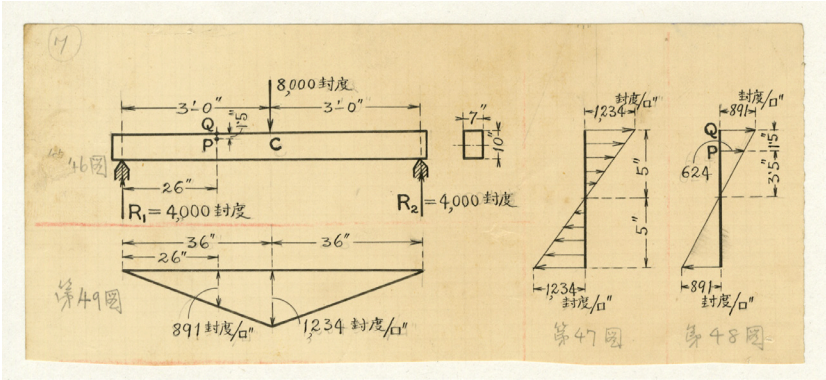


2

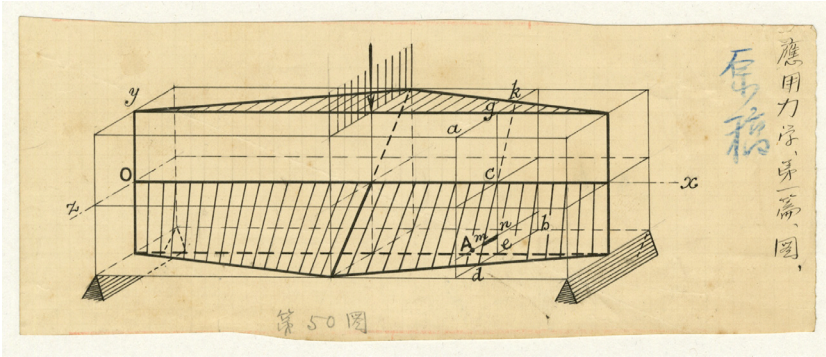
田中不二著『應用力学』第一編の図版原図

田中不二／大正2年(1913) 6月以前／紙に鉛筆、インク／全16葉／最大：長辺226、短辺145、最小：長辺146、短辺62

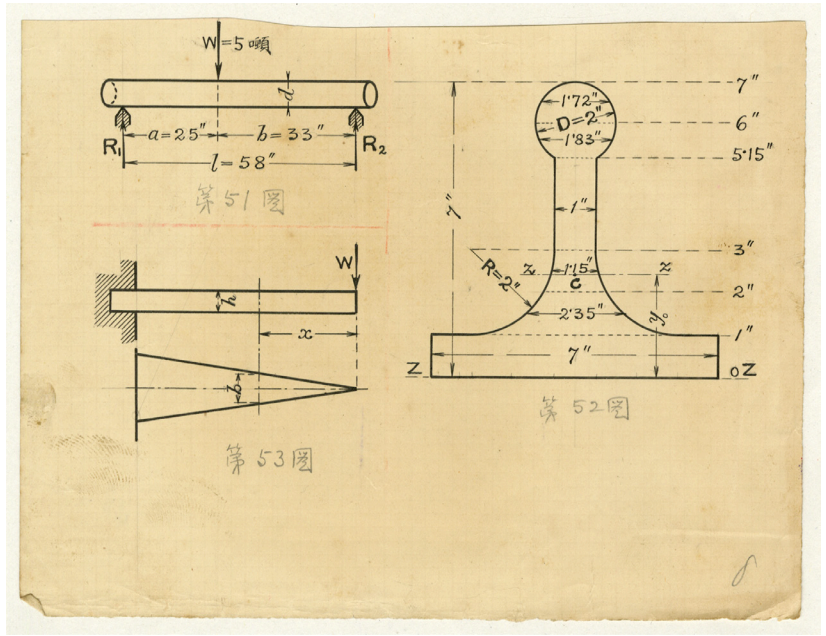
大正2年(1913) 6月5日、丸善発行の不二の第二著作第一編(43頁)の図版原図。「材料及び構造強弱学」の副題がつけられる。本図版原図は、不二が鉛筆で下書きを行い、その上にインクで清書をしたものと思われる。不二は序文にて、「富国の基」を強固にする近年の工業発展に対し、工業の基礎たる工学の図書は日本語の著作がいまだ少ないという問題意識と、本著書によって日本語で基礎工学に関する学理を説述することを試みたという執筆意図を述べている。使用した専門用語は、明治30年(1897)に設立された機械学会が編集した機械工学術語集に依っており、不二はこの術語がわかりにくい漢語を避けている点において大いに優良であると評価している。不二は機械学会の会員であり、この術語選定委員も務めていた。図版6(47頁)の第58図や第60図に見られる「曲ぐるモーメント」は、「口に唱え易く、耳に悟り易き」と不二が表現している用語表現の一例と言えるだろう。



3

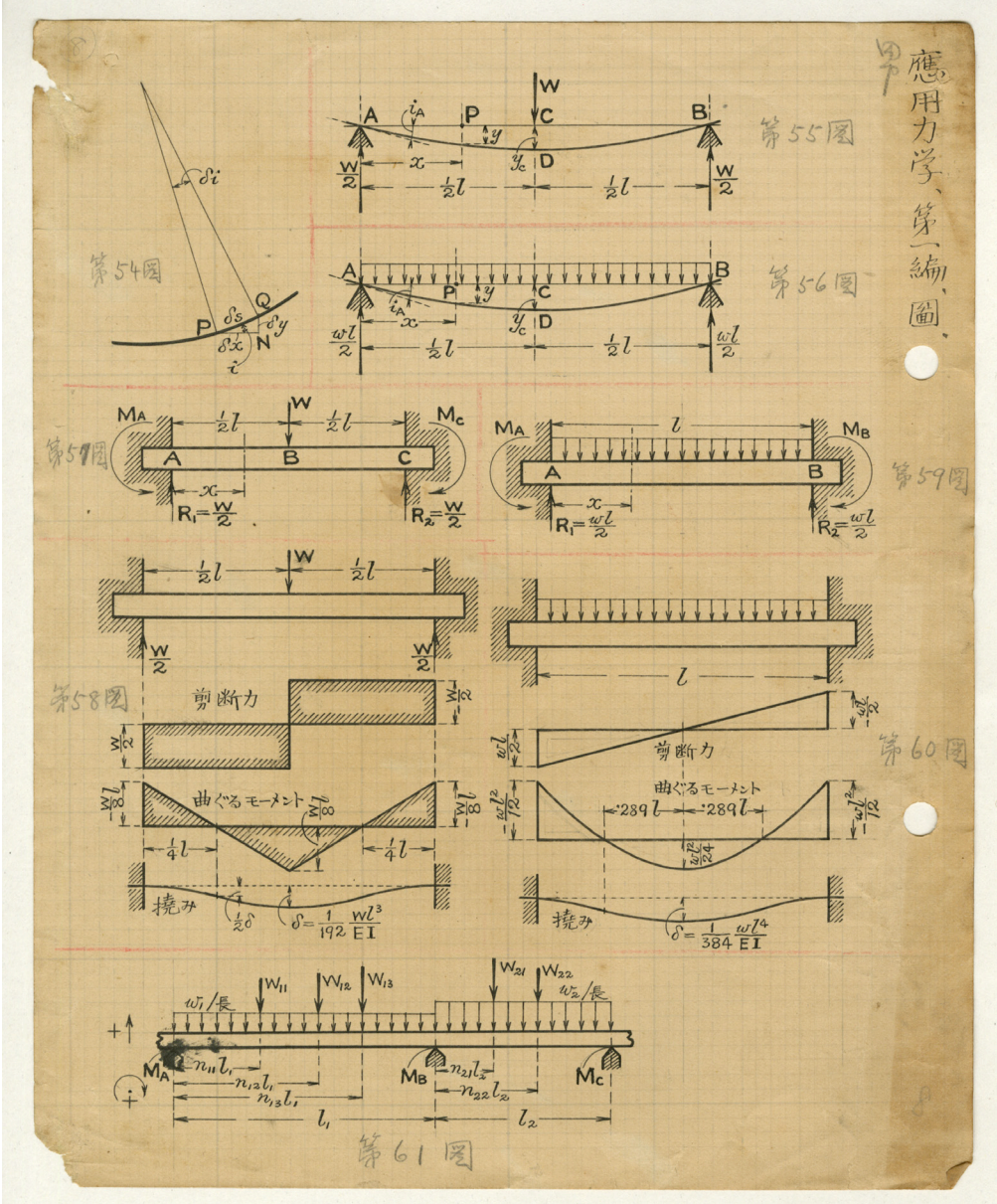


4

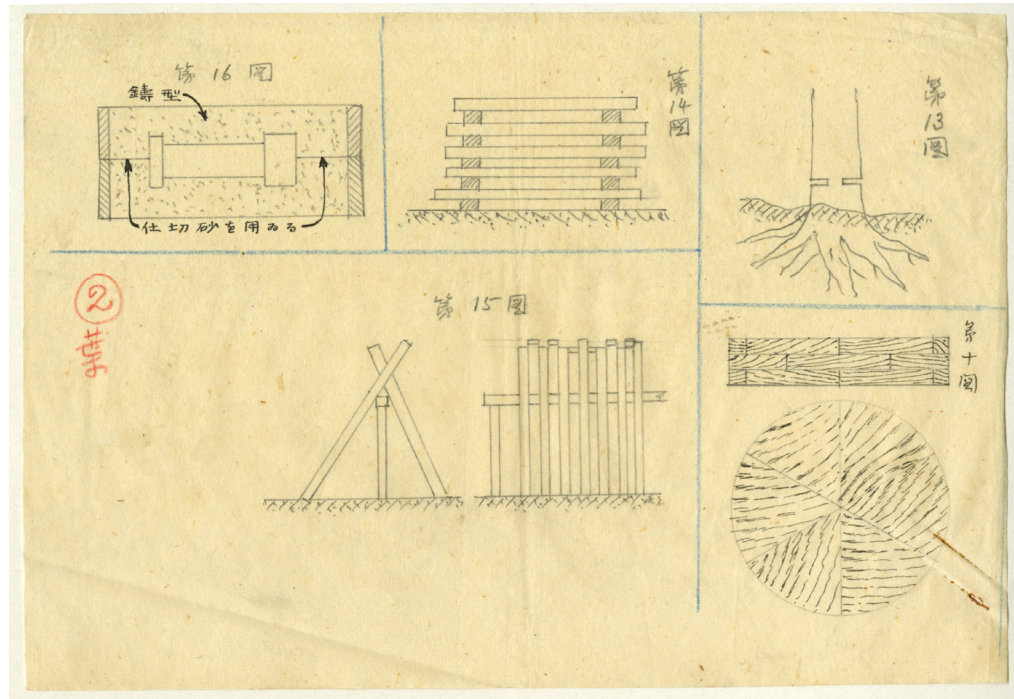


5

田中不二著『應用力学』第一編の図版原図



6

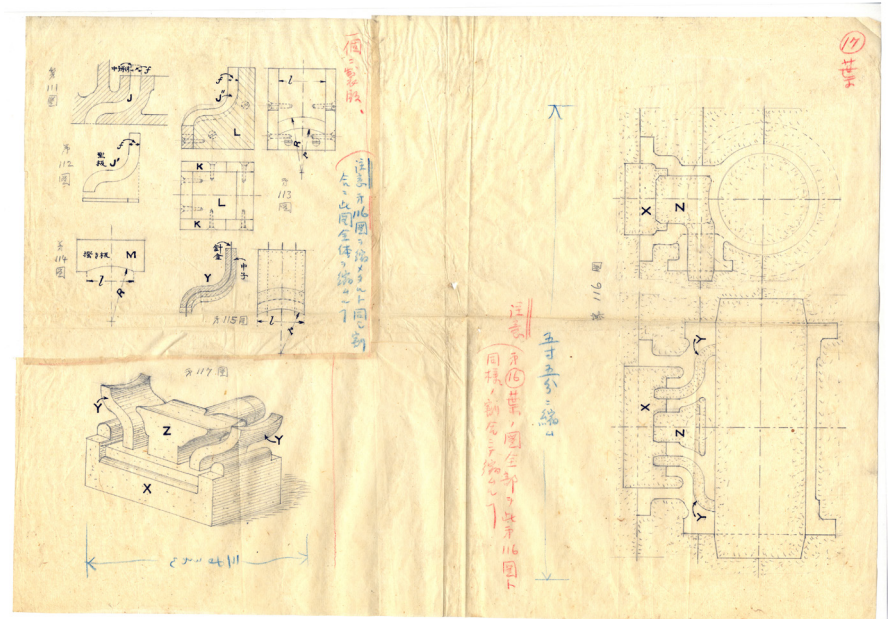


1

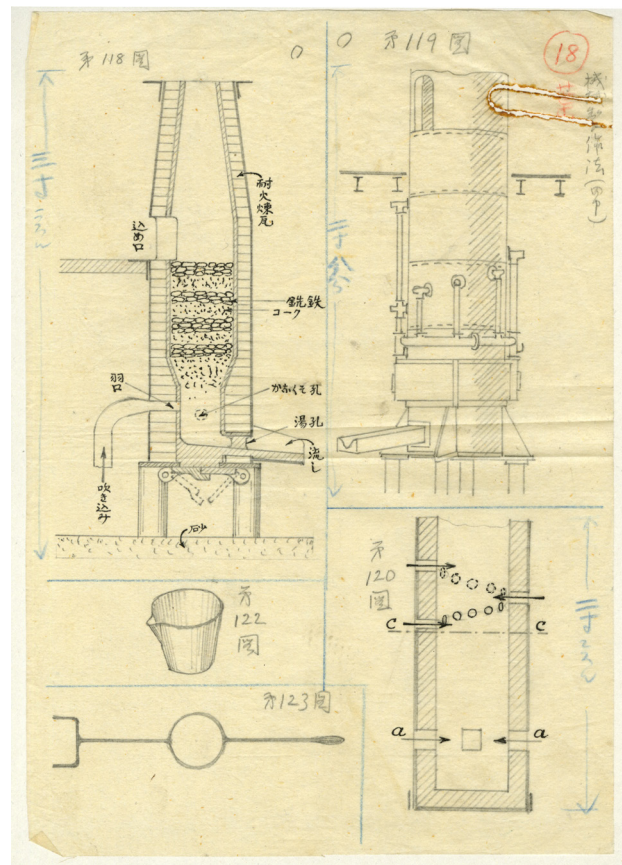
田中不二著『機械製作法』第一編および『機械製作法』第二編の図版原図

田中不二／大正8年（1919）8月以前／紙に鉛筆、インク／全46葉／最大：長辺398、短辺279、最小：長辺195、短辺147

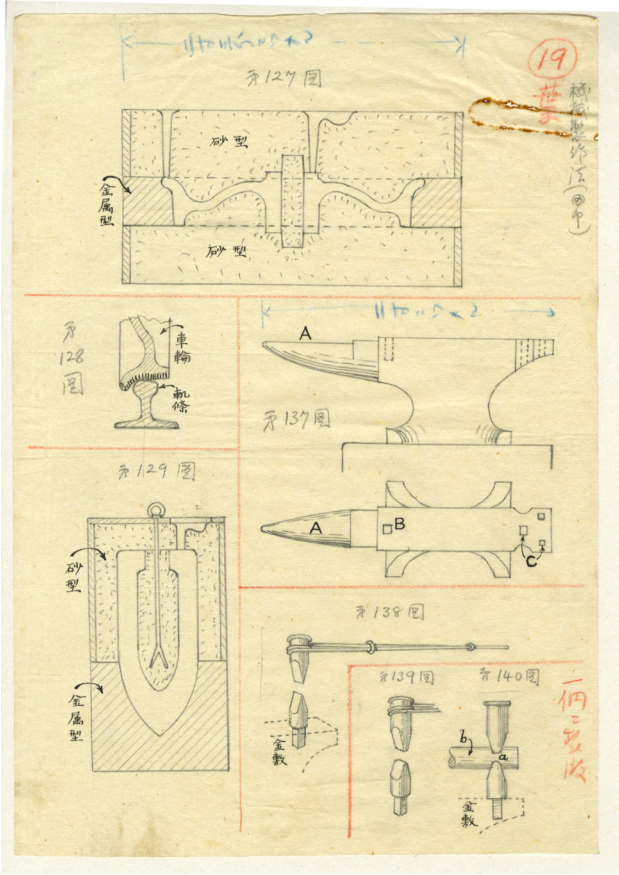
大正8年（1919）8月25日発行の不二の第三著作第一編「鑄造 鍛造」、大正12年（1923）1月28日発行の同第二編「工具 工作機械」（44頁）の図版原図。両編とも丸善より出版。理論書であった『應用力學』に比べ、本作は実用書の色合いが濃いためか、使う道具や作業手順を示す図版には、スケッチを思わせる細かい筆致が見られる。赤と青の鉛筆で、出版社への指示が書き込まれている。序文の執筆意図には、前作と同じく、機械製作法に関する日本語書籍がいまだわずかに留まるため、機械工業の発展を願って著したとある。不二は帝大機械工学科に追加開設された実験工学講座（実験機械工学および機械設計を扱う）を、講座開設の大正10年（1921）12月から翌年11月（逝去の月）まで担当したと『東京大学百年史』（昭和62年〔1987〕）に記録が残る。不二の単著では、序文の冒頭一文字に自身がデザインした飾り文字が使われたが、本著作第一編では「工」の文字が菊の花を背景に配される（図版5〔50頁〕）。菊は、不二が自分の名前の意匠にも用いたモチーフ。不二の死後に出版された第二編の序文は息子・儀一が代わりに著しており、飾り文字は見られないが、本文最終ページの最後に、この菊をあしらった「田中不二」のデザイン印章が印刷されている。



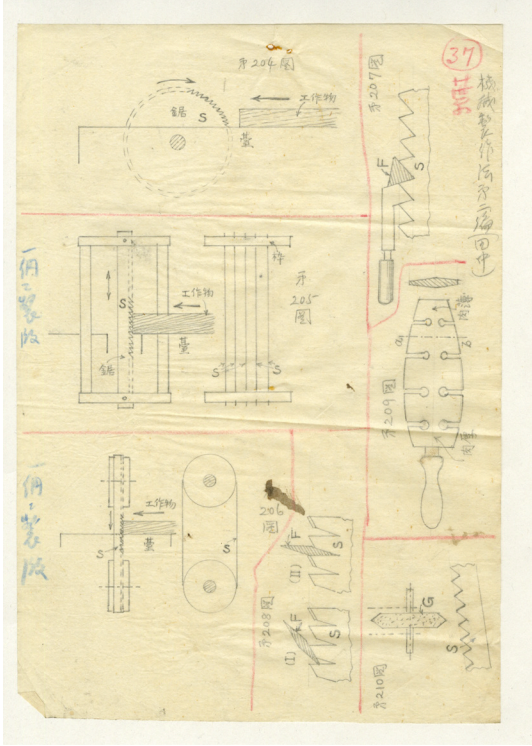
2



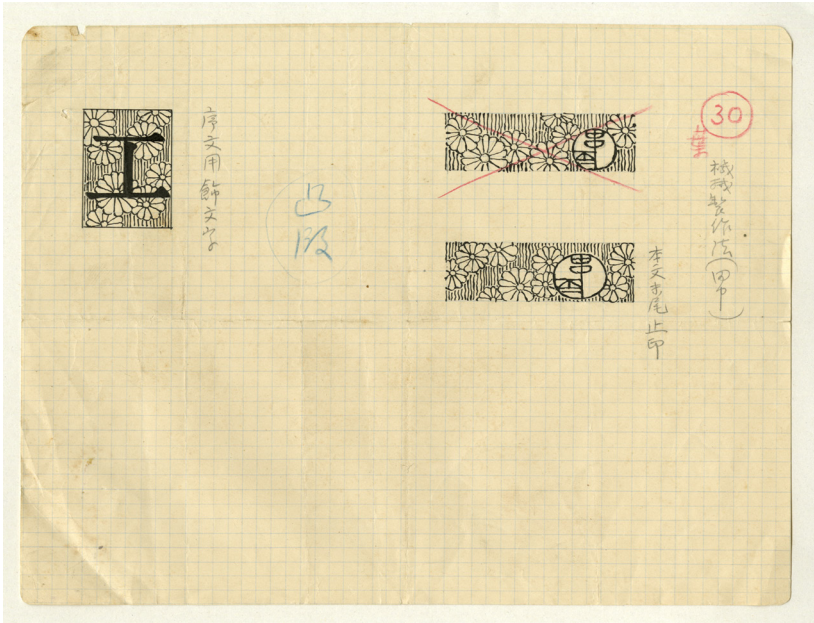
3



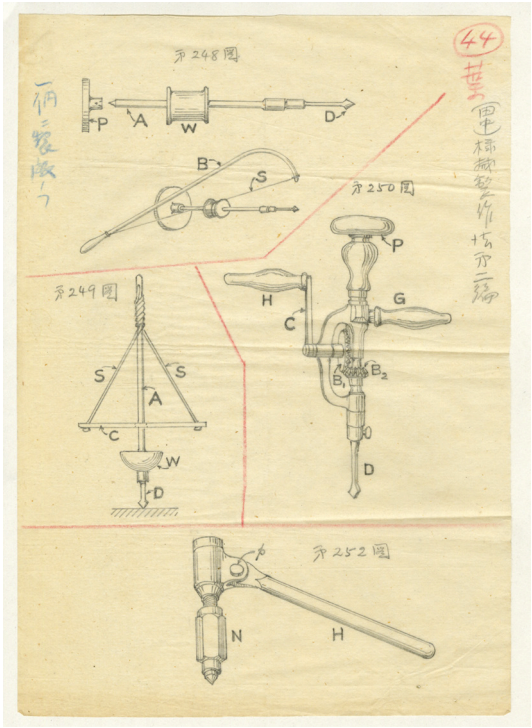
4



6



5



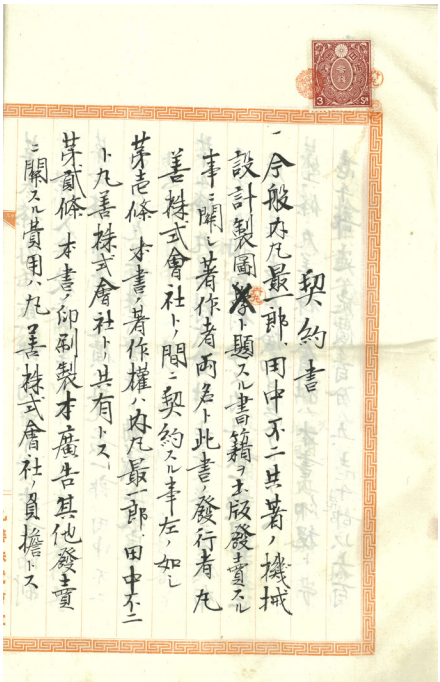
7

田中不二著『機械製作法』第一編および『機械製作法』第二編の図版原図

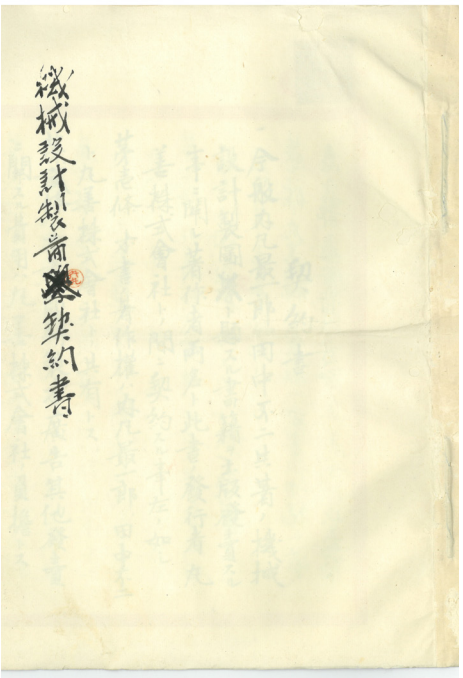
「機械設計製圖契約書」

内丸最一郎、田中不二、小柳津要人／明治38年（1905）5月15日／「丸善株式会社」罫紙に墨書、署名・捺印／縦290、横200

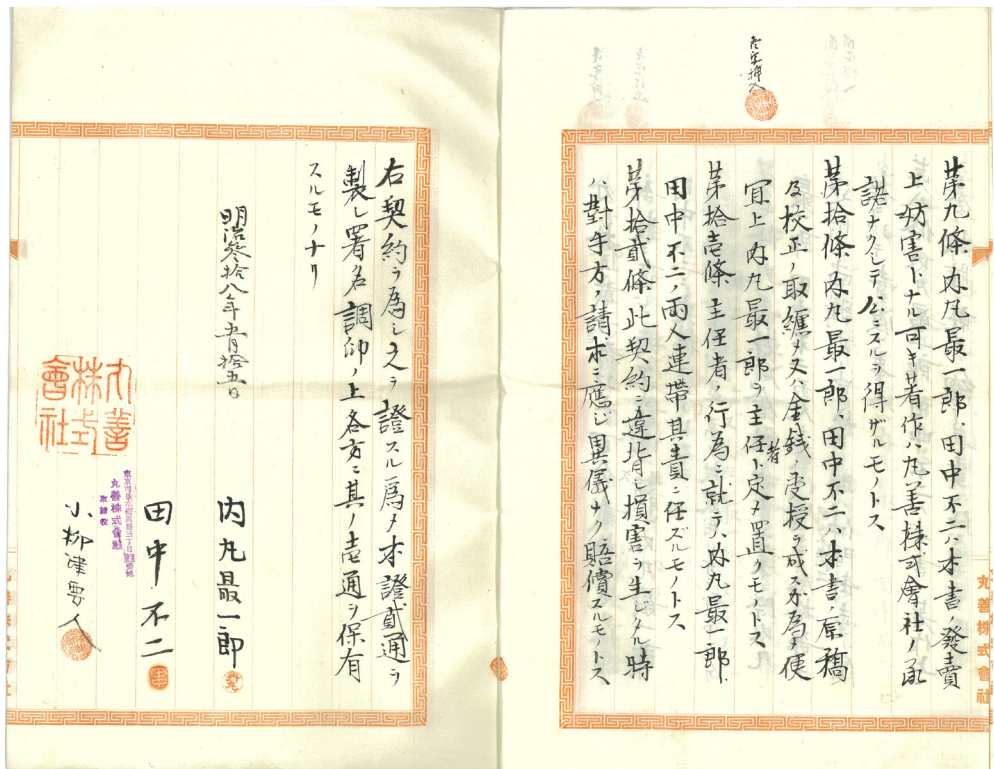
田中不二・内丸最一郎（明治10–昭和44 [1877–1969]）共著『機械設計及製圖』の出版に関する契約書。著者2名と発行者である丸善とで取り交わされた。表紙および本文の2か所に「機械設計製圖學」とあり、「學」の字が消され、内丸の訂正印が見られるため、書名の変遷がわかる（図版1–2）。契約は第12条まであり、著作権、費用負担、定価や印税等について定めている。図版4の第10条には、本書の原稿および校正のとりまとめや金銭の授受のため、内丸を便宜上の主任者と定めるとあり、出版時の著者名は不二が先となるのに対し、本契約書内では内丸の名前がすべて先に置かれている。不二の1年後輩にあたる内丸が出版社とのやり取りを引き受けたのだろう。



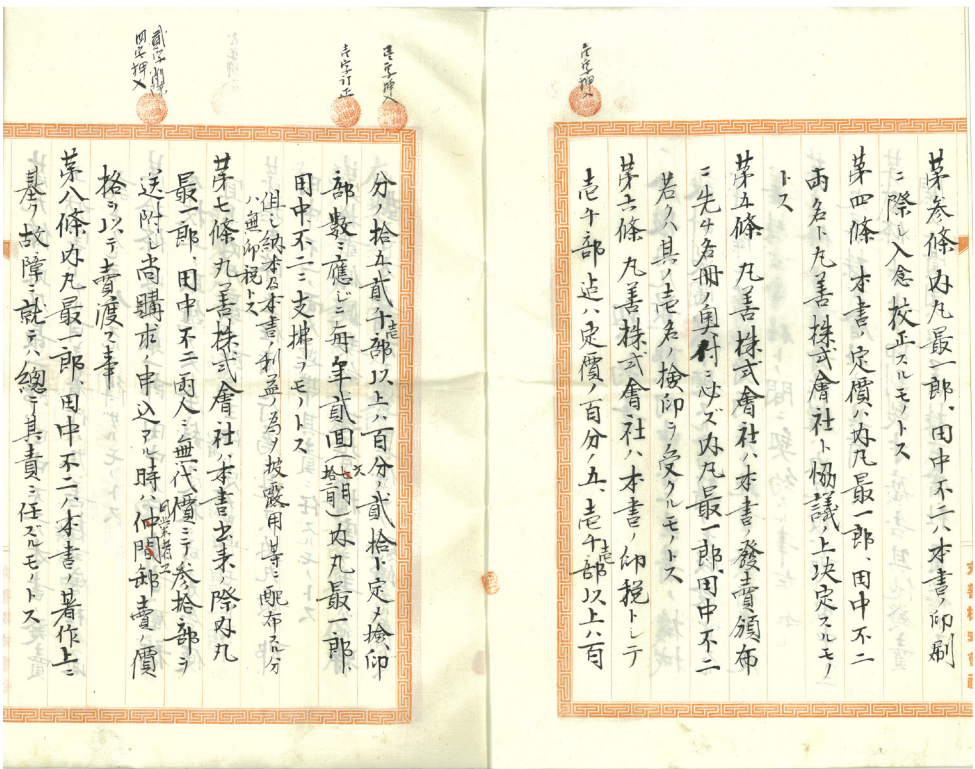
2



1



4

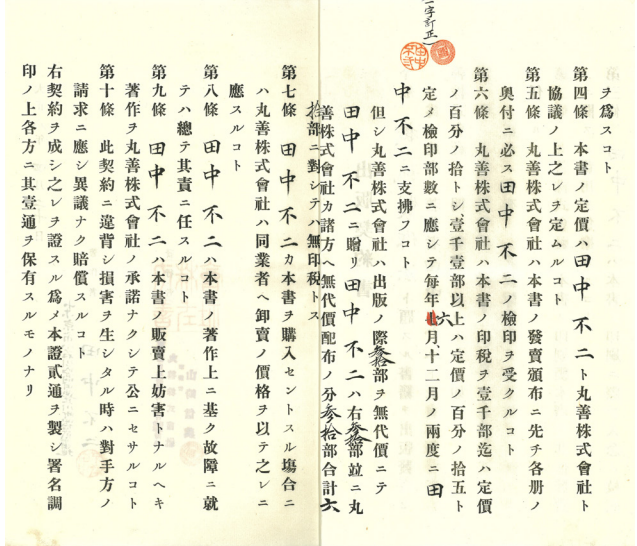
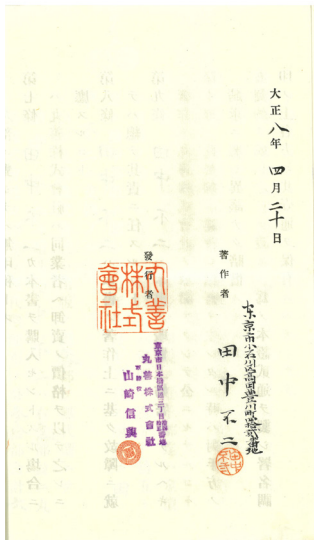
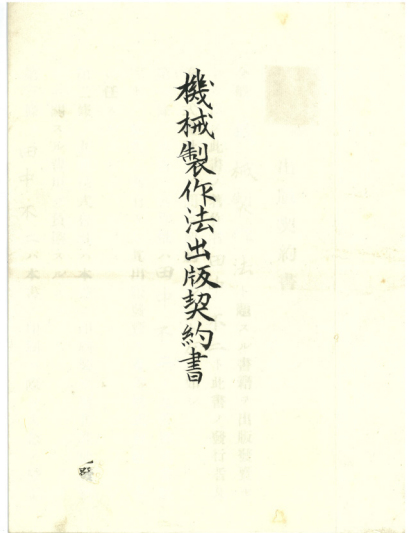
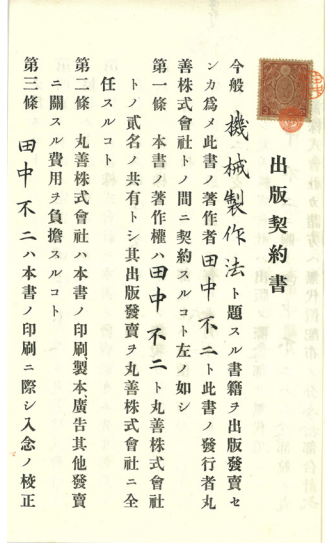
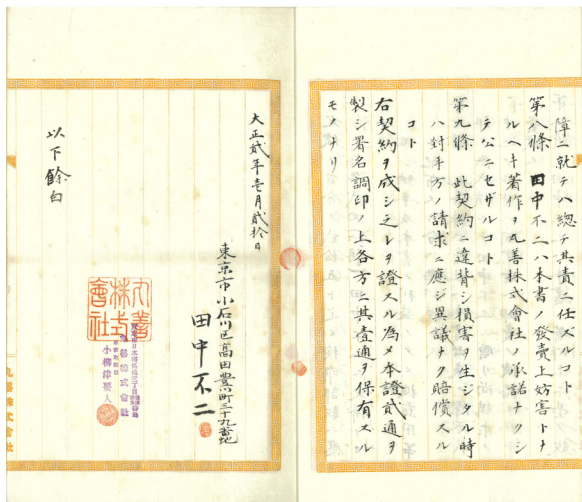
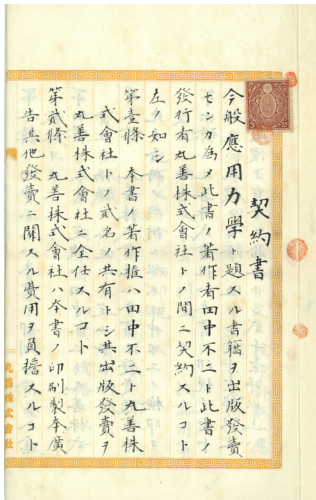
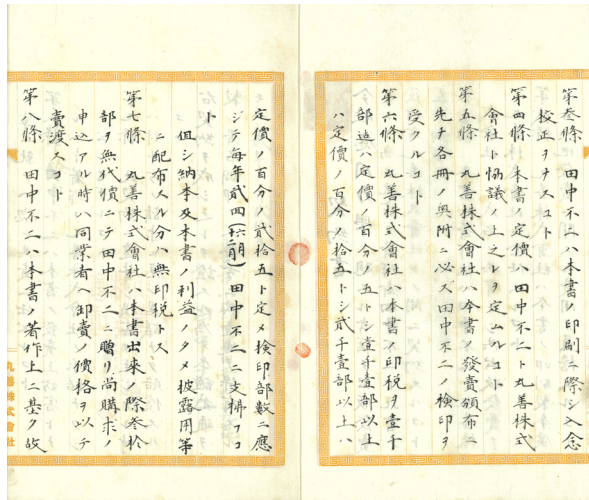
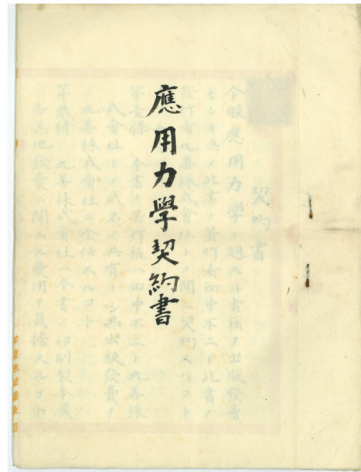


3

「應用力學契約書」

田中不二、小柳津要人／大正2年（1913）1月20日／
「丸善株式会社」罫紙に墨書、署名・捺印／縦280、横205

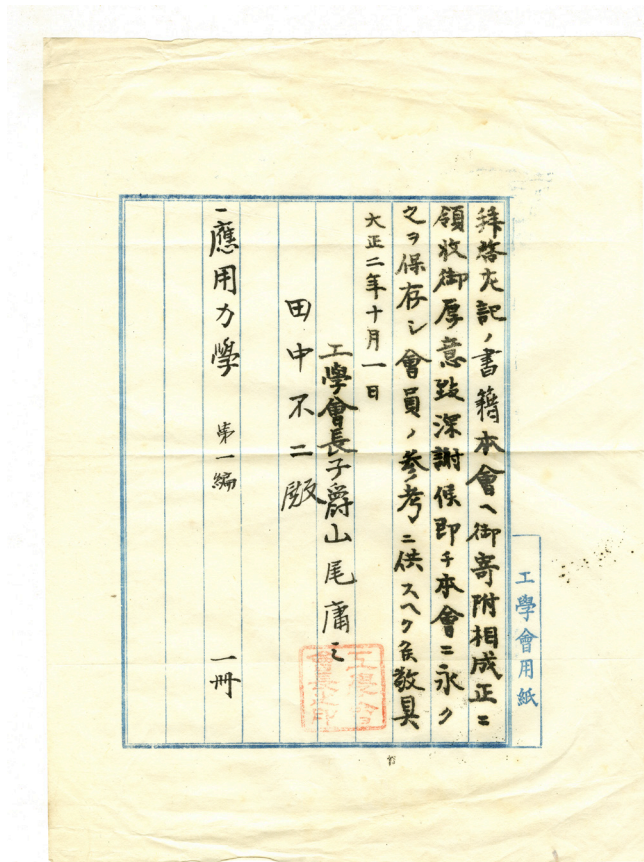
田中不二著『應用力學』の出版契約書。全9条からなる。前作
『機械設計及製圖』の契約書と同じくすべて墨書。丸善の専務
取締役・小柳津要人の名前は自筆署名から名前印に変わる。



「機械製作法出版契約書」

田中不二、山崎信與／大正8年（1919）4月20日／紙に印刷、墨書の書入れ、署名・捺印／縦270、横195

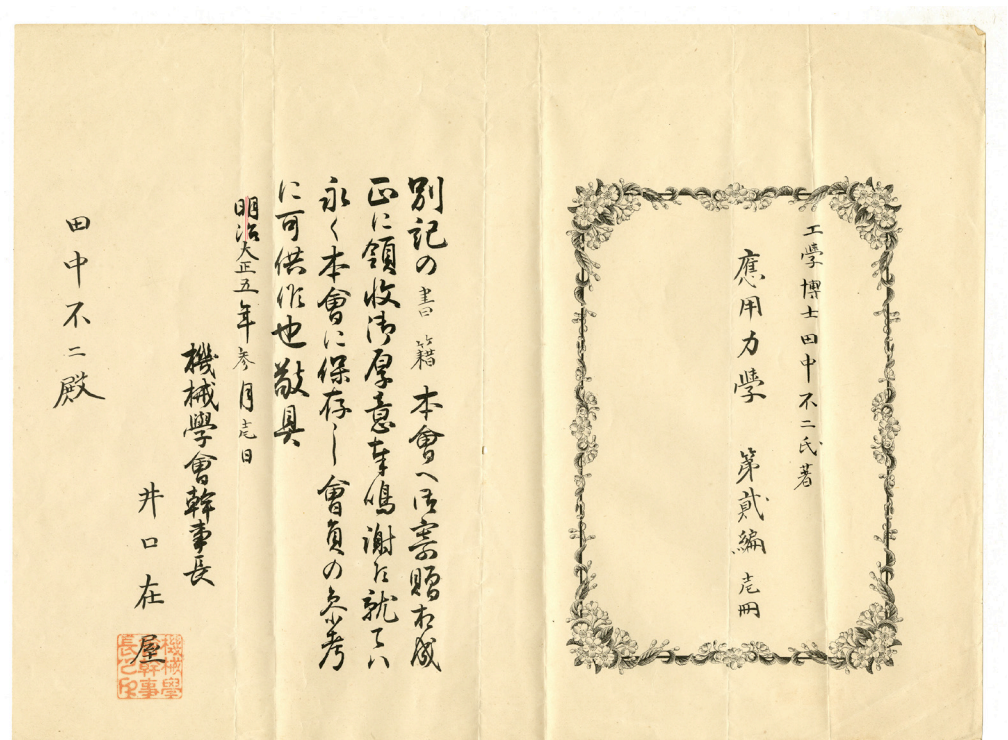
田中不二著『機械製作法』の出版契約書、全10条。書籍名や著者名、著者および出版社無償配布分の部数、
契約の日付を書き入れるところのみを空け、それ以外はすべて印刷されたフォーマットになっている。



田中不二著『應用力學』第一編への寄贈礼状

山尾庸三より田中不二宛て／大正2年（1913）10月1日／「工學會用紙」に墨書／「工學會會長之印」の押印あり／縦263、横191

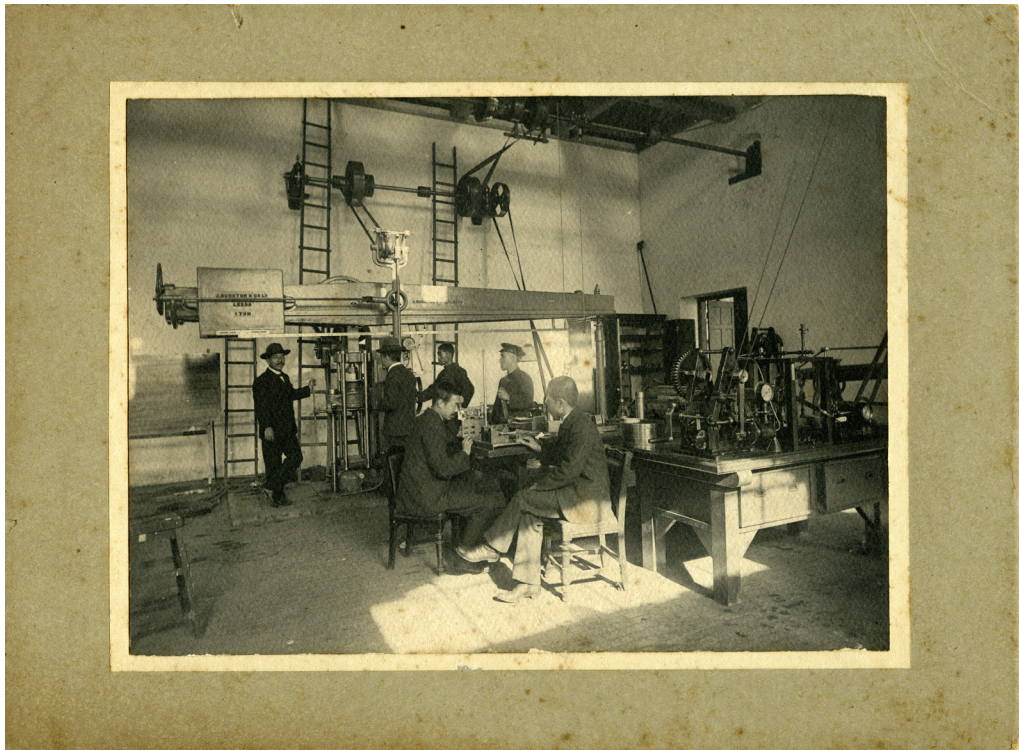
不二が自著を工学会に寄贈したのに対し、同学会会長で子爵の山尾庸三（天保8-大正6 [1837-1917]）から送られた礼状。長州藩出身の山尾は、文久3年（1863）に密航で伊藤博文（天保12-明治42 [1841-1909]）らとともに英国に渡り、工学を学んだ。明治元年（1868）に帰国後、工業の重要性および工業教育の必要性を明治新政府に提言し、明治3年（1870）に工部省の設立に携わると、翌年には日本最初の工学教育機関（工学寮、のちの工部大学校）を創設した、日本の工学の祖と言うべき人物。工学会は明治12年（1879）創設。工部大学校都検（校長）の英国人ヘンリー・ダイアー（1848-1918）が卒業生に対し、生涯にわたり学習を続けるべきことを強調し、日本における技術者会設立を推奨していたのを受け、同校第一期卒業生23名により組織された。日本で最初の工学系学術団体である工学会は、その後、技術の専門分化に伴い、鉱業、建築、電気、機械等の独立団体が創設されたため、大正11年（1922）に専門学会を会員とする団体会員制に改められた。不二は明治29年（1896）18歳の時に工学会に入会を許可されており、紹介者に井口在屋（安政3-大正12 [1856-1923]）の名前が確認できる。



田中不二著『應用力學』第二編への寄贈礼状

井口在屋より田中不二宛て／大正5年（1916）3月1日／紙に墨書、印刷装飾／「機械學會幹事長之印」の押印あり／縦235、横325

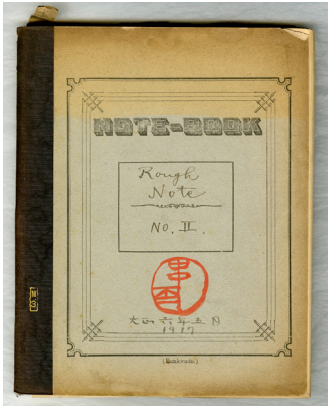
井口在屋（安政3-大正12 [1856-1923]）は明治15年（1882）に工部大学校機械科を卒業。明治19年（1886）に発足したばかりの帝大工科機械工学科の助教授に就任し、3年間のロンドン留学後、明治29年（1896）に同学科教授となる。応用力学講座や、流体力学および流体機械を扱う機械工学第三講座を担当し、特に前者は名物講義と言われていたという。不二が同学科に学んだ当時の恩師。井口は、工学会から専門分立することになった機械学会が明治30年（1897）に発足する際、初代幹事長（現在の会長）の真野文二（文久元-昭和21 [1861-1946]）らとともに発起人の一人として尽力し、幹事長を通算8回務めた。学会内の機械述語選定委員会の委員長も兼任した。不二も同委員会委員であり、不二の日誌に、本学会活動のためにたびたび時間を割いていた記録が残る。



工学実験所内の田中不二写真

撮影者未詳／明治34年（1901）以降から大正11年（1922）以前か／プロムオイル印画、台紙貼付／本紙：縦121、横164、台紙：縦154、横210

手前左に座る人物が不二。その右手に座るのは、帝大工科機械工学科教授の井口在屋（安政3-大正12〔1856-1923〕）か。2人の手元には、実験機械と思われるものが見える。奥に大型機械、右のテーブルの上にはメーターのついた機械等が置かれる。これらの機械類と同じものが、小川一眞撮影（万延元-昭和4〔1860-1929〕）の写真帖『東京帝國大學』明治37年（1904）版の「工学実験所試験室」に確認できるため、本写真が、不二の在職期間に工学実験所内で撮影されたことがわかる。本郷に工科大学新校舎が竣工した明治21年（1888）と同年、煉瓦造り二階建ての工学実験所が完成し、熱機関や機械製造法に関する設備が置かれた。実験所は校舎と同じく関東大震災で失われ、現存しない。

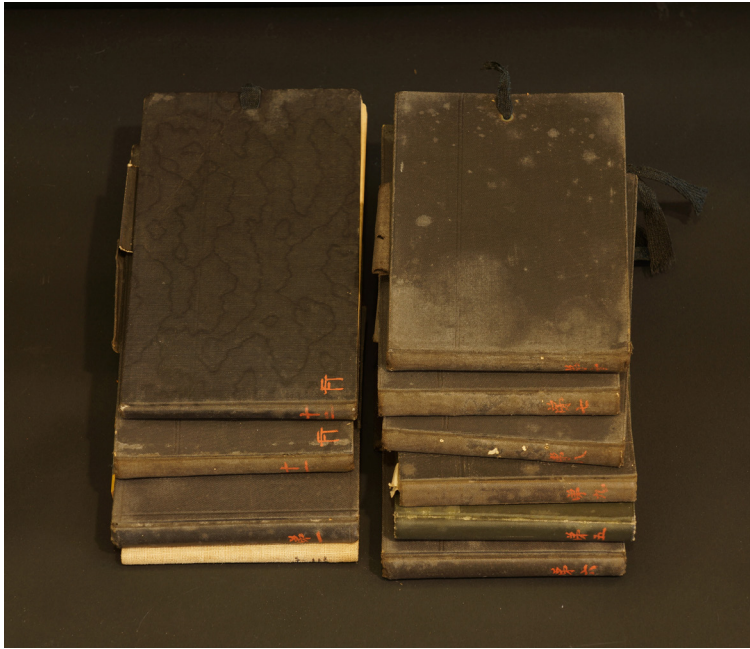


「機械、船用、第二年級聴講時間表（第二学期）」

大正7年（1918）11月から大正8年（1919）3月／紙に青焼き、赤・青鉛筆書、ノート26頁目に貼込み／本紙：縦184、横284、ノート：縦210、横166

不二のノートに貼り込まれたもの。ノート表紙には「Rough Note No.II. 大正六年五月 1917」と書かれ、印章形の手書きで不二の名前がある。時間表には、赤と青の鉛筆で縦線と斜線を使い分け、必修科目と選択科目の印がつけられている。帝大工科機械工学科は古くから船用機関との関係が深く、明治30年（1897）には船用機関学講座を開設、船用機関学専修の学生の養成を開始し、明治41年（1908）にはさらに船用機関学専修科を独立の課程とした（大正14年〔1925〕廃止）。赤鉛筆の「キ」が機械工学科、青鉛筆の「舶」が船用機関学専修のことか。この時間割表は帝大工科時代の最後、大正8年（1919）の工学部への改称と学科規定改革直前の時期にあたる。当時の大学修業年限は3年。不二の担当授業は木曜日2限目の「機械力学」と金曜日3限目の「実験工学」。他の機械工学科の教授・助教授陣には、斯波忠三郎（明治5-昭和9〔1872-1934〕）、丹羽重光（明治14-昭和41〔1881-1966〕）、加茂正雄（明治9-昭和35〔1876-1960〕）、島安次郎（明治3-昭和21〔1870-1946〕）、横山勝任（明治14-昭和41〔1881-1966〕）、内丸最一郎（明治10-昭和44〔1877-1969〕）の名前が確認できる。全員、帝大工科機械工学科卒である。

日時	8—9	9—10	10—11	11—12	1—2	2—3	3—4
月	電気機械試験法 十九号 西助教	電気工学 十九号 西助教	建築構造 十九号 西助教		造船学 十八号 （船舶工学） 米助教		
火	船用機関 五号 （機械工学） 西助教	水力機 五号 （船舶工学） 西助教	熱力学 五号 加茂教授	電気工学 十九号 西助教	造船学 十八号 （船舶工学） 米助教	電気工学実験	
水	製造 十二号 依	冶金学 十二号 依	建築構造 十九号 （船舶工学） 西助教	電気工学 十九号 西助教	造船学 十八号 （船舶工学） 米助教	工作機械（選修） 一 横山助教	
木	船用機関 五号 （機械工学） 西助教	機械力学 十九号 田中教授	鉄道車輛 五号（選修） （機械工学） 西助教				
金	熱力学 五号 加茂教授	電気工学 一 田中教授	水力機 五号 （船舶工学） 西助教		機械工学実験		
土	工業経済学 一 桑田講師		機械設計法 五号 新波教授	川崎必経 多助教	船舶必経 多助教		



写生帖

田中不二／明治30年（1897）2月から大正11年（1922）3月頃／紙に鉛筆、水彩、紐付き／背表紙に巻号の朱文字／最大：縦115、横188、最小：縦112、横155

田中不二の写生帖は「第一」から「十三」まで11冊が当館に所蔵される（第二と第三が不明）。不二は美術・デザインへの深い関心を持ち、日常生活や旅先で、たびたびスケッチをしていた。

写生帖「第四」

明治34年（1901）4月から明治37年（1904）12月頃／紙に鉛筆、水彩、写真貼付、紐付き／背表紙に「第四」の朱文字、内表紙に「第四 明治三十四年四月 田中不二」の墨書あり／縦112、横184

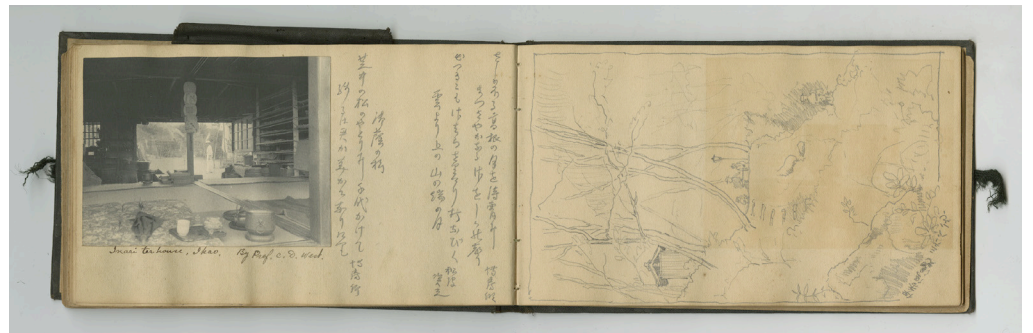
本写生帖には、明治36年（1903）8月の日付が書き添えられた、不二が描いた伊香保の風景とともに、チャールズ・ディッキンソン・ウエスト（1847–1908）撮影のプロムオイル写真6点が貼付された頁がある。うち5点は、パノラマ風景写真。不二は同年4月に帝大工科機械工学科を卒業し、7月に同学科講師となる。就職直後の不二が、帝大工科機械工学科の恩師であり同僚のウエストとともに、8月の数週間にわたり、伊香保を訪れたことがわかる。図版2の左頁は、同年8月26日の5時にウエストが伊香保の金太夫ホテルの上階ベランダから撮影した写真。同じく図版2の右頁は、同年8月18日に不二が描いたオニユリ。不二の写生記録としてのみならず、師弟の交遊、ウエストの写真への関心も読み取ることができる貴重な資料である。



1



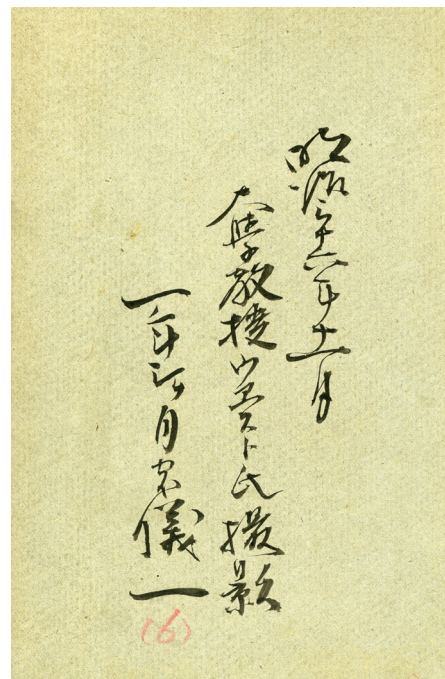
2



3



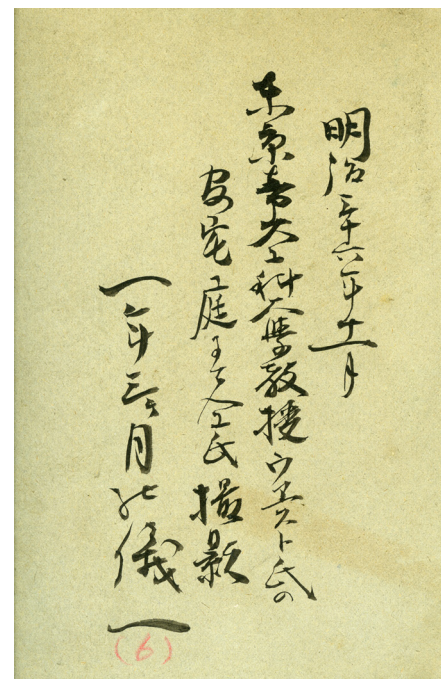
4



田中不二・儀一親子写真

チャールズ・ディッキンソン・ウエスト撮影／明治36年（1903）11月21日／ゼラチンシルヴァープリント、台紙貼付／表に「Nov. 21. 03 By C. D. West, Prof of I. U. T.」のインク書、台紙裏に「明治三十六年十一月 大學教授ウエスト氏撮影 一年三ヶ月の儀一」の墨書あり／本紙：縦146、横104、台紙：縦170、横110

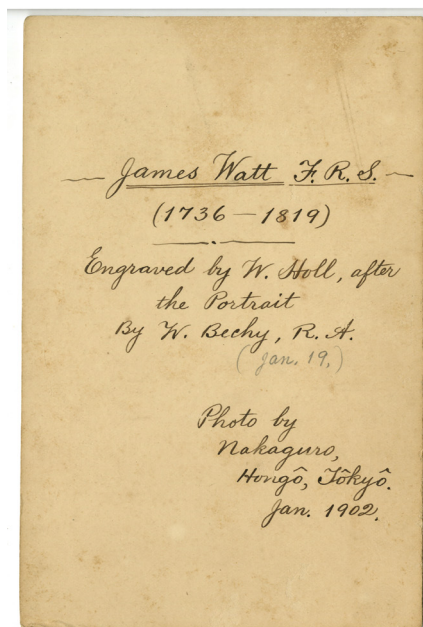
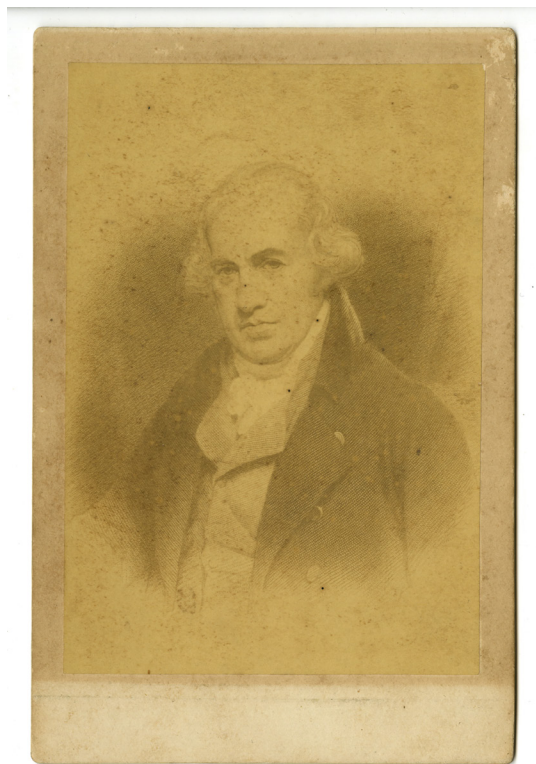
チャールズ・ディッキンソン・ウエスト（1847－1908）は、工部大学校と帝大工科で教鞭を執ったアイルランド人教師。工部大学校都検（校長）ヘンリー・ダイアー（1848－1918）の後任として明治15年（1882）に来日し、機械工学と造船学を教えた。不二の学生時代の師であり、講師・助教授時代の同僚。ウエスト撮影による本写真は、写真館で撮影された肖像写真と異なり、自然体の被写体が目を引く。他に、不二の妻・芳子が写ったものもあり（63頁）、裏書に「ウエスト氏の官宅庭にて全氏撮影」と確認できるため、1歳3ヶ月の儀一を連れ、親子3人でウエスト邸を訪問した際に、その庭で撮影されたことがわかる。不二とウエストの私生活での交遊を示す点で興味深い資料である。



参考図版

田中芳子・儀一親子写真

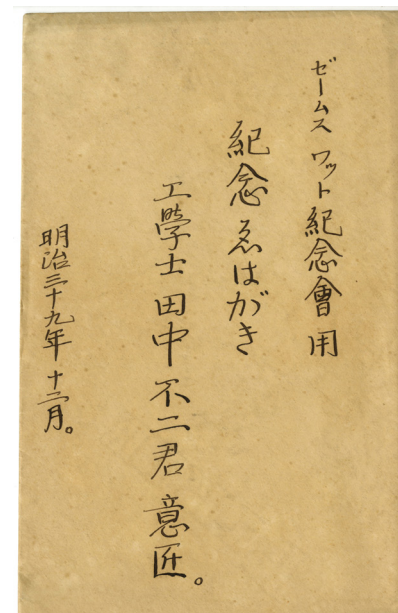
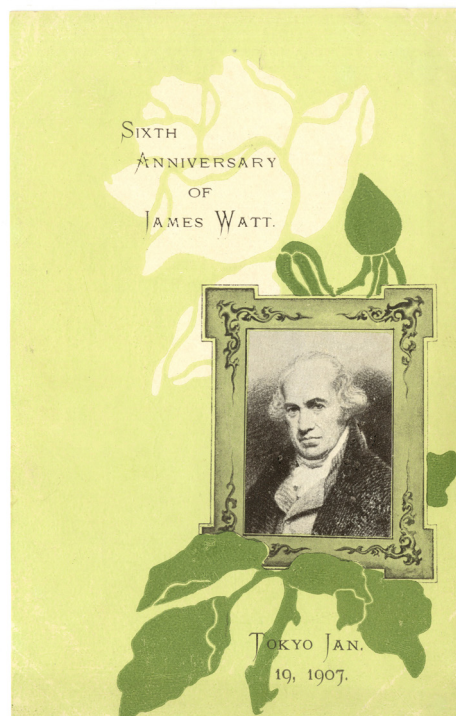
チャールズ・ディッキンソン・ウエスト撮影／明治36年（1903）11月21日／ゼラチンシルヴァープリント、台紙貼付／台紙裏に「明治三十六年十一月 東京帝大工科大學教授ウエスト氏の官宅庭にて全氏撮影 一年三ヶ月の儀一」の墨書あり／本紙：縦144、横102、台紙：縦169、横110



ジェームズ・ワット肖像写真（ステイプル銅版画を複写）

中黒實撮影／明治35年（1902）1月／鶏卵紙、台紙貼付／台紙裏に「James Watt F. R. S (1736-1819) Engraved by W. Holl, after the Portrait By W. Bechy, R. A. Photo by Nakaguro, Hongô, Tôkyô. Jan. 1902.」とインク書あり／田中不二旧蔵／縦161、横108

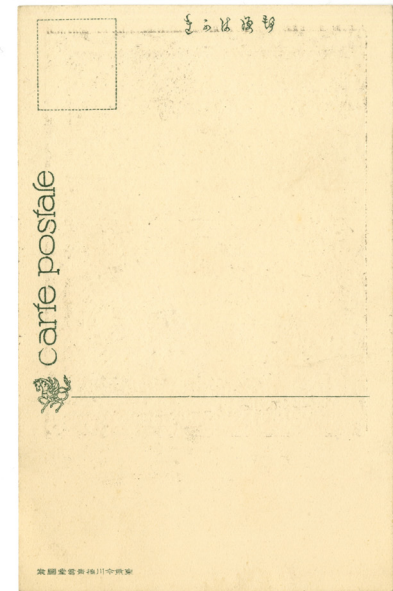
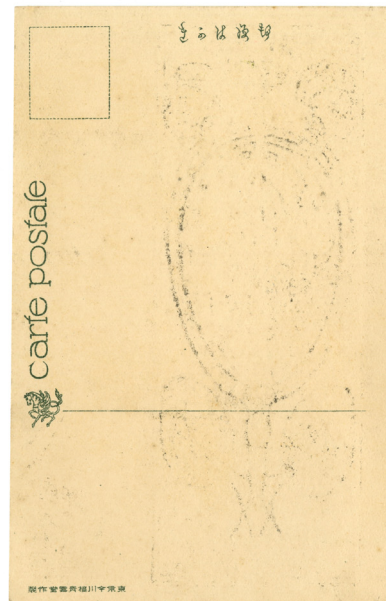
不二がジェームズ・ワット（1736-1819）の肖像をデザインのモチーフにする際に使用した写真と思われる（65頁）。元の油彩画は1802年に英国人肖像画家ウィリアム・ビーチェイ（1753-1839）が描いたもの。台紙裏の記載によれば、それを版画家の「W. Holl」が銅版画にし、本郷に写真館を構えていた中黒實が写真に撮った。ステイプル（点刻）彫版の技法から、版画家はウィリアム・ホール（1771-1838）と推定される。このワットの肖像は、多くの版画家が複製を制作している有名なイメージである。



第9回ジェームズ・ワット記念会記念絵葉書

田中不二意匠／明治39年（1906）12月／紙にグラビア印刷、封筒入り／東京高等工業学校工業図案科製版印刷／封筒表に「ジェームスワット記念會用紀念えはがき 工學士田中不二君意匠。明治三十九年十二月。」とインク書あり／本紙：縦140、横90、封筒：縦149、横95

ジェームズ・ワット（1736-1819）はスコットランド生まれの英国の発明家、機械技術者、科学者。蒸気機関改良を通じて、英国のみならず世界の産業革命の進展に寄与した。動力単位のワットは彼にちなんで名づけられた。ワットの誕生日である1月19日に毎年開催していた記念会のために、田中不二がワットの肖像画とバラを組み合わせてデザインした。記念会の主催は機械学会か。記念会では記念晩餐会が催され、不二はそのメニューのデザインも手がけている。本絵葉書の製版印刷は、明治30年（1897）から大正3年（1914）とわずか17年の設置期間にもかかわらず、日本の工業デザインの発展に大きく寄与したと言われる東京高等工業学校（前身は東京職工学校、東京工業大学の源流）工業図案科による。



「機械學會」絵葉書

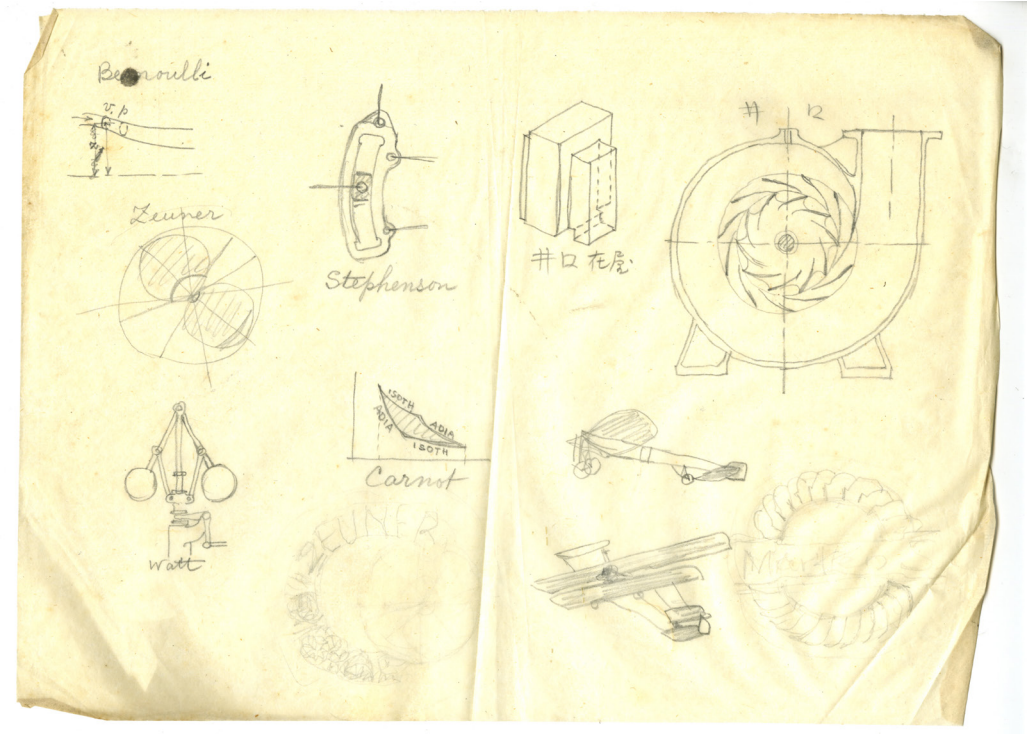
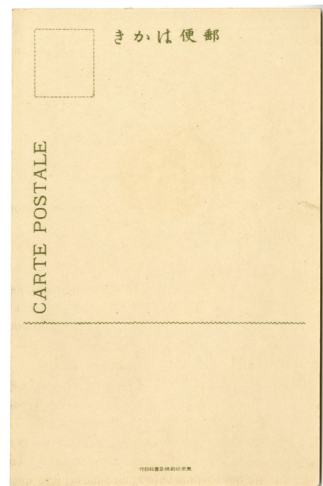
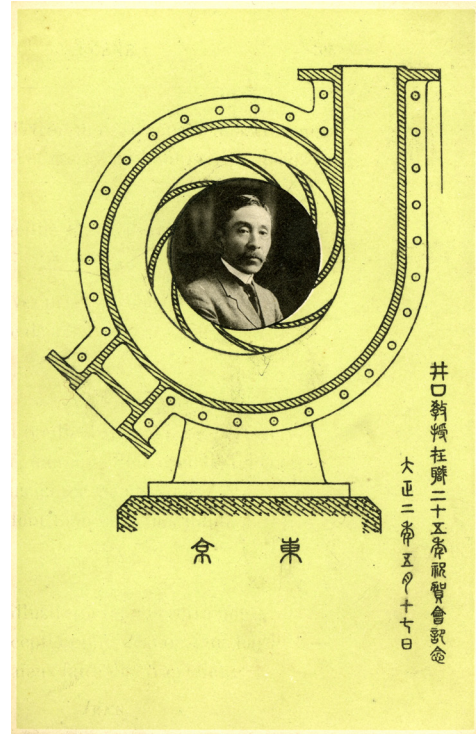
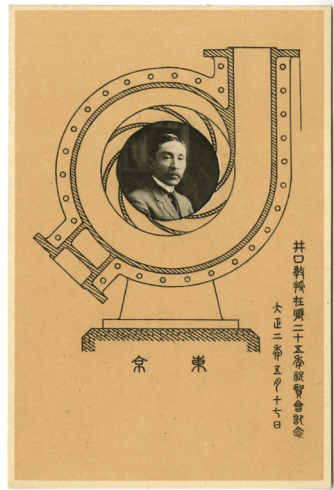
田中不二意匠／明治40年（1907）4月以降から大正7年（1918）3月以前か／紙に多色石版印刷、ニス引き／東京今川橋青雲堂図案／縦140、横90

左下に「FT」と不二のイニシャルが確認できる。中央には不二が機械学会で繰り返し用いた機械モチーフがあり、「W」の文字は、英国の著名な発明家で機械技術者ジェームズ・ワット（1736–1819）のイニシャルと推定される。ステンドグラスのような、桜をあしらった曲線的な意匠にはアール・ヌーヴォーの影響が感じられる。機械学会のために作られたことはわかるが、正確な制作年は未詳。ただし、宛名面の下部3分の1を通信欄としていることから、おおよその年代が推測できる。

「機械學會 東京臨時大會」絵葉書

田中不二意匠／大正3年（1914）4月／紙に石版印刷／東京今川橋青雲堂図案／縦141、横91

菊の文様を用いた緑の中に、木に留まる鳳凰のような鳥が見える。最も目を引くのは、左下の機械モチーフであり、全体のモノクロのデザインに対し、その部分のみに白のハイライトが効果的に用いられている。緑の左下に、不二のイニシャル「FT」が入る。不二はしばしば機械学会の行事などに際し、本絵葉書のようなデザインを手掛けていた。明治30年（1897）創設の機械学会初代会長は帝国大学工科大学教授の真野文二（文久元–昭和22 [1861–1947]）。明治14年（1881）に工部大学校機械科を卒業した、田中林太郎の同期生である。真野は、明治19年（1886）に英国のグラスゴー大学へ留学し優秀な成績を修めると、英国機械学会会員に推挙された。日本の機械学会はこの英国機械学会を範にした。



「井口教授在職二十五年祝賀會記念」絵葉書

田中不二意匠／大正2年（1913）5月17日／紙にオフセットおよび石版印刷／東京印刷株式会社印行／縦141、横91

帝大工科機械工学科教授、井口在屋（安政3-大正12〔1856-1923〕）の在職25年を祝うために作られた。井口は明治34年（1901）以降、機械工学科の教室主任を務め、同学科の研究・教育ともに大きな影響を与えた。不二は内丸最一郎（明治10-昭和44〔1877-1969〕）とともに井口の学統を受け継いだと言われており、特に不二は井口との協働研究も多く、木材の剪断試験に関する共著論文も出している。絵葉書には井口本人の肖像が、彼の最も優れた研究業績の一つに認められる渦巻きポンプのモチーフにはめ込まれている。本研究は明治38年（1905）に発表され、英国の『The Engineer』誌で絶賛を浴びたという。絵葉書本体に不二の名前やイニシャルは見られないが、類似のデザインスケッチが残されている（69頁）。同じデザインで、薄茶色と薄緑色の地色が異なる2種類の葉書がある。

デザインスケッチ

田中不二／年代未詳／紙に鉛筆／縦201、横286

右上の「井口」と書かれたモチーフは、不二の恩師、井口在屋（安政3-大正12〔1856-1923〕）の帝大工科機械学科在職25年記念の絵葉書（68頁）のデザイン案か。左下には「Watt」と書かれた機械モチーフがあり、ジェームズ・ワットが設計した蒸気機関図面に類似のパーツが存在する。こちらも、不二がデザインした機械学会の絵葉書に同じモチーフが確認できる（66-67頁）。



欧州ガラスおよび陶磁器コレクション

20世紀初期か／田中不二旧蔵／1：高109、最大幅75、2：高70、最大幅64、3：高89、最大幅80、4：高69、最大幅78、5：高100、最大幅96、6：高47、最大幅65、7：高23、最大幅73、8：高71、最大幅41、9：高13、最大幅73、10：高26、最大幅40、11：高43、最大幅57、12：高21、最大幅35

不二が明治41年（1908）から3年間にわたり、機械工学研究のため、英・独・仏に留学していた時に収集したもの。留学先から日本に持ち帰ることも考え、手のひらに納まる程度の小さなものを多く買い求めたか。不二はロンドンに最も長く滞在し、三国のほか、ベルギー、イタリア、スイス、デンマーク等も訪れた。欧州の伝統的な陶磁器に加え、当時、一世を風靡していたアール・ヌーヴォーの装飾様式も見られる。不二の美術的関心がこのコレクションから窺える。それとともに、第五回内国勸業博覧会（明治36年〔1903〕）の審査補助に関わった経験をもち、ロンドンで日英博覧会（明治43年〔1910〕）に立ち会った不二は、産業振興や工業デザインの観点から、これらを眺めていたかもしれない。

1	2	3	4
5	6	7	8
	9	10	11
			12

田中儀一

（明治三五―昭和六〇〔一九〇二―一九八五〕）



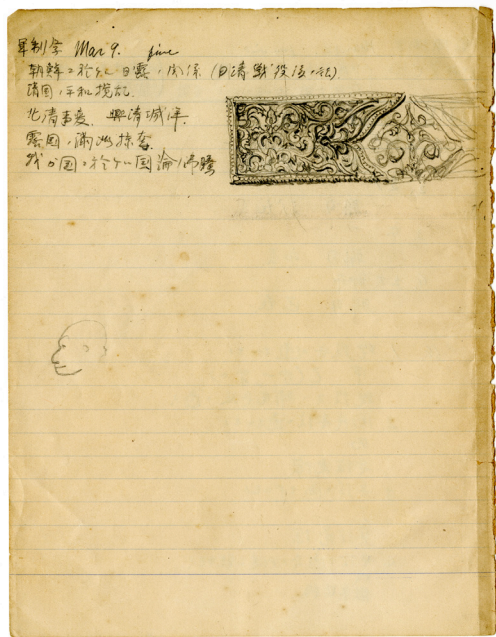
不二・芳子夫妻の長男として、明治35年（1902）8月2日、東京に生まれる。大正9年（1920）3月、成蹊中学校卒業、大正14年（1925）3月、早稲田大学付属第一早稲田高等学院理科を修了、昭和3年（1928）3月、早稲田大学理工学部建築学科卒業。中学時代から、洋画家・曾宮一念（明治26―平成6〔1893-1994〕）に絵を学び、一生の師とする。同年4月、大蔵省営繕管財局の職員となる。翌昭和4年（1929）2月、幹部候補生として千葉鉄道第一連隊に入隊するが、同年11月に除隊。昭和5年（1930）1月、再び営繕管財局に雇用され、意匠設計主任・吉武東里（明治19―昭和20〔1886-1945〕）のもとで、嘱託として帝国議会議事堂（現国会議事堂、昭和11年〔1936〕竣工）の内部装飾の仕事に加わる。昭和14年（1939）8月、営繕管財局を退職し、海軍技師となり、海軍省建築局付きとなる。上海海軍施設部、横須賀海軍施設部に配属。終戦後、焼津地方施設事務所長、横須賀施設部本部勤務を経て、昭和20年（1945）10月に免官。同年11月に米海軍機関パブリックワークスオフィスに勤務。昭和21年（1946）6月、同機関を退職し、合資会社馬淵組（後の馬淵建設株式会社）に勤務。東京支店長も務める。昭和35年（1960）4月、馬淵建設会社を退職し、しばらく自宅にて静養の後、協和营造株式会社に勤務。昭和54年（1979）3月、同社退職。昭和60年（1985）3月31日、82歳で逝去。



田中儀一肖像写真

柴田常吉撮影／昭和4年（1929）頃か／三越写真部製／ゼラチンシルヴァープリント、二つ折り台紙貼付／写真脇に「田中儀一曹長銚子第一連隊第二中隊」と鉛筆書あり／本紙：縦85、横55、台紙表紙：縦168、横112

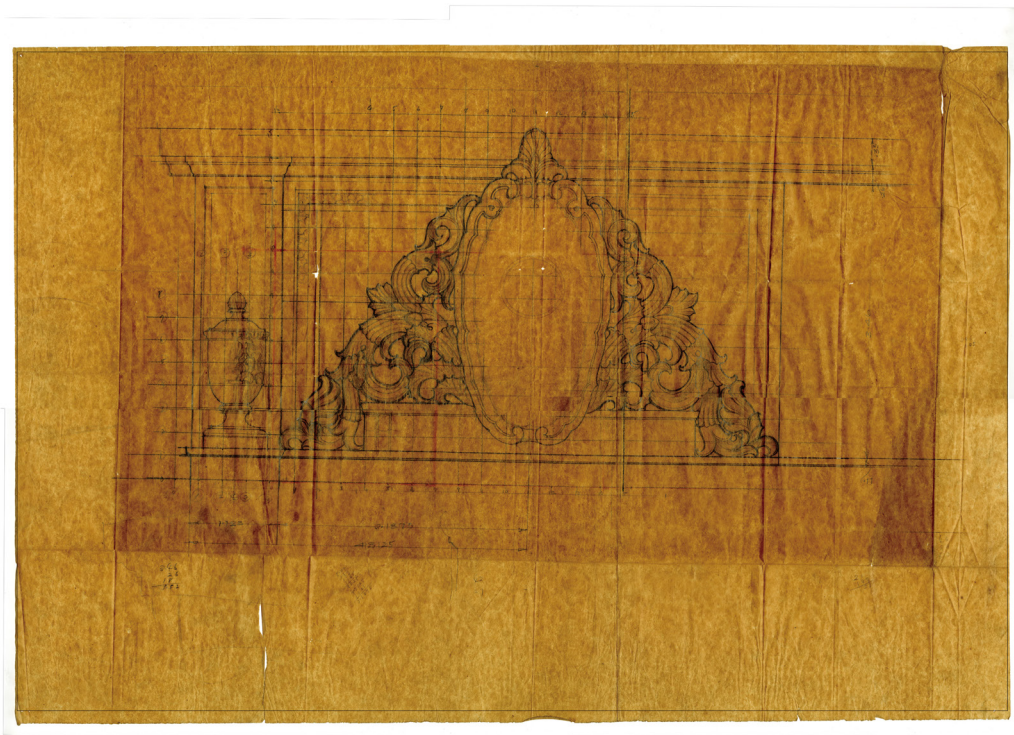
大蔵省宮繕管財局勤務に挟まる、約1年の千葉鉄道第一連隊第二中隊曹長時代、儀一が26歳頃に撮影された。この頃既に、帝国議会議事堂内部装飾の仕事への関与があったのではないかと伺わせるデザインスケッチも残る（75頁）。撮影者の柴田常吉（嘉永3-昭和4〔1850-1929〕）は三越写真部の写真技師で、日本人が撮影した現存する最古の動画と言われる『紅葉狩』（明治32年〔1899〕製作）の撮影担当として知られる。



参考図版
ノート（部分）

田中儀一／昭和4年（1929）か／紙に鉛筆、2葉／縦209、横160

儀一が千葉鉄道第一連隊時代に記したと考えられるノートの一部。一葉に唐草文様の彫刻デザインと思われるスケッチがある。



帝国議会議事堂便殿入口上部大理石レリーフ図案

田中儀一／昭和3年（1928）または昭和5年（1930）頃か／紙に鉛筆／縦745、横525

楯を中心に唐草および花瓶がデザインされる。便殿前広間床大理石モザイクの下書きと思われる図案（78–79頁）に比べると、グリッド線や大きさが書き込まれており、図面として完成させていくプロセスが進んだものであることが窺える。儀一は、意匠設計主任・吉武東里（明治19–昭和20 [1886–1945]）のもとで、議事堂の中心に位置する最も主要な部分の一つである便殿前広間の装飾を担当した。便殿入口の壁には、本大理石レリーフのほか、左右に桜と橘の石膏製の浅浮彫が配され、筒形の天井には、ステンドグラスを入れた天窓が設けられている（84–85頁）。便殿は現在、御休所と呼ばれている。議事堂建設の計画は明治時代にまで溯り、大正7年（1918）の着工から数えて、完成までに、約19年もの歳月を費やした、一大国家プロジェクトであった。



帝国議会議事堂便殿入口上部大理石レリーフ原寸図

田中儀一／昭和3年（1928）または昭和5年（1930）頃か／紙に鉛筆、3枚1組／1：長辺1065、短辺750、2：長辺1063、短辺755、3：長辺1060、短辺750

この大理石レリーフは、便殿入口左右の壁付柱とともに、一つの「時鳥」大理石から作られた。本原寸図からも、その大きさと贅沢さがわかる。中央広間廻り、便殿前広間廻り、帝室階段（中央階段）廻りといった、建物の中心をなす主要な部分の大理石の内装工事は昭和5年（1930）1月から12月にかけて行われたと『帝国議会議事堂建設報告書』（昭和13年 [1938]）に記録が残る。その大理石貼付工事の仕様には、彫刻や繰形などは指示の原寸図および模型に基づき、型などを作り、指図の通り工作することが明記されている。本原寸図も実際に工事を行う業者への指示のために作られた図面であり、その下書きが儀一の手元に残ったのだろう。

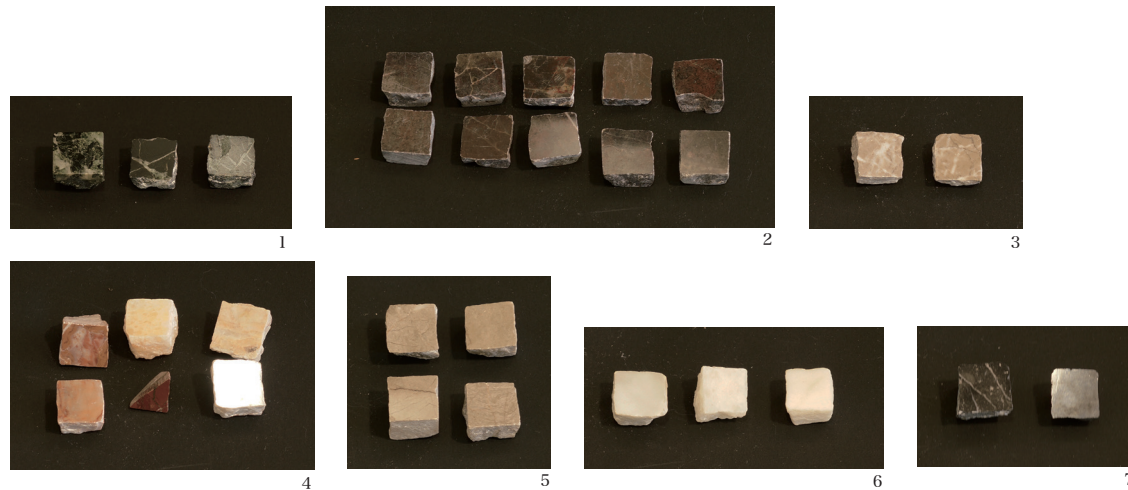


帝国議会議事堂便殿前広間床大理石モザイク図案

田中儀一／昭和3年（1928）または昭和5-6年（1930-31）頃か／紙に鉛筆／大：長辺745、短辺535、小：長辺270、短辺192

便殿前広間は、議事堂中央広間から中央階段を上ったところに位置する。幅約7.3メートル、長さ約21.8メートルの長方形の空間。床の装飾は、中央広間と同じ大理石モザイクで、約60万個の石が使用された。これら二つの図案に見るように、便殿前広間の床大理石モザイクは、唐草文様の大きな菱形と小さな正菱形の二つから構成される。本図案は、グリッド線やサイズ表記、モザイクのはめ込みプランが示されていないことから、デザイン案の下書きであると思われる。ただし、完成したモザイクと輪郭線がほぼ一致するため、完成形の原案であると推測できる。『帝国議会議事堂建設報告書』（昭和13年〔1938〕）には、大理石モザイク工事は昭和6年（1931）3月から11月にわたり施工されたと記録が残る。さらに、便殿前広間廻りの大理石の内装工事の仕上げは、昭和11年（1936）4月から5月にかけて、中央広間のモザイクとともに、補修と磨き工事が行われた。竣工後はこのモザイクの上に一枚織の絨毯が敷かれていたという。議事堂の設計図類や材料見本を含む資料は火災や戦災によりほとんど失われているため、便殿前広間の装飾担当であった儀一のところに残った本図案や見本石（80-81頁）は貴重な原資料である。



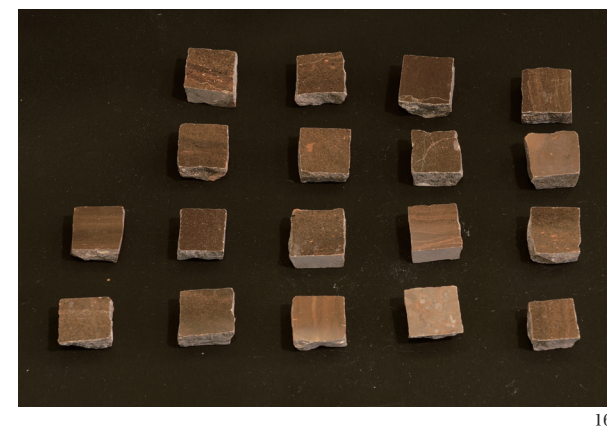
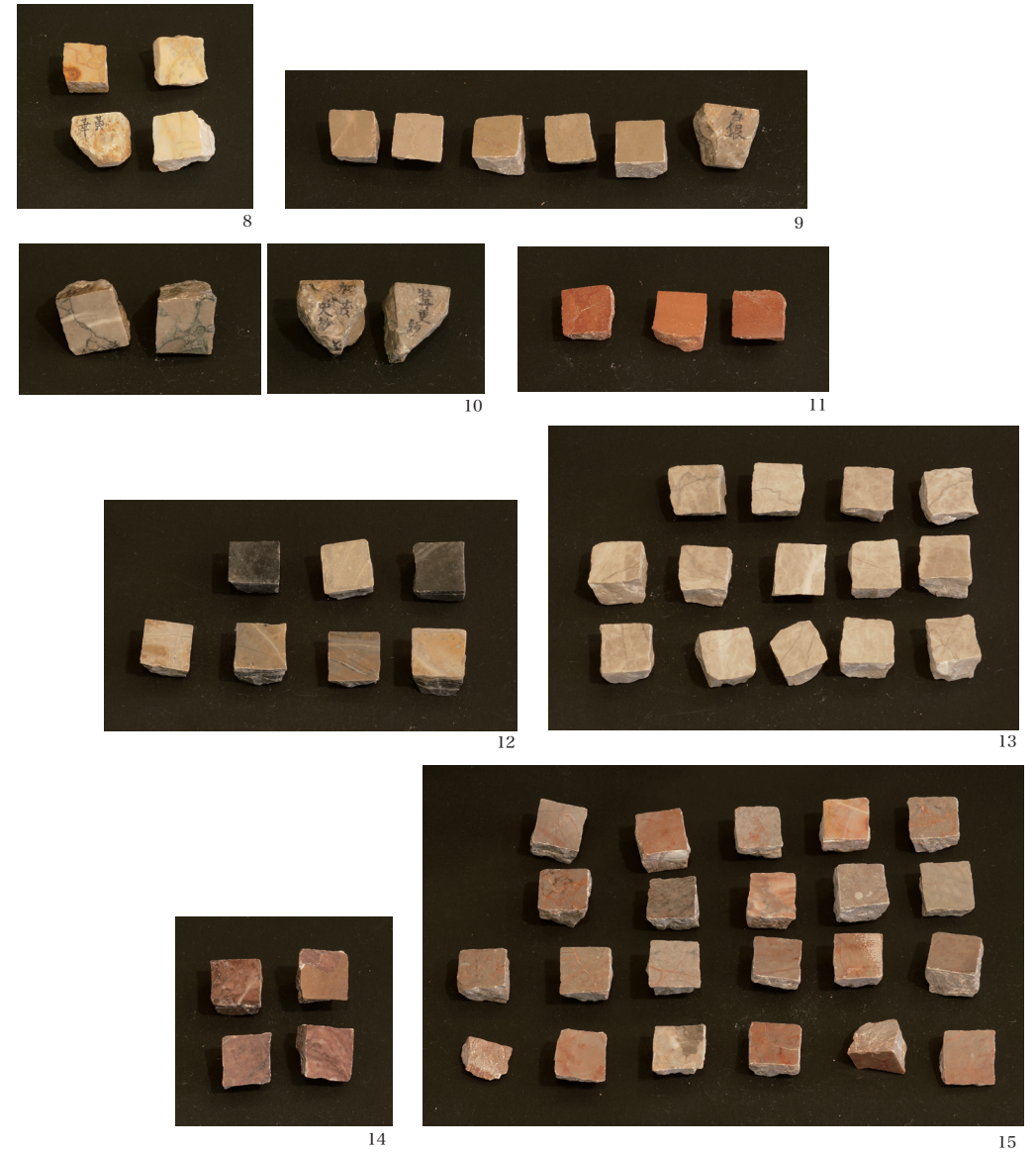


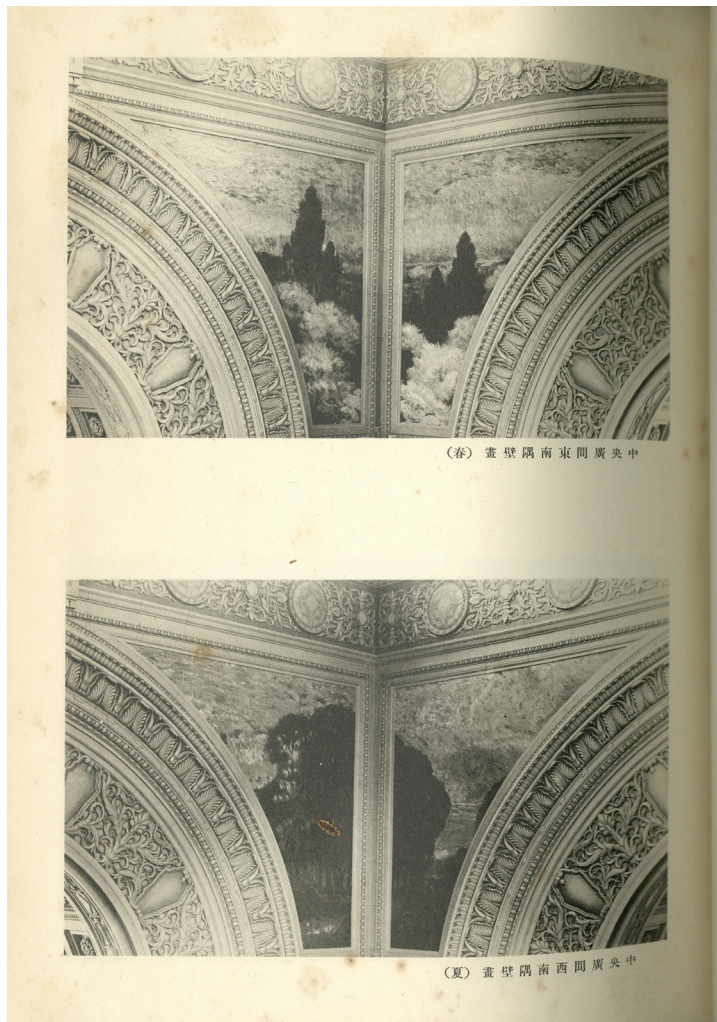
帝国議会議事堂便殿前広間床大理石モザイク見本

昭和初期か／大理石、蛇紋石、橄欖石16種／田中儀一旧蔵／最大：縦28、横23、高22、最小：縦17、横18、高12

儀一がデザインを手がけた便殿前広間床モザイクで使用された大理石の種類（厳密には蛇紋石と橄欖石を含む）は、『帝國議會議事堂建設報告書』（昭和13年〔1938〕）によれば、「金華、茨城白、白鷹、小櫻、薄雲、紅雲、鵬足、遠目鏡、美濃赤、蛇紋、土佐櫻、新淡雪の十三種」（実際に列挙されているのは12種）とある。議事堂建設は国産の材料のみによることが原則とされた。それまで、大理石のほとんどは外国産で、国産を用いることは稀であった。営繕管財局は工事に着手する前から見本を熱心に集め、これが日本での新しい良質の大理石の発見や大理石業の発展につながったという。新材料が出てくると、その見本を突き合わせて研究し、配色図の作り変えも行われた。なお、床モザイクの多種の大理石もすべて国産であるとの記録になっているが、儀一の回想によれば、イタリア産の黄橙色の大理石1種類のみ、アクセントをつけるために数万粒程度使われたとのことである。

1. 蛇紋〔蛇紋石〕 3点
2. 紅雲 10点
3. 淡雪 2点
4. 紅雲 6点
5. 霞 4点
6. 白薄雲 3点
7. 遠目鏡 2点
8. 黄華、金華〔「黄華」の文字入りの石あり〕 4点
9. 白銀〔同文字入りの石あり〕 6点
10. 加茂更紗、牡丹更紗〔同文字入りの石あり〕 2点
11. 美濃赤 3点
12. 竹葉〔橄欖石〕 7点
13. 白鷹 14点
14. 紅波紋 4点
15. 紅縞 22点
16. 鵬足 18点





「中央廣間東南隅壁畫（春）」および「中央廣間東南隅壁畫（夏）」

大蔵省営繕管財局編『帝國議會議事堂建設報告書』
大蔵省営繕管財局発行／昭和13年（1938）発行／函入り／田中儀一旧蔵／図版上：縦87、横141、
図版下：縦86、横141、書籍：縦257、横200

中央広間の四方には四季を表した油絵壁画が配される。画題は、春夏秋冬の順に「吉野の桜」「新緑の十和田湖」「日光の紅葉」「日本アルプス」と言われている。『帝國議會議事堂建設報告書』（昭和13年〔1938〕）にはこれらの壁画の制作者の記録は残されていないが、儀一は自身を含む、営繕管財局で建築設計を担当していた4人の制作者の名前の記録を残している。「春」は営繕管財局技師の安田清と儀一が輪郭を描き、仕上げは安田、「夏」は輪郭・仕上げとも儀一が担当した。「秋」は輪郭・仕上げともに同技手の高橋健司郎、「冬」は輪郭を同技手の熊谷年郎、仕上げを高橋と熊谷が行ったとある。当時の計画では、同様の画題で大理石モザイクをはめ込む予定であったが、予算の都合から、カンバスに油絵の壁画となったと言われる。



参考図版

「中央廣間」

大蔵省営繕管財局編『帝國議會議事堂建設報告書』
図版：縦186、横141

中央高塔の真下に位置する。床は2階層にあり、その上4階分が吹き抜けとなっている。天井高は32メートル62センチ。天井蛇腹は電気鑄造、上部の石膏製壁面はペイント仕上げ。ステンドグラスの裏には電燈が配され、人工天窓となっている。本図版の正面には、四季が描かれた四隅の油絵壁画のうち、「秋」が見える。儀一が構成と仕上げを手掛けた「夏」はその左手に位置し、本図版ではわずかに右端が写る。

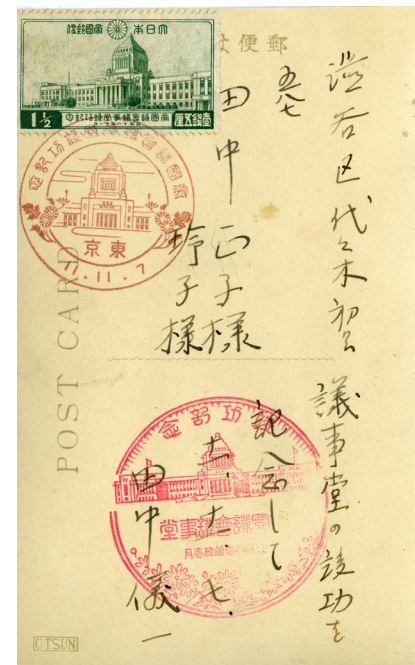


参考図版

「便殿前廣間便殿入口正面」

大蔵省営繕管財局編『帝國議會議事堂建設報告書』
図版：縦141、横190

儀一がデザインを手がけた便殿前広間。当館所蔵品として図案が残されている便殿入口上部大理石レリーフと便殿前広間床大理石モザイク（76-79頁）が確認できる。



「議事堂便殿前廣間」写真絵葉書

田中儀一から田中正子・玲子宛／昭和11年（1936）11月7日／ゼラチンシルヴァープリント、宛名面にインク書／ジーチャーサン製／宛名面に帝国議會議事堂竣工記念切手貼付、昭和11年11月7日付同記念特印、および同面下部に昭和11年11月同記念スタンプあり／縦139、横85

儀一が帝国議會議事堂竣工式の日に関与宛に送ったもの。写真には、儀一がデザインを手がけた便殿前広間が見え、当館所蔵品として図案が残されている便殿入口上部大理石レリーフと便殿前広間床大理石モザイク（76-79頁）の竣工当時の様子がわかる。葉書宛名面には、議事堂竣工記念切手に東京中央郵便局の同記念特印がある。同面下部には議事堂竣工記念スタンプに重ねて、「議事堂の竣工を記念して 十一、十一、七、田中儀一」と書かれている。記念スタンプは2種類の図案が作られ、議事堂構内仮設スタンプ押捺所で参観者が自由に押すことができたという。



参考図版

田中儀一・正子・玲子家族写真

森川写真館撮影／昭和10年代前半／ゼラチンシルヴァープリント、台紙貼付／本紙：縦103、横136、台紙：縦178、横223

幼少の娘・玲子が写ることから、帝国議会議事堂竣工の頃に撮影されたと思われる。

086



「議事堂」写真絵葉書

田中儀一から田中正子宛／昭和11年（1936）11月11日／ゼラチンシルヴァープリント、宛名面にインク書／ジーチーサン製／宛名面に帝国議会議事堂竣工記念切手貼付、同面下部に昭和11年11月同記念スタンプあり／縦85、横139

帝国議会議事堂の落成から4日後に、儀一が妻の正子宛に送った議事堂外観の写真絵葉書。葉書宛名面には、竣工式の日に送った絵葉書（85頁）に押されたものとは異なる絵柄の記念スタンプが押されている。左上（宛名を正対した時の左下）に印刷された「GTSUN」は、写真家の山端祥玉（明治20–昭和38〔1887–1963〕）が営んでいた写真業務専門会社ジーチーサン製であることを示す。

087



帝国議会議事堂竣工記念品小箱

藤井浩祐／昭和11年（1936）11月／ブロンズ製／松坂屋製／蓋に「浩祐」および底部に「帝國議會議事堂竣工記念 大正七年六月着手 昭和十一年十一月竣工」の刻銘あり／田中儀一旧蔵／底面縦105、底面横180、高（蓋付）52

議事堂正面の外観を蓋の表面に表した記念品。『帝國議會議事堂建設報告書』（昭和13年〔1938〕）に記載があり、竣工式の招待者に贈呈された。作者の藤井浩祐（明治15–昭和33〔1882–1958〕）は明治40年（1907）東京美術学校彫刻科を卒業した彫刻家で、文展や院展で活躍し、本作を手がけた当時は帝国美術院会員であった。営繕管財局から依頼を受けた藤井が原型を作り、その指揮監督のもと、株式会社松坂屋が製作した。皇室関係に献上された特製品は、同意匠であるが、小箱の内側に銀製プレート張り仕上げになっている。儀一旧蔵の小箱の中には開封したセブンスター・ロングサイズの煙草が入っており、儀一が煙草入れとして使用していたものか。



帝国議会議事堂竣工記念品木杯

昭和11年（1936）11月／朱漆塗金蒔絵、桧、桐箱入り／木屋漆器店製／杯裏に「帝國議會議事堂竣工記念」、底部に「昭和十一年十一月」の金文字あり／田中儀一旧蔵／杯：直径109、高35、底径44、箱：縦127、横127、高59

工事関係者に配布された公式記念品。『帝國議會議事堂建設報告書』（昭和13年〔1938〕）に記載がある。八弁の丸い花の周りに唐草花が金蒔絵であしらわれる。木屋（林久兵衛）は日本橋の通り三軒と称せられた東京漆器の名店の一つ。同梱の桧には、天正元年（1573）創業とあり、美術蒔絵を扱う店であることが英語でも紹介されており、国内外に漆器の販路を展開していたことがわかる。同店は明治28年（1895）から海外（米国）に漆器を輸出しており、議事堂のような一大国家プロジェクト竣工の記念品を請けるほど繁栄したが、戦後10年ほどで暖簾を下ろしたという。



帝国議会議事堂竣工式係員徽章

昭和11年(1936)11月／造花、リボン付き／リボンに「説」の文字あり／田中儀一旧蔵／全長162、花径100

竣工式の徽章は参列員用と係員用が作られ、色分けがなされていた。『帝國議會議事堂建設報告書』（昭和13年[1938]）の写真ではこの色は判別できないものの、竣工式参列者や関係者が皆そろって菊の胸花をつけていたことがわかる。儀一旧蔵の徽章は、係員用のうち、桃色の菊花に緑黄色の緑がついた白色リボンであるため、供覧係・設備係用のもの。リボンに書かれた「説」の文字は、供覧当日係員として、儀一が説明係を務めたことを示す。『帝國議會議事堂竣工式典記録』（昭和12年[1937]）の係員の項の説明係に「田中囑託」の記載が確認できる。



帝国議会議事堂竣工記念電車往復乗車券

東京市電気局発行／昭和11年(1936)11月／紙に印刷／上部に「帝國議會議事堂竣工記念」の印字あり／田中儀一旧蔵／縦51、横58

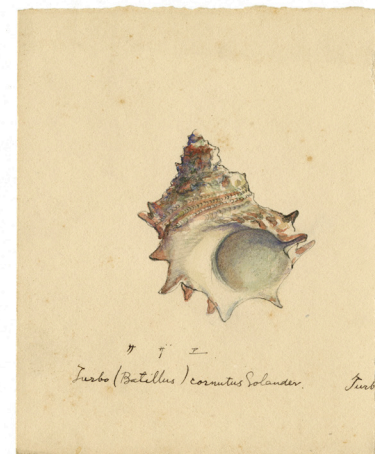
東京市が議事堂竣工記念のため作製した記念乗車券として『帝國議會議事堂建設報告書』（昭和13年[1938]）に記載がある。中央に、出来たばかりの議事堂の正面玄関と中央塔の姿が印刷される。左右には、往路と復路の切り取り式降車券が付いていたはずであるが、使用済みのため、中央の議事堂の両脇に配された鳥の尾の部分より先は左右とも切り取られている。



帝国議会議事堂外観レリーフ

制作者未詳／昭和初期／石膏製／田中儀一旧蔵／長径285、短径147

議事堂竣工記念品やその他記念製作品としての記録は見つからない。建物前の植栽がなく、塔が鉄骨組みのよう見え、その左右にクレーンのようなものが確認できることから、ここに描かれた議事堂は未完成の状態であると推測される。制作者は未詳であるが、少数の関係者のみが入手できたものか。彩色は儀一が施した可能性がある。



スケッチ

田中儀一／昭和3年(1928)、昭和6年(1931)頃か／紙に鉛筆、水彩、木箱入り／一部に「1928 G.Tanaka」「1931 G.Tanaka」のサインあり／シート最大：長辺187、短辺149、シート中：長辺160、短辺120、シート小：長辺52、短辺45、箱外寸：長辺330、短辺220、高58

儀一は少年期から好んで絵を描き、中学時代からは曾宮一念(明治26–平成6 [1893–1994])に師事し、画家の道に進む夢を抱いていたという。実際には、建築・デザイン関係を仕事にしたが、調査先などで仕事用に描き残したもののほかに、趣味としても、生涯にわたり多くのスケッチや水彩画を描き続けた。帝国議会議事堂装飾図案(76–79頁)の輪郭線が生き生きと見えるのは、儀一の画才によるところだろう。本スケッチ群は約150点から成り、一つの木箱に収められていた。一部に年号の入ったサインが確認できるため、議事堂の仕事に関わっていた頃のものと思われる。昆虫、鳥、貝、魚が精緻に描かれ、学名が添えられているものがあるほか、風景や牛・豚のスケッチも見られる。儀一の博物学的関心も窺い知ることができる。



スケッチ

094

095



展示会場風景







田中儀一旧蔵品

東京大学総合研究博物館研究部所蔵

最後の所有者である田中儀一（明治35-昭和60 [1902-1985]）の名を冠した本資料体は、儀一に加え、不二（明治10-大正11 [1877-1922]）および林太郎（安政3-大正13 [1856-1924]）にゆかりのものを中心に、田中家に由来する文書、写真、物品、書籍等から構成される。「工学」関係だけでなく、歴史や美術資料など多様な分野にまたがる。資料数は合わせて千件を超え、近代日本の工学史や文化史を語るうえで貴重なものとなっている。田中家は江戸から明治時代にかけて発明家および技術者として活躍した田中久重（儀右衛門）（寛政11-明治14 [1799-1881]）に連なり、久留米や佐賀、そして東京にて、周辺の技術者集団とともに近代日本の工学技術発展に寄与した一族である。



参考文献リスト

田中林太郎

大川三雄『明治・大正昭和戦前期における和風大邸宅の変容と展開に関する史的研究——近代和風建築史確立のための基礎的研究』博士論文（日本大学）、1999年9月。

大蔵省印刷局編『官報』第1449号、13頁、1888年5月2日。

大蔵省印刷局編『官報』第5326号、157 (5) 頁、1901年4月9日。

大蔵省印刷局編『官報』第5348号、98 (2) 頁、1901年5月4日。

大蔵省印刷局編『官報』第7053号、5 (5) 頁、1907年1月4日。

大蔵省印刷局編『官報』第7490号、382 (14) 頁、1908年6月16日。

小野木重勝『日本の建築 明治大正昭和 2様式の礎』東京：三省堂、1979年。

旧工部大学校史料編纂会編『旧工部大学校資料・同付録』東京：青史社、1978年復刻（虎之門会昭和6年刊）。

小玉正任『国宝 迎賓館赤坂離宮——沿革と解説』東京：茜出版、2012年。

鈴木博之監修・内匠寮の人と作品刊行委員会編『皇室建築——内匠寮の人と作品』東京：建築画報社、2005年。

多久島澄子『日本電信の祖 石丸安世——慶応元年密航留学した佐賀藩士』東京：葦文社、2013年。

田中林太郎「皇居二重橋抗抵力試験ノ成績報告」『工學會誌』7 (79)、666–670頁、1888年7月。

中村達太郎「皇居御造榮の頃」『建築雑誌』46 (601)、856–870頁、1935年7月。

日本建築学会環境工学委員会設備分科会赤坂離宮建築設備小分科会「旧赤坂離宮建築設備調査報告（その1）」『建築雑誌』86 (1044)、971–975頁、1971年11月。

日本工学会『明治工業史 機械・地学篇』東京：日本工学会明治工業史発行所、1930年。

橋本明夫・宮崎光二・宮田洋平他「飾電燈の復旧——東京芸術大学所蔵皇居旧二重橋飾電燈の修復報告」『東京芸術大学美術学部紀要』35、5–25頁、2000年7月。

平井敦・小幡祥一郎「皇居造営計画と二重橋架替工事——その概報」『土木学会誌』49 (10)、83–85頁、1964年10月。

藤森照信「かわいそうな宮殿 赤坂離宮」『建築探偵東奔西走』東京：朝日新聞社、1997年、8–15頁。

藤森照信「皇居のドラゴン 二重橋」『建築探偵雨天決行』東京：朝日新聞社、1997年、78–81頁。

宮内敬保「皇居二重橋」『道路』(296)、844–847頁、1965年10月。

和氣慎「皇居新二重橋高欄と精密鑄造技術の想いで」『産業能率』(654)、22–25頁、2013年1月。

「片山博士を弔ふ」『建築雑誌』31 (372)、1–22頁、1917年12月。

『朝日新聞』朝刊、大阪：朝日新聞社、1888年5月5日4面。

『朝日新聞』朝刊、東京：朝日新聞社、1904年2月2日1面。

『読売新聞』朝刊、東京：読売新聞社、1886年5月29日4面。
『読売新聞』朝刊、東京：読売新聞社、1906年2月8日6面。
『読売新聞』朝刊、東京：読売新聞社、1924年4月30日11面。

田中不二

井口在屋・田中不二『木材ノ剪断試験報告』（1906年3月）『震災豫防調査会報告』55、1906年9月。
井口在屋・田中不二『木材の剪断試験報告』『機械學會誌』9（17）、1907年9月。
大蔵省印刷局編『官報』第5701号、114（2）頁、1902年7月7日。
大蔵省印刷局編『官報』第7208号、254（6）頁、1907年7月10日。
大蔵省印刷局編『官報』第7490号、383（15）頁、1908年6月16日。
大蔵省印刷局編『官報』第7519号、512（16）頁、1908年7月20日。
大蔵省印刷局編『官報』第7627号、576（2）頁、1908年11月27日。
大蔵省印刷局編『官報』第8330号、49（49）頁、1911年4月1日。
大蔵省印刷局編『官報』第442号、401（17）頁、1914年1月21日。
大蔵省印刷局編『官報』第792号、682（10）頁、1915年3月26日。
加藤洋治「ウエスト先生」『日本造船学会誌』654（0）、675頁、1983年。
柴田畦作・田中不二「第五回材料試験萬國會議議事概要」『日本鑛業會誌』307、1910年9月。
Shiba, C. & Tanaka, F. “Corrosion Test of Iron and Steel.”（斯波忠三郎・田中不二「鐵及び鋼の腐蝕試験」1904年4月）『機械學會誌』16（28）、1-5頁、1912年11月。
田中不二「安全辨に就て」『機械學會誌』6（9）、1-14頁、1903年6月。
田中不二・内丸最一郎『機械設計及製圖』前編、東京：丸善株式会社、1906年。
田中不二・内丸最一郎『機械設計及製圖』後編、東京：丸善株式会社、1906年。
田中不二「高速道具鋼に就て」『機械學會誌』9（16）、1-38頁、1906年11月。
田中不二「第五回内國勸業博覧会出品　調べ革試験成績表　明治三十六年四月」『機械學會誌』9（17）、39頁、1907年9月。
田中不二「木材の結局曲げ強さと田中公式」『建築雑誌』22（256）、156-161頁、1908年4月。
田中不二「木材ノ結局曲ゲ強サト田中公式」（1907年11月）『震災豫防調査會報告』61、1908年7月。
Tanaka, F. “Tension Tests of Copper Plates.”（田中不二「銅板の引き張り試験」1906年3月）『機械學會誌』10（18）、38-40頁、1908年2月。
Tanaka, F. “Tension Test of and Slow Stretch in India-rubber.”（田中不二「護謨の引き張り試験及び遅き伸び」1905年12月）『機械學會誌』16（28）、7-14頁、1912年11月。
田中不二『應用力學　材料及び構造強弱學』第一編、東京：丸善株式会社、1913年。
田中不二『應用力學　水力學及び水力機械』第二編、東京：丸善株式会社、1915年。
田中不二「軟鋼軸材料に關する繰返し内力試験成績」（1915年2月）『機械學會誌』18（38）、1-10頁、1915年4月。
田中不二『機械製作法　鑄造　鍛造』第一編、東京：丸善株式会社、1919年。
田中不二『機械製作法　工具　工作機械』第二編、東京：丸善株式会社、1923年。
出水力「日本の機械工学の開拓者・井口在屋（Ⅰ）——機械工学教育の形成過程を通して」、日本産業技術史学会『技術と文明』1（1）、55-76頁、1985年3月。
出水力「日本の機械工学の開拓者・井口在屋（Ⅱ）——機械工学研究の軌跡をたどって」、日本産業技術史学会『技術と文明』2（1）、23-43頁、1985年9月。
東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史　部局史　三』東京：東京大学出版会、1987年。

東京帝國大學學術大觀刊行会編『東京帝國大學學術大觀　工学部・航空研究所』東京：帝國大學新聞社、1942年。
内藤「雜記　新論新説　工学博士田中不二著　應用力學　第二編　水力學及水力機械」『建築雑誌』30（349）、28頁、1916年1月。
中尾文栄『齒車技術ホール通信　11』豊精密工業株式会社（社内報）、2004年5月。
日本建築学会編『近代日本建築学発達史　復刻版』東京：文生書院、2001年。
日比勝治『藤山博士と三居澤』三居澤史跡保存發起人、1937年。
森貞彦「イギリスから日本への製図教育の導入に際して起こった一つの現象について」『日本工業教育協会誌』35（3）、18-19頁、1987年7月。
『東京帝國大學』東京：小川寫眞製版所、1904年。
『朝日新聞』朝刊、東京：朝日新聞社、1902年7月8日2面。
『朝日新聞』朝刊、東京：朝日新聞社、1917年8月5日4面。
『朝日新聞』朝刊、東京：朝日新聞社、1922年11月20日3面。
『読売新聞』朝刊、東京：読売新聞社、1913年12月24日2面。
『読売新聞』朝刊、東京：読売新聞社、1914年7月26日3面。
『読売新聞』朝刊、東京：読売新聞社、1915年6月3日3面。
国立公文書館アジア歴史資料センターウェブサイト：https://www.jacar.go.jp

田中儀一

江上綏「第五章　石、木、紙の造形と技術」伊東俊太郎他編『講座・比較文化』東京：研究社出版株式会社、153-179頁、1977年。
大熊喜邦「議事堂建築の概要」『建築雑誌』51（623）、196-209頁、1937年2月。
大蔵省營繕管財局編纂『帝國議會議事堂建築の概要』東京：大蔵省營繕管財局、1936年。
大蔵省營繕管財局編纂『帝國議會議事堂竣功式典記録』東京：大蔵省營繕管財局、1937年。
大蔵省營繕管財局編纂『帝國議會議事堂建設報告書』東京：大蔵省營繕管財局、1938年。
『海軍施設系技術官の記録』刊行委員会『海軍施設系技術官の記録』東京：『海軍施設系技術官の記録』刊行委員会、1972年。
白谷達也・松谷巖『国会議事堂』東京：朝日出版社、1990年。
長谷川香「室内装飾にみる図案家・吉武東里（2012年度研究発表梗概）」『家具道具室内史　家具道具室内史学会誌』（4）、2012年、111-112頁。
藤森照信「複雑な、複雑な出生の秘密　国会議事堂」『建築探偵奇想天外』東京：朝日出版社、1997年、183-186頁。
「国会議事堂四季の絵」『東奥日報』夕刊、青森：東奥日報社、1982年12月3日1面。

田中家の系譜

今津健治『からくり儀右衛門——東芝創立者田中久重とその時代』東京：ダイヤモンド社、1992年。
國武金太郎『田中近江大掾源久重』東京：全國發明品博覽會協賛會、1918年。
鈴木一義監修・東芝未来科学館田中久重編集委員会『田中久重　万般の機械考案の依頼に応ず』神奈川：東芝未来科学館、2014年。
田中近江翁顕彰会編『田中近江大掾』久留米：田中近江翁顕彰会、1931年。
堀江恒三郎編『田中久重翁』東京：堀江恒三郎、1897年。

前田清志『日本の機械工学を創った人々』東京：オーム社、1994年。
『芸術新潮 特集 あっぱれ!科学が花開かせた江戸の芸術』43 (10)、東京：新潮社、1992年10月。
『芸術新潮 特集 ニッポンモノづくり奮闘記——技術大国への道は江戸に始まった!』52 (7)、東京：新潮社、2001年7月。

工学史

上田弘之著・国際電信電話株式会社、KDDエンジニア・アンド・コンサルティング編『日本工業の黎明——遣隋使から工部大学校まで』東京：国際電信電話、1981年。
植村正治「明治初期工学教育機関の設立——工学寮について」『社会科学』89、同志社大学、21–47頁、2010年11月。
大蔵省『工部省沿革報告』東京：大蔵省、1889年。
大淀昇一「明治期日本社会における先導的技術者養成機関の意義と変容（一）」『島根大学教育学部紀要教育科学』21、31–54頁、1987年12月。
大淀昇一「明治期日本社会における先導的技術者養成機関の意義と変容（二）」『島根大学教育学部紀要教育科学』22 (2)、1–28頁、1988年12月。
柿原泰「お雇い外国人とイギリス帝国のエンジニア——新たなお雇い外国人研究に向けて」『東京大学史紀要』(18)、33–44頁、2003年3月。
柏原宏紀『工部省の研究——明治初年の技術官僚と殖産興業政策』東京：慶應義塾出版会、2009年。
加藤詔士「東京大学所蔵『ヘンリー・ダイアー関係図書』をめぐる考察」『東京大学史紀要』(20)、1–24頁、2002年3月。
加藤詔士「工部大学校書房掛猪俣昌武とお雇い教師ヘンリー・ダイアー」『東京大学史紀要』(23)、25–39頁、2005年3月。
加藤詔士「工部大学校お雇い教師ヘンリー・ダイアー・コレクション展」『東京大学史紀要』(25)、19–39頁、2007年3月。
加藤詔士「東京帝国大学名誉教師ヘンリー・ダイアー」『東京大学史紀要』(28)、23–40頁、2010年3月。
北嶋磯舟『日本の文化へ——我国最初の大砲汽車汽船佐賀藩の大苦心』佐賀：八谷大麟、1927年。
後藤単伝編『丁友會パンフレット第1号 工部大学校昔噺』東京：後藤単伝、1927年。
古屋野素材「工学寮（工部大学校）と英国の科学・技術教育の発展」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』(15)、61–67頁、1975年2月。
鈴木淳編『工部省とその時代』東京：山川出版社、20002年。
高橋雄造「エアトンとその周辺——工部大学校お雇い外国人教師についての視点」『技術と文明』7 (1)、1–32頁、1991年12月。
館昭「日本における高等技術教育の形成——工部大学校の成立と展開」『教育学研究』43 (1)、13–23頁、1976年。
玉井哲雄編・石黒敬章企画『よみがえる明治の東京——東京十五区写真集』東京：角川書店、1992年。
角田真弓「工学系研究科建築学専攻所蔵 旧備品台帳（一）旧工部美術学校所蔵資料」『東京大学史紀要』(28)、65–83頁、2010年3月。
角田真弓「工学系研究科建築学専攻所蔵 旧備品台帳（二）旧工部美術学校所蔵資料」『東京大学史紀要』(29)、67–86頁、2011年3月。
角田真弓「工学系研究科建築学専攻所蔵 旧備品台帳（三）旧工部美術学校所蔵資料」『東京大学史紀要』(30)、35–54頁、2012年3月。
東京大学編『学問のアルケオロジー』東京：東京大学、1997年。
東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史 一』東京：東京大学出版会、1984年。
東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史 二』東京：東京大学出版会、1985年。

日本工学会『明治工業史 鋳業編』東京：日本工学会明治工業史発行所、1930年。
日本工学会『明治工業史 建築編』東京：日本工学会明治工業史発行所、1930年。
三好信浩『明治のエンジニア教育——日本とイギリスのちがいがい』東京：中央公論社、1983年。
三好信浩編「明治初期専門教育成立に関する公文関係史料」『大学研究ノート』61、広島大学、1–101頁、1985年3月。

写真史

鳥原学『日本写真史 上』東京：中央公論新社、2013年。
長野重一・飯沢耕太郎・木下直之編『日本の写真家 別巻 日本写真史概説』東京：岩波書店、1999年。
日本写真家協会編『日本写真史 1840–1945』東京：平凡社、1971年。



謝辞および展示協力者一覧

謝辞

本展覧会の準備のために、田中儀一旧蔵品の寄贈者である江上光子氏には貴重な情報提供ならびに追加の寄贈資料をいただいたほか、江上綏氏には、さまざまな情報提供をいただきました。

小石川分館に収蔵している本資料体に興味をもち、本展覧会開催のきっかけをつくってくれた分館学生ボランティア諸君には、展覧会実現のためのさまざまな準備をお手伝いいただいたほか、歴代のインターメディアテク学生ボランティアおよび博物館実習生には、資料整理にご協力いただきました。

また、公益財団法人東芝国際交流財団には、シンポジウム『工学主義と近代日本』の関連事業として、本図録の刊行に助成をいただきました。

ここに心より感謝の意を表します。

展示協力者一覧

[2016年度小石川分館学生ボランティア]

資料整理

太田萌子、垣中健志、杉本渚、高橋彩華、利根川薫、吉田敦則、米村美紀、米村友希

資料実測・スキャン

垣中健志、坂口舞、杉本渚、吉田敦則、米村美紀、米村友希

資料目録作成

垣中健志、米村美紀

資料調査

垣中健志

連絡・調整担当

米村美紀





● 付録

田中儀一旧蔵品展示履歴

常設展示『Made in UMUT——東京大学コレクション』
「帝室工藝の粋——田中儀一旧蔵品より」

会期：2013年8月5日-
会場：インターメディアテク2階COLONNADE3 (ギャラリー3)



実験パフォーマンス『Play IMT (3)——インターメディアテクにおける演劇創作の可能性』
引き出しのユニット「愛の家族写真」

*パフォーマンス・ユニットの一部として田中不二の家族写真資料を展示
会期：2015年8月18日
会場：インターメディアテク2階COLONNADE 2 (ギャラリー2)



インターメディアテク博物誌シリーズ

特別展示『植物画の黄金時代——英国キュー王立植物園の精華から』

＊関連展示物として田中不二旧蔵ポストカードアルバムおよびキュー植物園ガイドブックを展示

会期：2017年9月16日-12月3日

会場：インターメディアテク2階BIS (カプセル)



田中儀一旧蔵品関連イベント

ギャラリートーク10

日時：2017年2月25日（土） 12:30-13:00

会場：小石川分館

案内：垣中健志（小石川分館学生ボランティア）

ギャラリートーク11：工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事

日時：2017年6月3日（土） 12:30-13:00

会場：小石川分館

案内：寺田鮎美（総合研究博物館特任准教授／文化政策、博物館論）

トークイベント『センス・オブ・ワンダー』「田中家と工学主義——林太郎・不二の仕事を中心に」

日時：2017年10月12日（木） 12:20-13:20

会場：東京大学工学・情報理工学図書館（工2号館図書室）

講師：寺田鮎美（総合研究博物館特任准教授）

主催：東京大学工学部・工学系研究科、情報理工学系研究科

シンポジウム『工学主義と近代日本』

日時：2018年11月17日（土） 14:00-17:00

会場：インターメディアテク2階ACADEMIA（レクチャーシアター）

主催：東京大学総合研究博物館

助成：公益財団法人東芝国際交流財団

プログラム：

第1部 レクチャー

「趣旨説明——田中家三代、林太郎・不二・儀一の仕事から」寺田鮎美（東京大学総合研究博物館／博物館論・文化政策）

「スコットランドと近代日本とのつながり——渡邊嘉一の事例」マイルズ・オグルソープ（ヒストリック・エンヴァイロメント・スコットランド／産業遺産）

「エアトンと工部大学校の理学」有賀暢迪（国立科学博物館／物理学史・数理科学史）

「山口喜三郎の見たジョンズ・ホプキンス大学」ユリア・フルマー（ジョンズ・ホプキンス大学／科学技術史）

「ジョサイア・コンドルと最初の日本人建築家たち」松本文夫（東京大学総合研究博物館／建築学）

第2部 ディスカッションおよびQ&A

小石川分館紹介

■概要

東京大学総合研究博物館小石川分館は国指定重要文化財である旧東京医学校の建築を活用したミュージアム施設である。2001年の開館以来、学内に蓄積された学術標本で、常設展示、企画展示、実験展示など、各種のイベントを行ってきたが、2013年12月を機に、建築ミュージアムとして新たに生まれ変わることになった。本館は現存最古の教育建築遺産として知られ、それ自体がすでに明治初期の擬洋風建築の実物展示となっている。

この類稀な建築空間では、「建築博物誌／アーキテクニカ」の常設展示が一般公開されている。ここで云わんとするところは、学術標本の展示による「建築」概念の拡張である。縮体された模型世界から等倍の身体空間へ、造形された建築学資料から採集された民族学資料へ、これら「建築」概念の周囲に広がる汎界的な領野を、小石川分館の建築が抱き込むことになる。この狙いは、事物を構成し、事象を統合する諸原理を「アーキテクチャ」の一語で括り、その俯瞰的な視座に立って、自然物から人工物まで、サイエンスからアートまで、横断的に結ぶことのできる「場」を、この施設に定位させることなのである。

館内の展示は、建築模型、東京大学建築、自然形態、空間標本、建築紀行、身体空間の六つのコーナーに分かれている。幅広い万象の「アーキテクチャ」を探究しようとする者にとって、本館が新しいアイディアやフォルムの創造を喚起する「場」となることを狙いとしている。



■展示

旧東京医学校本館（国指定重要文化財）

小石川分館は東京大学に現存する最古の学校教育用建物であり、明治初期の木造擬洋風建築の貴重な歴史遺産である。小石川分館の前身となる旧東京医学校本館は、明治9年（1876）工部省営繕局により本郷キャンパス内に建設された。明治10年（1877）には、東京開成学校と東京医学校が合併して東京大学が創設され、それにともない旧本館もまた医学部の中核施設として使われることになった。大学病院再編にともない、明治44年（1911）に建物の前半部分が赤門脇へ移築され、史料編集掛がそこに入居することになった。その際の移築設計案は、東京帝国大学営繕掛の技師山口孝吉になるもので、施設規模が縮小されるとともに、塔屋、窓枠、手摺等が改造され、現在の姿に近いものとなった。昭和40年（1965）に本郷で解体され、昭和44年（1969）には、理学部附属植物園（小石川植物園）内の現在地へと移築されている。建物は昭和45年（1970）に国の重要文化財に指定され、2001年11月から、東京大学総合研究博物館の小石川分館として一般公開されている。数度にわたる移築、改修を経た建築ではあるが、洋風、唐風、和風の三要素の混交形式に原型の名残が残っている。建物全体の古典的な比例、中央にある塔屋と玄関間、和小屋の構造、復元組物付の丸柱、擬宝珠高欄、空調設備を入れたコア、新意匠の階段手摺などのディテールには、伝統とモダンの結託するさまを見取ることができる。

建築模型

医学部標本室から管理換された昭和初期の鋼鉄製展示ケースのなかに収められているのは、世界の有名建築の縮体模型である。これらの建築模型は、2008-2009年に開催された「UMUT——オープンラボ—建築模型の博物都市」展を機に制作され、その後拡充されたものである。第一群は近現代ミュージアム建築の模型である。古典形式に依拠した原型のミュージアム建築、「ホワイト・キューブ」に代表される汎用的ミュージアム建築、さらには建築の固有性を高めた現代的ミュージアム建築が、縮尺300分の1の模型で提示される。第二群は古代から現代に至る、ミュージアム建築以外の建物模型である。内外の著名な近現代建築が選ばれており、建築種別は住宅建築から公共施設まで幅広い。建物の規模に応じて、縮尺50分の1、100分の1、300分の1で制作されているが、比較できるよう展示ケースごとに縮尺が統一されている。



東京大学建築

明治・大正期の本郷キャンパスの歴史的な校舎建築の模型が展示されている。東京帝国大学医科大学法医学教室、医科大学法医学解剖及附属室、工科大学造船造兵学教室、理科大学動物地質鉱物学教室、医科大学医院病室改築ニ差障建物（旧東京医学校本館）、法科大学講義室である。このうち、旧東京医学校本館（現小石川分館）を除く建物は、大正12年（1923）の関東大震災で崩壊し、現存していない。これらの精巧な縮尺100分の1木製模型は、本部施設部に残された建築古図面を基に、イタリアで最高の木工職人として知られた故ジョヴァンニ・サッキとその工房によって制作された。イタリアにはルネサンス以来の木工模型製作の伝統があり、本作品群はその最良の継承者と目されていたサッキ親方の遺作となった。



身体空間 (ゲル)

民族学標本を展示する二つの身体空間は、可動性の民族建築の実物パーツを中心に据え、われわれの等身大の身体とそれを取り巻く建築空間の相関性を意識する「場」となる。内モンゴルで収集されたゲル（天幕）は、遊牧民の日常生活に適うように作られており、一通りの技術を習得すれば、解体と構築は簡単である。絶えず移動を繰り返す遊牧生活と地上に構築される建築は、一見あい矛盾するもののようにも思われるが、建築の可動性や建材の消費抑制が、現代建築の課題の一つであるとするなら、遊牧民の建築観の示唆することも少なくないのではないか。



自然形態

動物学、植物学、鉱物学、数学など、多様な学術研究から見いだされた「自然のアーキテクチャ」を、実物と模型で提示してみせる。今回選定されたのは、ドイツのクラント商会で製作された鉱物結晶模型群、クルマガイ (Architectonica trochlearis (Hinds, 1844)) を含む貝類標本、多面体・螺旋・ノット・トーラスなど各種の数理科学模型である。造形の妙味を示す形態標本群には、「アーキテクチャ」をデザイン化する際に役立つヒントが横溢している。



空間標本

建築模型のうち、とくに規模が大きいもの、内部空間に特徴があるものが展示されている。精巧なファサードと重厚な内部空間で知られるサン・タンドレア教会（レオン＝パッティスタ・アルベルティ）、大仏様の構造を伝える浄土寺浄土堂（俊乗坊重源）、溪流につくられた落水荘（フランク・ロイド＝ライト）、対称性を徹底追究したヴィラ・ロトンダ（アンドレア・パラディオ）、ゴシック的空間をコンクリートで実現したランシー教会堂（オーギュスト・ペレ）、歴史遺構の上に新たな建造物を重ねたヘドマルク博物館（スヴェレ・フェーン）、ビザンティンの大ドームの到達点を示すイスタンブールのハギア・ソフィアが展示されている。なお、展示ケースの脚部には、旧東京中央郵便局舎の外壁スチール窓枠が再利用されている。



身体空間 (カヌー)

民族学標本を展示する二つの身体空間は、可動性の民族建築の実物パーツを中心に据え、われわれの等身大の身体とそれを取り巻く建築空間の相関性を意識する「場」となる。三組の櫓とセットになった、台湾ヤミ族のカヌーは、見方を換えると水上建築でもある。展示ケース内には、建築の周辺から外部にかけて、身体と触れ合うさまざまなモノが並んでいる。



東京大学構内写真

館内各所に配した写真は、小石川分館の主要コレクションの一つである、東京帝国大学営繕課旧蔵のガラス乾板3282枚のなかから選び出された東京大学建築の断片である。これらの写真は、関東大震災復興期に工学部教授として本学の営繕事業を担い、後に東京大学総長となった建築家内田祥三（明治18–昭和47 [1885–1972]）の指揮で撮影されたものである。

小石川分館特別展示図録

工学主義——田中林太郎・不二・儀一の仕事

展示企画 寺田鮎美＋鶴見英成＋松本文夫＋永井慧彦

編集 寺田鮎美

編集補助 藏田愛子＋吉川創太

デザイン 関岡裕之

写真 東京大学総合研究博物館

発行日 2019年3月31日

発行 東京大学総合研究博物館

印刷 秋田活版印刷株式会社

©2019東京大学総合研究博物館

本図録の刊行は、シンポジウム『工学主義と近代日本』の関連事業として、
公益財団法人東芝国際交流財団の2018年度助成を受けました。